川柳塔

昭和十三年一月九日第三種郵便物認可
昭和六十三年五月二十五日印刷
昭和六十三年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七三三号

日川協加盟

No. 7 3 3

六月号

友好と観光　中国吟行の旅

北京―洛陽―西安―上海

□63年9月18日出発
□6日間コース
□費用23万7,000円
（全食事付）
□人員25名かぎり
（詳細は次号に発表します）

川柳塔社

大雁塔（西安市）

NEW FORMAL COLLECTION

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマンと
フォーマルと

OSK JEFF ORIGINAL DESIGN

株式会社オーエスケー
〒540　大阪市東区南新町1―13
☎06(941)8015

縁起

西尾　栞

私の家の小さい庭に、八重桜が二本今を盛りと咲いている。

見上げていると、折からの風に花びらが、ハラハラと散っている。

大変美しい。

その美しい花を支えているのは枝である。

枝を支えているのは幹である。

幹を支えているのは根である。

根は見えないが土の中で活躍している。

私達は綺麗な花を見るが、それを支えている枝、幹、根をすっかり忘れている。

日常の生活に於ても、綺麗な花にのみとらわれて、土にもぐった根っ子を忘れがちである。

この世の中のものは

すべて色々の関係の中で出来上っている。単独に存在するものは一つもないということである。

例えば

人間の身体について考えてみると

目だけ、鼻だけ、指一本だけで

単独で存在することは出来ない

全体の関係の中で、お互いに関連しあって生かし生かされているわけである。

それが縁起である。

即ち、仏典の

一切衆生悉有佛性　である。

八十歳を過ぎると、佛に近い言葉が好きになる。

去る四月二十四日、我々の大先輩、尼緑之助氏が八十三歳で逝去された。

氏が出雲、いや、日本に残された川柳の根っ子は益々逞しく深く張りめぐらされている。そして五十八年に発刊された句文集の題は「生かされて」であった。氏は正に社会に、人間関係に、単独では存在し得ないことをチャンと知っておられて、「生かされて」という題名をつけられた。

謹んでご冥福をお祈りすると共に敬服するものである。

合掌

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

座右の句

夢に見る父は父よりやさしかり　（薫風）

私の句

取りとめのない一日で損をする　植村喜代

川柳塔　六月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

縁起……西尾栞…(1)
群れ……正本水客…(2)
川柳塔（同人吟）……西尾栞選…(4)
自選集……(31)
■川柳太平記(121)　川柳の群像　高橋散二……東野大八…(34)
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（三十六丁）……(36)
江戸川柳富籤志(1)……阿達義雄…(38)
瀬戸の海を斬る……本田恵二朗…(39)
水煙抄……黒川紫香選…(40)
63年度路郎賞・川柳塔賞候補作品中間発表……(60)
秀句鑑賞
　同人吟……小西雄々…(59)
　水煙抄……森井菁居…(75)

群れ

正本水客

日本海沿いに松江、出雲を過ぎ沿線に石州瓦の屋根が眼につく頃になると、まろやかな三瓶山の姿が見えてくる。親三瓶、女三瓶、孫三瓶、子三瓶と九〇〇米級のトロイデ型の山が寄りそうようにグルッと並んでいる。女三瓶から縦走して親三瓶の頂上近く一気に眺望がひらけた。遙かな谷あいから黒いかたまりが眼の前へひろがって来て、サアッと右手の山かげへ消えて行った。カラスの大群である。大声で鳴きからしていたか、サイレントであったか、テープが切れたように思い出せない。真黒い影の印象だけが鮮明である。麓の浮布池へ夕陽の赤が映っていた。

九州の熊本から別れて宇土半島の終点に三角港がある。対岸の島原へは一時間の船旅である。初めて九州の地を訪れた時だから随分昔の事である。船が島原湾の中程へ来たと思う頃、航跡をみだして船を追って来るものがある。イルカの大群であった。歓迎するかの

愛染帖……橘高薫風選…(63)
〈女性コーナー〉茴香の花……八木千代選…(66)
句評リレー　小林由多香・津守柳伸・塩満　敏・野村太茂津……(68)
言いまわしの個性(1)　あなたは和語派か漢語派か…竹内紫錆…(72)
始皇帝の地下軍団涌……東野大八…(76)
追悼　尼緑之助　柴田午朗・久家代仕男・恒松叮紅・園山多賀子……(79)
初歩教室……阿萬萬的…(82)
「雲」……森田熊生選…(84)
一路集「駅」……脇田米朝選…(84)
「好き」……田形美緒選…(85)
柳界展望……(86)
本社五月句会……(88)
各地柳壇（佳句地10選／松本はるみ）……(93)
■6月各地句会案内　107　■編集後記　109

座右の句

琴になり下駄になるのも桐の運　（柳拾十）

私の句

野次だけの議員無料のパスを持ち　青枝鉄治

ように、別れを惜しむかのように数知れぬイルカの群れが船を追ってくる。雲仙の山々が間近に見えてきた。あのイルカ達は今どこへ行ってしまったのだろうか。

昔はニシンの中心地として知られ、今は追分節で全国的に名のある江差、遅い桜に囲まれた松前、海浜の岩間に湧く温泉と岬一面を埋めて咲くツツジの美しさに心を満たして道南の旅を終え、北海道から本州へ渡るには函館の東浜から下北半島の大間崎へ、東日本フェリーでの2時間が最短距離であった。今では3月12日に姿を消した海上4時間の青函連絡船に替って海峡線が通って、北海道と本州とはつながったけれど。

大間の港へ一緒に降りた人達も何処かへ散ってしまって、荒涼とした岬の砂浜を独りで歩いていた。風に逆らうように処々に雑草が見える。ふと気が付くと何か黒いものがうごめいている。真黒い毛虫である。蝶か蛾の幼虫であろうか。殆んど一列になって続いている。気味が悪いというより何か荘厳な気持になって、踏み付けないように気をつけながらバス停への道を急いだ。今夜の宿は津軽海峡に面した下風呂温泉である。夜はイカ釣りの漁火がきれいな事であろう。

川柳塔

西尾栞選

野焼きの煙休耕田を囲み
七堂伽藍参考書がありすぎる
学校の下請のような家庭です
ひんまげた顔を画いてる天才かも知れぬ
一応こなせるのでコースの選択に迷い
白衣をまとえば夫をも寄せつけず

奈良市　天正千梢

一年生の帽子よ小さい旅人よ
一番先に来るのは妻の誕生日
握手して別れたこともある夕陽
ホットドッグ十七八の明るさよ
キリンの首淋しがり屋の父に似る
妻よふたたび砂丘を歩きはじめるか

竹原市　小島蘭幸

さくらさくらさくらとちるさくら

熊本市　有働芳仙

辞書にないことばを涙知っている
箱入りの虫のついたる美しさ
夜叉の面とれば素顔の美しき
地図にない道をデートが知っている
竹の子は裸になると絵にならず

大阪市　西出楓楽

カルチャーを駆けずりまわり満たされぬ
紙コップ軽い話にしてくれる
菜種梅雨プラスマイナス　マイナスに
忘れたらあかんあかんと忘れてる
あやまって済まないことであやまらぬ
賽の河原でまた捨石になりそうな

松原市　玉置重人

再会の喜びを知る大時計
万歩計すこし遠出をしたい春
無精ひげゆっくり剃って職がない

目にゴミが入り慌てたカブリツキ
戦友の訃報届いた春の冷え
建て替えた駅でうどんの値も上がり

倉敷市　小野克枝

種丸くきっときれいな花が咲く
小さくなった姑のお尻を拭いてやり
付き添いの交替がきて朝になる
墓石の応答を待つ雨上り
ゴミの大きさを競っている団地
山登る背中の袋だけ信じ

下関市　石川侃流洞

もう欲は晩酌だけの無位無冠
悠々自適なるようになるくらし
先はもう見えてるローカル線で行こ
火葬場で上中並を考える
見せられぬ涙を入れる小抽斗
丸坊主仮面はすでに捨てている

倉敷市　野田素身郎

病院の廊下が長い松葉杖
瀬戸大橋開通プラスマイナスあいなかば
共稼ぎ運転するのはお母さん
天気晴朗なれど売り上げは伸びず
年度末予算見事に使い切り
癌とは言えぬ見舞の足の重いこと

八尾市　高杉鬼遊

人生が面白くないチンドン屋
温泉の素で有馬の湯に遊ぶ
聴くものでないカラオケは歌うもの
ほめられることを政治はしたがらず
死に急ぐひと多かりき桜桃忌
六月の雨を余生がもてあまし

松原市　谷垣史好

六月の温気　徒労の日もあるさ
雨はしとしと質屋ののれん
春三日雌と名のつくもの嫌い
慶び事に金が出すぎていくようだ
不眠症を治す呪文にいかがです（竹下総理の演説）
サミットが思いやられる稚な顔

米子市　林瑞枝

わたしの出番握っている夜明け
谺して雨を踊らす円舞曲
役者は上ですネ苦いほほ笑みよ
茜して白壁添いの万歩計
切符いち枚ロビーでさりげなく捜す
花靄に亡母は笑うて語らない

兵庫県　遠山可住

ハイハイと騙されておく面白し
一と電車待って別れる肚を決め
おしゃべりの風にふところ覗かれる
麦の穂へ蛸がおいしい風が吹く
前売券二枚握って飢えている
十本の指で英語をしゃべって来

京都市　松川杜的

祖母の顔だんだん可愛くなってくる
地下鉄でアネサン六角…言うとれず
殺す気かと妻にタバコを叱られる
旧家とはいいなへっついさんがでんとある
マリーゴールドうれしい春を連れて来る

青函連絡の旅に

悔いはまだ海峡ラーメン食べ損ね

八尾市　宮西弥生

ベランダの花に水やるひとり言
独り身のひとりが楽し消燈す
五十歳に縁談がくる長寿国
友達が帰って男と二人酒
自己主張すぎて花の輪の外に
朧月羽目をはずしたこと悔いず

岡山県　土居耕花

坊さんも枕をふたつ置いてはる
クリームを盗む奇麗に老いたくて
枸杞の種蒔いて儚いスケジュール
肩叩く棒削ってる不倖せ
僕が寝て老妻が寝てそれで夜
標識を読んでいる間に突き当り

和歌山市　西山幸

自縄自縛けだるい春にしてしまう
紫雲英田の風青春は遙かなり
二度と言いませんと幾度言うことか
これからをおもい煩う日の欠伸
行方不明そんな終りを考える
思いすぎ尽しすぎては病んでいる

大阪市　津守柳伸

花あらし少女の胸はピンク色
こみあげる此の一日の応援歌
わたしには絶対来ない杉花粉
ご主人の血圧知っているペット
枯れ山水とっぷり夕陽傾斜する
衣食住足りて病いの二つ三つ

富田林市　藤田泰子

胃が痛む訳をおんな聞きたがり
世の中をみたら島へかえります
わたしだけ別と思っていた油断
嫁してよりおんなの暦梅漬ける
夕やけの錯覚噴水燃えている
ひと区切りつけてからでは花も散る

寝屋川市　稲葉冬葉

呆けてなどおれぬおれぬと嫁の留守
新婚の傍で朝刊読み終る
多数決とは宿命の中にいる
ほんとうに本当ですかお月様
都合つく話へ酒が利いてきた
他人様の尺度で謀る罪と罰

今治市　矢野佳雲

ムードだけで何も無かった蝶と花

おみおつけ惰性か愛の残り火か
手切れ金で開いたバーへ来いという
ワンタッチの愛で陥ちます鳳仙花
制服の背に服従と書いてある
コーヒーを湯呑に酌いで子と同居

藤井寺市　吉岡美房

子供等の寝顔に詫びて自首を決め
鎹のはずの子供で揉めている
出世した自慢の子ほど遠く住み
むずかしい話はあした花の宴
酌み交す酒は春です女です
ランドセルうちの孫だけなぜ可愛い

富田林市　板尾岳人

告訴する程でなし妻の便秘症
王様に逢いたくなって無我夢中
息の根をとめるナイフが錆びている
大地から人の情けを貰うべし
大胆なはなしが好きな神無月

桜井市　岩本雀踊子

無位無冠私は長屋のオッサンで
無視されたライバル憎めるだけ憎む
多情仏心男心の裏表
喧嘩せぬつもり夫婦の寿命表
頭の中の教育勅語が風化する

松江市　恒松叮紅

日の丸を揚げたり焼いたりする世相
あれからは自由に言える投書欄
寝たきりの幸せがある家の風
七人の一人が傍系の中に棲む
葬儀社へ相談したら持ち直し

松江市　柳楽鶴丸

妻も僕を鬼と言っている
女体めく夕陽に映える嫁ヶ島
春や春春のリズムでつくしん坊
大空をキャンバスにして虹を描く
今年もおあずけ地球儀を回す

松江市　舟木与根一

地上げ屋の息のかかった蕗のとう
札束で五分の魂なでられる
農村の在り方ダンスの夕べなど
経営がうまくいってるゴルフ焼け
フィクションのドラマの教師すばらしい

竹原市　森井菁居

二女も大学生（二句）

ラッキーが続いて恐い落とし穴
呉越同舟親も少うし偉くなる
花マニア日々好日の語を愛す
タイムリミット知ってる妻の知恵袋
期待してみる長男の左利き

弘前市　波多野五楽庵

やや誇らしげなる絵馬も見つけたり
終止符をうちたいと言うあれは冬

リトマスに浸してみたい足の裏
ラーメンで満足をする妻の舌
気配りも気疲れもない花の席　高槻市　辻　白渓子

はなむけの言葉をライバルから貰う
セールスの断わり老人買うて出る
なにくわぬ顔は犯人だけがする
捨て犬と雨をさけてる市場篭
頼み事選挙の話で気が軽い　伊丹市　樫谷寿馬

これしきで酔い知る酒徒となり果てぬ
節くれた脚としみじみ語る風呂
七十を拝む社で面を買う
結んで開いて遠い昔へ降るさくら
最終のバスからミンク一人降り　東大阪市　森下愛論

飲み過ぎの失言ジョークですまぬこと
愛と罪キザなセリフにあやつられ
心中考笑い話の共白髪
財テクに虚しい女のひとりごと
ろうそくのほのおが揺れる南無阿弥陀　岡山県　嘉数兆代賀

ひとすじの痛みに揺れる縄梯子
世の中を四角に歩いて来た疲れ
陽炎の向うは子のかお孫のかお
窓越しの月と話している独り

振り返る茨の道も花ざかり　奈良市　宮口笛生

馴染まれぬベッド入院一日目
検査検査検査手術まで疲れ
まだ跳ねる元気はあるぞ手術台
病窓に若草山が芽ぶく色
ねむるのも薬病室よくねむり　倉敷市　稲田豊作

セールスのしつこさ笑う空財布
辛抱が足りぬと貧乏神が言う
扶養されながら老人子を思う
泣きに来い笑いに来いと里の親
蟻哀れ働く機能だけ貰い　倉吉市　奥谷弘朗

つながりがあってめったに喋れない
嫁いびりするが仕事と思い込み
余りにも良心的で案じられ
すれ違う会釈に春の香がこぼれ
三年目そうやさかいも板につき　浜田市　中川幸一

金で済むことにあいにく金がない
先頭の好きな男の走り癖
無精卵じろりと睨む目玉焼
これからが儲けと思う喜寿の春
音もなく全身できく春の音　浜田市　佐々木裕

八百長をゲートボールにも持って来た
乱読を糧に雑学身につける
空き腹に飲んだ酒から出たボヤキ
大正がからみ昭和がなだめ役
ごますりが得して硬派損をする

名古屋市　越村枯梢

不協和音夫婦茶碗が欠けてから
均等法知らねど妻は強くなり
老人会にチラシを配る紙おむつ
お互いに七十越えたとは迂闊
変な爺だある日鏡に笑われる

堺市　中川滋雀

春日遅々しずこころなく腹は減り
幕降りるまで喝采は預けとく
むずかしい理屈はいらぬ飯の味
包装紙期待はずれは責められぬ
待合室まだまだ生きる顔で居る

堺市　高橋千万子

偶然に出会うて二人の道となる
雑談のはしばしに出る暮し向き
先客に目立たぬように置く土産
未完成のままで通用する若さ
お花見に酔うて頭がボケてくる

唐津市　久保正敏

譲り合う心が仇となる飛球
食べて来たと言えぬ夕餉の重い箸
嫌われていると思わぬ金遣い
パラダイス夢をハワイに与作行く
遺伝したら困ると嫁が言う浮気

唐津市　仁部四郎

度忘れの名手の妻の空惚け
勅諭みな忘れて軍歌おぼえてる
くもの子が散った家路を月が掃き
ぼんやりの付けが払えぬ太鼓腹
春の月君の目覚めを待ってくれ

鳥取市　両川洋々

花の香にむせたら亡母よ目を覚ませ
豊かさへあてる物指しなど持たぬ
新型という名で税をふんだくり
天の神地の神青田刈り叱る
うどん屋に喫茶ＪＲも稼ぐ

鳥取市　森田熊生

巻き添えというには犠牲大きすぎ
太陽と土と生きてる靴をはく
負け犬になるから自殺などしない
待たされているのにやけに騒がしい
うまい絵でないけど個性ほめられる

鳥取県　川崎秋女

うめ　さくら　りんごの花は咲いたけど
島四つつながる日本さくら咲く
さくら咲く慟哭の二字消える日に
一人居の婆に恋しいわらべ唄

あと十年生きねばならぬ訳がある

鳥取県　松下たつみ

前例を歩いて茨にひっかかり
紫煙ゆらゆら企みの彩捨てきれず
男らしい男を道標にして燃える
故郷変貌僕のルーツが消えていく
春の花冬に咲かせる頬被り

鳥取県　中原諷人

桜ちりぢり神輿を担ぐ花かつぐ
人間がこんなに温い御神燈
山車の肋も軋む男の祭り笛
花うたげ妻の疲れは本物だ
愛讃歌わたし信じるほど聞こゆ

鳥取県　土橋螢

強がりを言う口紅はつけないで
いま死ぬと惜しい奴だと言うだろう
ふくれるとふたつ笑くぼの穴がある
つばくらめなあがい長い旅だった
澄むことも濁りも川に教えられ

米子市　小西雄々

雑学へ自信の風船ふくらます
不自由は無いが情けに飢えている
大漁の鰯の匂い路地を抜け
欠点へ針の穴から攻めてくる
胸に棲む鬼と一緒に春を待つ

米子市　林荒介

梅干を食べて出番を待っている
ポップコーン跳ねて家路を見失う
ダムの村漬物石が溺れてる
裏ビデオ的は何時でも取り出せる
蕎麦掻きを掻けば故郷の桃さくら

米子市　石垣花子

くにの客むかえ総理の出雲弁
均等法女が打てば曲がる釘
鴉とのいくさに母の背が曲がる
アメリカのくしゃみ窓から入り込み
一日も休まぬ母の育児帖

米子市　政岡日枝子

花に合わせてブラブラ歩いてみませんか
薄墨の硯に恋を隠してる
茶柱を越えて少年虹を踏む
年寄りとつながっている糸電話
自転車で猫と遠出をしてきたよ

米子市　野坂なみ

万歩計に折返し点せかされる
やっと春椿の落ちる音しきり
散り際の花は定めを知っている
したい事することが有る有難さ
あの日から黒子の役に徹し切る

夫の戦友（三句）

米子市　菅井とも子

地獄から帰ったひとの裏話

生きのびて戦友と交した酒の味
老妻と聞けば寂しい同い齢
梅干も宅急便に入れておく
方言で話せば話すぐ決まる

尼崎市　春城武庫坊

銀行で私ですと保険証
銃眼からのぞくと人は敵に見え
乗り越した駅で花見をして帰り
中国の艶笑譚に文字の粋
道楽の経験生きた意見する

尼崎市　春城年代

うわさだけで今年の桜散ってゆく
一週間夫の家事を見る疲れ
一雨ごとの春の足音なに迷う
戦中戦後比ぶべくなし花万朶
年寄りのはなしにうかっと乗っている

和歌山市　堀端三男

染め抜きの寿の字が映える紫に
群衆の中で旗色ばかり読み
抱き合わせで入った方が拾いもの
巣立ちする子に子離れをさとされる
禅問答している石のたたずまい

和歌山市　福本英子

梅桃桜やっぱり桜が性に合う
冷めている二人も濡れる花の雨
きついこと言うて女が飢えている
異動から又外される棒グラフ
お彼岸の亡夫は若くてハンサムで

和歌山市　内芝登志代

花びらがゆっくり流れて春の旅
日記帖あの日の旅が甦る
きれい事ばかりですまぬ桜散る
花柄のエプロン可愛い祖母にする
脱皮した息子がちょっと他人めき

和歌山市　牛尾緑良

花鋏ためらい傷の無いように
値崩れがしそうで年は言わぬこと
少々の嘘でも許すネオンの灯
言い訳が嫌いで固い椅子にいる
身を裁くほどの自伝がまだ書けぬ

和歌山市　福井桂香

おぼろ月花に浮かれる輪をはなれ
もう一度声を掛けたい曲り角
情熱のけさは溢れてほとばしる
充電をするかのように逢いにゆき
やすめたい翼が濡れて飛び立てぬ

和歌山市　青枝鉄治

木の肌の温もりを売る村興し
伝統芸守る男の太い眉
過疎の村活気づかせた映画ロケ
通夜の席仕舞いこまれた招き猫
良い点は盗めと社長初訓示

想い湧く独りぼっちの花見です
母と娘の直線切れることがない
黙黙と哀しい母の艶布巾
茹子漬けの鮮やかな色母のもの
まっさきに探してくれるかくれんぼ

西宮市　林　はつ絵

フルムーンひとつ見つけた妻の癖
左手が自信を持てとそそのかす
盾ついて甘えて父の深い恩
音楽室トロイメライの流れくる
空調の音かすかなり美術展

西宮市　奥田　みつ子

尼先生逝去（二句）

二〇〇号積み上げたまま発ち給う
春雨（あめ）しとど老師を悼むごとしとど

盟友を喪う（一句）

葬送やそぼ降る中に立ちつくす
落ちるさま見せてくれるな白椿
ゆりかもめやはりおまえも帰るのか

島根県　小砂　白汀

風花よのろのろ春はまわり道
この崖に去年は春蘭あった筈
いやなことふっ切る術へ白椿
ひし餅が焼ける節句の客といる
だんまりや何時も抱いてる不発弾

島根県　榊原　秀子

悼　尼緑之助先生（二句）

耐えんとす涙拳を握っても
懐しい声あんなときこんなとき
それぞれの胸に音聞く花の雨
あせっても今その先は無に気付く
勘のズレ風に口惜しさ読みとられ

島根県　堀江　芳子

緑之助先生（三句）

師と呼吸合わす酸素の音といて
読み取れぬ口の動きにしぼる胸
点滴も酸素も回転せよ奇跡
盃にこぼす話は妻が受け
一合の機嫌とっぷり聞いてあげ

島根県　堀江　正朗

抜け切らぬ風邪へ寒さが又戻る
るんるん気分にしてくれる還付税
北上の桜を追って旅に出る
オープン戦はじまり茶の間活気づく

岸和田城四百年祭

四百年誇る歴史の千亀利城

岸和田市　原　さよ子

春風にふわふわ思考力飛んでゆく
ぼけるかもそんな不安を持って生き
若い命へかわってあげたい列車事故
孫の服作る生きがい出来ました

岸和田市　島崎　冨志子

岸和田城四百年祭

市民の足城へ城へと向いている　寝屋川市　江口　度

椅子とりゲーム何べん壁をぬけたやら
井戸を出た蛙気弱になってくる
地価を見た土筆びっくりしてのびる
花明かりとかく羊は群れたがる
煙草に火つけてしまった自己嫌悪　寝屋川市　岸野　あやめ

年金のくらしに似合うハーモニカ
長男に引き取られるという電話
増減税財布の紐がもつれます
ゲームとは言うがお金の恐ろしさ
急がない時の電車はすぐに来る　大阪市　江城　修史

貧しさは変らず巡る啄木忌
腎不全火種をいつも抱いている
生きてたらの想いつのらす通り抜け
ちぎれ雲人の心に飢えている
うたたねの妻しみじみと年をとり　大阪市　河井　庸佑

子の見てる後ろ姿をつい忘れ
先生のミスへ厳しくいさがる
程々にしとけば良いのに出す馬脚
肚のあるところもすこし見せている
年甲斐もない興奮をたしなめる　大阪市　黒田　真砂

たじろいで花野の果ての影を追う
温もりが欲しい夫婦のすれ違い
春愁の枕に重い二日酔
もしもの時等と夫言う病み上り
本当の理由は秘密にしておこう　大阪市　本間　満津子

年金にちょっと気兼ねなレストラン
罰あたりそう一人前を食べ残し
戦死した弟憶う冷蔵庫
切れっぱし筑前煮きに生きてくる
到来の銘菓新茶のタイミング　大阪市　神夏磯　典子

昨日会った人の訃報よ花の雨
屋根瓦びくびくしてる立退き料
私服なら隣の御主人恐くない
八百八段罪の意識で詣る寺
勲章は真直ぐ生きた日記帳　大阪市　板東　倫子

六十の浮気は色でなかりけり
待って待って待った桜が見に行けず
良妻賢母罪にならない嘘を吐く
恨みごと並べる口がよく食べる
終焉のつもりの土地が騰りすぎ　岸和田市　福浦　勝晴

壁突いても答えの出ない夜の孤独

聖書読んで離婚の科白探さんか
陽だまりに不倫の児もいる幼稚園
税金を飲んでぼやいて寝て平和
企みをいっぱい溜めて注ぐビール

大阪市　坂口公子

臥す窓に木の芽がぐんぐん立ってくる
胃かいようをのほうずにして昼の闇
ああ六十八歳病窓を赤き陽昇る
厄病神に無視されちゃった白い旗
らんの花束桜にかぶと脱ぎました

京都市　都倉求芽

春の海だから絵になる瀬戸の橋
楢山も春はやっぱりなまめいて
知恵の輪がするりと抜けた春の風
春がすみ少々の不幸は包みこむ
還付金税務署が好きになる年度末

京都市　山本規不風

逢いにゆく森に奇麗な栗の花
枳殻(からたち)の花に青き夜の通り雨
四面楚歌の雀が嫁に寄って来る
キスはいや接吻熟年物語り
拝観料下げて越前大仏さま

神戸市　仲どんたく

救急車おろされ身ぐるみはがされる
娘にもお願いしかねている洩瓶(しひん)
相場欄むさぼるほどに癒えきざす
あんよはお上手ナースに手をひかれ
啓蟄の日の退院の空ひろし

神戸市　山口美穂

花粉症春を素直に喜べず
お隣のピアノみどりの風に乗る
ビルの街で暮す野鳩のたくましさ
桜花へ無情の雨もまた風情
信念を持ってすっくと葱坊主

平田市　久家代仕男

師を悼む

旅立ちは路郎師の待つ雲の峰
柳抱院その面影や雲の峰
土壇場でひらき直りも凡夫たり
ひな罌粟の花弁をめくるぬくい風
疎まれて疎まれて咲く鬼薊

岡山市　時末一灯

幾つある叙勲者たちの踏台よ
うす味の付合いだから二十年
ふっきれて桜一ひら地に還る
言訳になりそう地下街へ入る
義理で書く今日を筆先知っている

兵庫県　辻文平

手枕で春のヒントを組立てる
捨てられて藁一本につなぐ愛
燃えて来た証しを妻が洗濯す
振りむいた妻が仏の顔をする

ドアチェン鬼千匹を胸に飼う

今治市　越智一水

老梅へ茶禅一味の心知る
草に寝て遊べば雲も来て遊び
退職をして葉桜を妻とほめ

奥津温泉

退職と退職奥津の湯で出逢い
露天風呂タオルは軽く泳がせる

美禰市　安平次弘道

切符二枚愛があるとは限らない
神楽面いつまで神をだませるか
未練なお激しき雨を呼ぶ柩
脇役とはかくあるべしとかすみ草
入学式四月の毬はみな弾み

生駒市　森田カズエ

晩酌の宴は妻とだけでよし
初孫へ持つは輝く夢ばかり
純生とよばれてビール照れている
とりまきが居るから仮面欲しくなり
ストローの先が待ってる時間待ち

松原市　北野久子

おねだりの旨いところは母譲り
背かれてやっと夫は手の中に
趣味の無い夫に定年が迫る
不倫には遠いブランコ押している
人生は八十年かどっこいしょ

松原市　佐藤藤子

おんな嫌い桜嫌いの古本屋
大吉のみくじに沙汰を待っている
ご期待にそえぬ飴玉かみくだく

田宮虎彦さんの死

今昔はめぐる作家の哀しい死

瀬戸大橋開通

桜満開連絡船はもうこない

守口市　羽原静歩

ツッパリは一人もいない幼稚園
愚痴はよせ仏法僧がないている
眼薬が眼に染み透る老いの坂
監督が魔法のようなサインする
人生の三者凡退繰り返し

出雲市　吉岡きみえ

まるい鍋いびつに女の厄日くる
初七日のビール噂の中で飲む
四月馬鹿カラスの声にもだまされる
花が咲き鳥唄えどさみし春の雨
鼻唄を歌う幸せまだ残る

枚方市　宮川珠笑

役を頂き残業手当カットされ
カラオケは駄目内風呂でなら唱え
皆散ったオフィス電話が鳴りすぎる
縁決る娘やさしさばかり見え
大切にする約束で敷かれてる

豊中市　田中正坊

よろこびはゆっくりとくる猫柳
単三の電池がきれたもの思い
黍団子もらい群れから抜けられぬ
野心もう捨てていましたティーバッグ
限りあるいのちを思う新茶の香

高知県　赤川菊野

これで好いのかこれでよいのか桜散る
いたずらに時が流れる昨日今日
許せない男の言葉ふところに
寡婦という旗がだんだん褪せてくる
沈黙を守り切り札温める

仙台市　川村映輝

夫には強いが子供には弱い
そつがなくゆとりがないから親しめず
善人は同じ心で他人を見
急病も時の氏神難のがれ
音頭取るのが当然のような年になり

羽曳野市　榎本吐来

花の下ここでも女リードする
頑なな背を絵にする花吹雪
盃を持つと本音の顔になり
赤信号みんなで渡るその一人
一病を抱いて世間が見えてくる

貝塚市　行天千代

八十になっても女は女です
老醜をかくす女の身だしなみ
花まつりなんで今頃雪が降る
ことわれず嫌々買ったカーデガン
予約した桜の宿はまだ蕾

八尾市　鷲見章

子をあやす桜並木の絵雪洞
たこ焼屋花の堤は此処できれ
園児バス落花の門に子を降し
形見分け仏と合わぬ胴回り
母朧ろ五十回忌の灯が揺れる

和歌山市　松原寿子

薫る風あなたの舵で帆は素直
編み上げるまでは秘密にしておこう
ポシェットの隅で名刺も踊っている
朱線引く酸素が薄くなるまえに
おくれ毛のあたりへ熱い風がくる

和歌山県　寺田裕美

無事通過しました頭を下げたから
ぎりぎりの叫びを波にかき消され
生れ出た握り拳の運命よ
対岸の桜へ鼻緒がきれかかり
大根の花のうっぷん蝶がきく

笠岡市　松本忠三

何時からか時計停っている笑い
一寸の虫が昼寝をしています
じいちゃんの奥の手であり惚けてみる

方言をちゃんぽんにして落ちつかず　柳井市　弘津柳慶

無愛想な医者で信頼されている
飴玉では禁煙の口ふさがれぬ
栄転という名で単身赴任する
春風にだまされ薄着へ雪となり

大田市　藤田軒太楼

互角ではないかと老いを軽く見る
運転も一年目にはすきが出る
雑踏をさけて寄り添う影がのび
禁煙に徹し九ヵ月を守り抜く

松山市　谷信夫

あんぱん一つ心残りのないように
旬の味食べる楽しみ生きている
椒の芽を送ってくれた山の友
病院のベッドに慣れてよい寝息

諫早市　原田メイシュン

熨斗紙替えて中元すましとき
多数決が俺の正論踏みにじり
雲行きへ上手なママのご返盃
バックミラーの中に白バイ居る不覚

西条市　片上明水

小さい罪赦してもらう陽を拝み
神様に話したことがおかしくて
よく妻が吹いたラッパも錆びたまま
背に荷を一つ重ねて父らしく

和歌山市　若宮武雄

母性愛何がなんでも核嫌い
死にきれば必ず浮かび出るものを
アドバルーンてんてこ舞いの気の障り
帰巣性信じる外はない絆

和歌山市　垂井千寿子

子も親になって返事が丸くなり
マンションは隣へぴったり心閉め
春うらら浮かれ話の好きな耳
死んでもいいなどとお守り持って旅

和歌山市　細川稚代

暮れ残る陽へ約束の手がぬくい
消しゴムで消せない今の一言が
風邪の声ハスキーなどとおだてられ
たこやき屋内助の功という笑顔

和歌山市　山川克子

赦すのよなんてえらそに悟り顔
ビル建てて横のつながり薄くする
渦中から逃げてるつもりサングラス
久し振りに笑い転げた泣きました

和歌山市　後藤正子

葉桜に急かされている時刻表
帯の長さにいつか馴染んでいる鏡
花を踏む猫には猫の通る路
細やかな出来事でした水たまり

和歌山市　桜井千秀

爪に灯を点して犬の医者通い
肌合わんそれはこっちの申し分
口挟むつもりの席は真正面
朝御飯ゆっくり食べて来た余裕

和歌山市　木本朱夏

恋人が替って趣味がひとつ増え
ときめきの余韻が残る爪の色
ペンペン草けなげに生きるひとがいる
花言葉たくさん知っている孤独

米子市　田中亜弥

郷愁の便りに梨の花が咲く
犬拾うそれから皆の血がかよう
先生が身内頑張りきかさねば
腹のたつ話ばかりで指鳴らす

米子市　青戸田鶴

木蓮が不意に灯りをつけにくる
口軽くなるまで酒をついでみる
好きな本あれば豊かな夜になり
荒れ果てた耳に流れたテネシーワルツ

米子市　寺沢みど里

カトレアの花に秘密はなさそうな
つながりを大事に生きる肩ぐるま
シーズンまで我慢している種袋
ふる里の詩を忘れぬ林檎の朱

米子市　金山夕子

裏通りいつもの猫とすれちがう
緑の風と口約束をしてしまう
口笛が吹きたくなるよ鶴一羽
子のために消さずにおこう港の灯

島根県　西村早苗

天主閣故郷が雲の下にある
これでよしポンと叩いた博多帯
メンバーはとっくに居ない酔いつぶれ
悪友と互いに思うお酒好き

島根県　栂みどり

茶つみ唄聞こえてくるよな荷をほどく
茶柱も心のささえ朝を出る
他人だから平行線で嫁姑
スパイスをきかせ煮つまるカレー鍋

島根県　石田清泉

晩春へやっと届いた花だより
お互いに風邪うつし合い老夫婦
満ち足らぬ顔顔顔の禁煙車
下駄箱の洋蘭しかとところを得

島根県　松本はるみ

値のはった有精卵に頼ろうか
馬鹿になるための修業に出おくれる
屁理屈を言うから家がまだ建たぬ
春泥をおとして自転車青い天

島根県　藤原鈴江

追憶や五月の頃の幼な妻
新緑にしたたる想いあずけよう

野にあってこそすみれ草キツネ草
我が胸に十字架の種まいた人

島根県　松本文子

不信の糸ばかりで布を織っている
生きがいのひとつに土手の花吹雪
菜の花や愛を残せしひと握り
暗号の如く読みたり有夫恋

鳥取県　林露杖

春光に北大山の居丈高
一春の栄枯雪洞雨に濡れ
社会面性善説に疑念抱き
上海を他山の石にＪＲ

鳥取県　森田布堂

多数決の拍手に正論くやしがり
炊事場に煙が出ない世の移り
特価品の名で疵物を買わされる
犯罪と事故が絶えない国となり

鳥取県　新家完司

さくらさくら何か良いことありそうな
兵隊の位も古くなりにけり
銃よりも楽器のほうが楽しいよ
腐らせるのがとても上手な冷蔵庫

鳥取県　中原汲香

神様と太鼓はいつも仲がいい
人間に逢いたい神と祭りの日
本物の茴香に逢う花に逢う
雑踏の駅へ五月をたしかめに

鳥取県　中原みさ子

久方になにから語ろ朧月
微熱つづいて恋愛ごっこ花の下
喜怒哀楽詰めたバッグを持ち歩く
朝シャンの少女も長い髪をもつ

大阪市　西森花村

春の雲社長もシッポも無かりけり
回診の医師は主役の顔で来る
日曜は一人で起きる競馬狂
実録と書いて証拠のない話

大阪市　北勝美

回顧談あらたな記憶甦り
遠い人先に来ている待合せ
花の下愛情たしかむ軽い嘘
ほんものは博物館にあるお寺

大阪市　藤田頂留子

第二回平野連歌会（四月十日）

せめてもの脇句およばぬまますすみ

杭全神社御田植（おんだ）（四月十三日）

こまやかに輪廻をしめす田植舞
人や花おっちょこちょいもいて楽し
春や春心の窓もあけはなそ

大阪市　柳原静香

母子三人歩調を合わす花の下
倖せは確か夫の手が温い

一人来てひとりのゴミを持ち帰り
四月馬鹿単細胞を試される　大阪市　古川　美津枝

たよりがいあると言われてサロンパス
ためいきをつくでないよと青い雲
かぶわけてにわか庭師でいる笑顔
切手にも自由に翔べぬさだめあり　大阪市　大塚　節子

ペンダント悲しい恋を閉じこめる
立たされた車窓で花の盛りみる
テレホンカード他人不在の長電話
今日一日の怠惰見ているスイトピー　西宮市　西口　いわゑ

あの歌の流行った頃に母が逝き
祖母の唄楽譜にはない味を持つ
母と娘の小さな旅へ弾んでる
亡恩や紙人形の目に出会う　西宮市　瀬尾　六郎太

花の冷え風邪を引いたり治ったり
春近し一雨一晴繰り返し
やはり妻ネクタイ選びピッタンコ
西田こと敦煌直己壮と絶　富田林市　田形　美緒

乗ったのが生死を分けた二両目で
貧しくも四季折々の花咲かす
親離れ子離れがあり桜咲く
気位は朱に染まらぬ胡蝶蘭　富田林市　新開　千代女

人生の幕そろそろとおりかける
気もそぞろ今年の花はかすんでる
最後なら一目見せたや花ざかり
歩くこといいと知りつつバスに乗る　岸和田市　清野　こう

大相撲すめば球児に熱を入れ
母になるよろこび岩田帯を受け
ゲートボールお茶も楽しい憩いの場
思わくがあるらし軽い子の返事　岸和田市　古野　ひで

花活けて心安らぐ雨の午後
花暦少しずれゆく菜種梅雨
春愁や入試いろいろ孫がいる
山鳩の声で目覚める山の宿　岸和田市　芳地　狸村

お守りに感謝してます軽い事故
大穴の馬券を握り赦急車
真夜中の電話が恐いことを言い
大仏の時の流れを知る遺跡　唐津市　田口　虹汀

隔日の雨が山河の春招く
醜闘はよそう祖先は皆同じ
病院で落して来たか角が無い
或る日フト僕は物言うモルモット

若布干す軒が連なる南風
宿下駄で覗く呼子の朝の市
ふるさとを炭車が走る古写真
錠剤の色が効き目を疑わせ

唐津市　浜本義美

長寿長寿長寿の重み国悲鳴
孫の伸び木の芽の伸びに似て速し
コスモスもやり手だ風をやり過ごす
リフォームはわたし一人のブランドだ

唐津市　浜本ちよ

多言の人へマイクすぐ引く
ひっそり勤めネクタイも褪せ
故人の作の橋わたる日々
酌ぎ合いながら年金の疑義

町田市　竹内紫錆

十年へいつしか嫁も家の貌
小じわまで正直過ぎるいい鏡
嘘が生む嘘の怖さに責められる
ここだけの話を嫁も姑も聞く

姫路市　丁坪サワ子

独り居は瞑想の刻よまた愉し
苦も楽も倍にならない独り者
死ぬまでは朽ちぬ頭を磨かねば
寂しさの極致虚構の家に住み

姫路市　人見翠記

無為無策ふわりと生きて喜寿とかや
あれ以来サラダの飽食夢に見る
目に青葉虚勢は既に捨てました
ライバルの笛にも踊る面を彫る

出雲市　板垣夢酔

一戸建て住いも墓もまだ持てず
慌し葬儀に猫も喪に服す
過疎の犬人の姿をうれしがり
死ぬまでおんな花の生涯かと思う

出雲市　園山多賀子

連休の朝を救急車が走る
若者の熱気の中でふところ手
補聴器が聞いた隣のスキャンダル
老人ボケしたい一日だってある

岡山県　荻野鮫虎狼

恩人の事が心の底に生き
お天気が旅のコースへ口を出し
ハイハイと卒業をして人変り
追いかけて来た釣銭へボケはじめ

岡山県　二宗吟平

老夫婦国策でない米作り
永年の王座が揺らぐ米のめし
減反休耕瑞穂の国の名がすたる
蒼い空こんな百姓なぜ捨てる

岡山県　小林妻子

善人と信じ軒先借るつばめ

高槻市　川島諷云児

喝采も花道もない影法師
年金に浮き世の義理が攻めてくる
針のない時計が欲しい伝書鳩

高槻市　河瀬芳子

へそくりの癖が抜けない未亡人
お隣のバイエルがまた攻めてくる
りんごくるくる剝いて私に策が無い
ばあちゃんに頼めば買うてくれるはず

橿原市　岩井本蔭棒

安い肉高く食わせるのが政治
来年の約束はせぬ花吹雪
宇宙時代屋敷の隅にまだ鬼門
遊ぶのも大変と知る定年後

八尾市　宮崎シマ子

主客転倒妻の遊びを送り出し
二十一世紀ともに白髪になる親子
サクラサクラ今日は夫と手をつなぐ
花冷えへ婿と息子と熱燗と

東大阪市　崎山美子

色あせたのれんをゆする春の風
逆転へしばし仕事の手を休め
ゆれ動く女心をいかにせん
それとなく見合いに誘う花便り

倉吉市　渡辺独歩

レーガンさんポトマック桜咲いたかや
ビアガーデンお天気くずれが恐ろしい
巣立つ子に寄るな原宿六本木
転勤も三度目頃から出世欲

倉吉市　淡路ゆり子

息切れの限界を知る万歩計
方言を自慢に出来る齢になり
人間も退化をたどる土踏まず
四月の雪にたたらを踏んだ桜花

箕面市　坪田紅葉

守りぬく大正女も意地があり
紙人形一人で歩く夢を見る
おぼろ月一人ぼっちの老い桜
まげた腰ネックレスがぶらさがり

羽曳野市　佐野白水

熱さめて後悔の芽が顔を出し
脱会の報らせ四月馬鹿であってほし
連絡船廃止明治を遠くする
花だより三寒二温の寒戻り

静岡市　渥美弧秀

朝の帳曲の流れて幕開く
鍵盤に触れる十指に初夏走る
二病息災妻と暮して幾春秋
言い訳を気遣う妻の不整脈

加賀市　細呂木魯木

退職の余裕が地酒の旅日記
ビルの窓故里へ雲が流れてる
正直な子等にやらせのコマーシャル

過去からの指令で動く私かも
大和高田市　岸本豊平次

お水取り終って彼岸を待つ寒さ
当らんでよいのに当る役抽選
足して二で割ればよいよな姉妹
大和路は変体仮名の道しるべ
玉野市　小谷仙山

漬物石くらいの義理にしばられる
ドラマ一つ夫婦茶碗にひびが入る
針の耳程の証しを押し通す
一抹の不安瀬戸大橋は出来たけど
七尾市　松高秀峰

ロボットに涙腺などは見当らず
晩成もはかない夢で幕となり
二度の職立派な髭が邪魔になり
不足ない年と思えぬ母でした
竹原市　岩本笑子

白い紙白から塗って行く律義
ままごとのそのまま今日も桜散る
日曜の午後は金魚も暇らしい
釣忍乙女心がまた揺れる
竹原市　信本博子

星一つ増えて届かぬ人となり
まだ生きて見たい聞きたい欲があり
一つの死まわりが少しずつ変わる
葬儀屋のあれこれと言う無表情
羽曳野市　中村優

税理士の知恵も怪しい税逃れ
辞書に無い文字を当て込むコマーシャル
非課税で肩身が狭くなる老後
休耕田主なしとてれんげ草
寝屋川市　宮尾あいき

雨あがる今朝のからすは笑ってる
川辺の桜我がもの顔にほめそやし
猫を抱く妻はうまず女子供好き
抱いた児にぐちこぼしつつ夫待つ
寝屋川市　柴田英壬子

入江の夕陽ふいに隠棲したくなる
頓馬だと思わせといて裏を衝く
かがり火の宴は狂気遠ざける
御堂筋のいちょうが革命ゆるさない
宇部市　平田実男

校長が代ると代えるほどの趣味
きれいにも汚なくもする血の絆
一人だけ助かり疑う目に出会う
脳味噌が多過ぎたのもいる精神科
尼崎市　奥山美智子

自画像を飾るゆとりは持っている
故尼縁之助氏宅と句碑を訪う
六十年の柳歴匂う句碑仰ぐ
木次観桜句会で
満開の桜とぬくい句に出会う

輪の中へ入りたがらぬ子が一人　宝塚市　丸山よし津

人文字が軽い気儘を許されぬ
春多忙椿の花も落ちたまま
郡上節覚えて帰る鮎の膳
のろくても前進のみのかたつむり　和泉市　西岡洛酔

酒と縁切った病巣がまだ疼く
ほくろにも絆親子の縁切れず
六月の雨思う事無し顔の皺
年金の暮らしに梅雨もまた楽し　河内長野市　井上喜酔

ひと皮を剝けば男の意地が燃え
花を見て飲んで人柄のぞかれる
茶柱が嬉しい誤算におわせる
ばれそうな嘘へ居直る肝っ玉　堺市　柿花紀美女

雪国から雪は憎いと手紙くる
早起きも宵寝も気楽な老夫婦
拍手だけ大きくしとく醒めた顔
金婚や入江静かに帆を畳む　川西市　松本ただし

孫にだけ笑って腹を立てている
屯田兵になって第二の職に就く
十年を一節にした深呼吸
聖人でも君子でもない目のやり場　高知県　曽我部裕

まっしぐらそんな若さのあったころ
裕ちゃんの遺産にしてはとも思い
レーガンに舵を任せた日本丸
お気持でいいと和尚は言うけれど　吹田市　栗谷春子

不器用が下手なつくろいせぬことだ
佗助は佗助ゆえに好もしい
公園を斜めによぎるともう病院
心配がすめば病院いい所　松原市　小池しげお

猫今日は不足あるのかしゃべらない
水遊びしたい水子へ水をやり
手切金男はよわく弱くなり
下手な字のカルテで手術するという　大阪市　中西兼治郎

灯を消してから煩悩が動き出し
日の丸に反対も出るPTA
寒風にゆれてみの虫春を待ち　大阪市　大野武太

うららかな御所の芝生の昼弁当
版画みる思い和菓子にある情緒
正義感ゲンコツ宙にういたまま　大阪市　北山悟郎

嘆くまい両手片足駆使出来る
戦傷の杖温い手の妻が居る

新入社街の歩調に合いかねる　大阪市　町田達子

春の旅長い列島二度花見
三世代茶の間の耳も忙しい
結果論並べる人を年かとも　大阪市　井上白峰

倦怠期妻がスパイスきかせてる
背を向けた隙間に愚痴が渦を巻く
四月馬鹿女房本気で着物買う　大阪市　横山為子

戸の建たぬ噂に尾鰭よく泳ぐ
おあずけの夕食時の長電話
庭伝い部屋を離した距離に住む　大阪市　吐田公一

諦めて諦め切れず帰る孤児
土地がまだ安いですよと無人駅
野仏が好き奥山へ逢いに行く　島根県　錦織文子

橘と桜を飾る花言葉
仲よきは美しきかな夫婦雛
夜が更けて雛段の無礼講　島根県　北川民子

歯並びが悪くてうっかり笑われぬ
言わずとも咲いてくれるよ四季の花
うがいして雲の流れも春めきぬ　島根県　城角鶏生

ネジだって安々ぬけぬ意地を持ち
一刀両断切って捨てたい過去もあり
渋滞にメーターだけははねあがる　藤井寺市　福元みのる

美しい声の電話は人違い
喧嘩することも億劫になる夫婦
ライバルは砥石となって磨き合う　藤井寺市　中原比呂志

真実を語れば自分も傷を負い
天の邪鬼仁王の足元桜見する
ダイエット昭和ひとけた耐える意志　出雲市　竹治ちかし

文明が丸い地球を角にする
くだらない事もやってる忙しさ
まだ夢を追うから妻とする喧嘩　出雲市　小玉満江

母方の願いかなって鯉のぼり
春の蝶遮断機無視で渡るなり
また同じ話聞いてる施設の灯　出雲市　園山良子

ラチもない事と笑ってくれる夫
急逝の亡友が生きてる電話帖
指差し確認ガス電気よし旅鞄　出雲市　河原恵美子

やぶれ傘三歩下ったまでのこと
主役になれぬ男のフルコース

春雨にぬれすぎた恋パートII　鳥取県　森山盛桜

一身を虚空に投げて息をのむ
真結びという宿命に耐えている
茶話会というには本音吐きすぎる　鳥取県　羽津川公乃

受胎告知みんな嬉しい顔で聞く
手拍子が途切れ音痴が顔を出す
根くされのままうぬぼれの花が咲き　鳥取県　江原とみお

日暮から男は首をすげかえる
力になってやれないお茶を注ぐ
差しあげます元手は掛けてない笑顔　鳥取県　さえきやえ

無冠とはこんなにうまい花の酒
広重の雨わたくし彩の草萌ゆる
会者定離ことしもリラの花が咲く　鳥取県　広本文子

人口過密ひとの心はちぐはぐに
性格に合わないような資格もつ
枕ふたつ縫ってやっぱりひとりです　米子市　光井玲子

それなりに自負を持ってる雑魚のうた
嫁った娘と我慢話が食いちがう
菜の花がとっても好きな蝶の群れ　米子市　川上より子

空港のロビーは既に活火山
アメリカは近くなってたひと眠り
一坪にバラを咲かせて王者たり　米子市　白根ふみ

シーサイドホテルの窓をイーゼルす
ときめいているから赤い花植える
善悪の揺れるきずなのはざまいる　岡山市　井上柳五郎

よっこらしょ憎まれ者のまだ残り
知る噂耳かゆくなる聞き流す
だんだんに未来の視野も縮む老い　岡山市　行吉照路

セールスの下着重ねて冬の陣
セールスは漫画の好きな六十路です
天気予報にらんでセールス山隠路　岡山市　花田たけ志

懲りたのはあの人の前だけですよ
えさだとは言えぬ手立ての目を伏せる
会釈しておけば鉾先鈍るかな　岡山県　岩道博友

春過ぎて何処まで脱がす寒暖計
夫婦茶碗贈った二人が連れて逝き
病院の自動ドアーに吸い込まれ　岡山県　矢内寿恵子

故里の土は哀訴をくりかえし
残照の余白は趣味の彩で埋め

八起き目の期待が重いちぎれ雲　岡山県　池田半仙

独活の香のうど菜一年はやめぐり
石段の高さと歳を考える
ゲートボール昨日は殊勲今日はミス　倉吉市　渡辺菩句

割算掛算しても一人であるさだめ
太陽と逢うそれだけでうれしくなる
受付の娘をたとえるとフリージア　倉吉市　野中御前

しめっぽい話はよそう春の風
薬にも毒にもならぬ猫がいる
春風が吹けば深爪忘れかけ　弘前市　斉藤劦

桜好きりんご好き弘前が好き
蹠が忘れていない亡父の土
デパートのゲームの隅にいる祖父母　弘前市　真喜内實

雪消えた小径で小石目が覚める
剪定のコンビ楽しく鋸　鋏
一点をほめると闇に灯がともる　兵庫県　脇田米朝

辻褄を無理に合わせた胃の痛み
お人よしの毬でいつでも弾んでる
金の要る話へ歩調が揃わない　姫路市　大原葉香

古切手集め小さな善を積む
失禁が続き悲しい日記書く
日は西にそろそろ先を急がねば　姫路市　都里遊光

野心などとっくに捨てた水中花
沈黙が守れず月に話しかけ
若葉マークつけて出したいランドセル　堺市　藤井一二三

咲いてよし散って風情の桜なり
造成を拒んで古墳花の中
引き際の見事さ桜散って見せ　芦屋市　竹中綾珠

生徒からの贈花あの顔この顔花の顔
高校野球判官ビイキいりみだれ
据膳で好きなえんどう木の芽あえ　寝屋川市　堀江光子

やま消えた村にさくらの花盛り
清貧は好むところと負け惜しみ
神さまにある筈はない好き嫌い　寝屋川市　平松かすみ

毒舌も気軽に吐けていい夫婦
母は祖母私は母の化身なり
試着して結局手ぶらのまま帰り　高槻市　竹内花代子

花びらと一緒に帰る春帽子
カルチャーの友と気が合うお好み屋

敏感な鼻が貰うた花粉症　唐津市　筒井朴竜

下手糞も上手も適宜居て楽し
満ち足りぬ貧乏くじも我慢しよ
無駄飯は食わぬ老骨般若かな　八尾市　山下みつる

おしゃべりが過ぎて人形捨てられる
満ち足りた女菩薩の顔になる
明暗の運命分けた汽車の旅　豊中市　上田登志実

新マル優葬式代のつもりかも
片肘を張っても老いの背は淋し
懐しや船上の写真テープ持つ　豊中市　辻川慶子

墓洗う心も空も澄んでいる
ぼんぼりが揺れて花冷え花むしろ
菜種梅雨お喋りインコのひとり言　豊中市　一瀬福一

ライバルの笑いの裏が透けて見え
コンパクト男をだます顔が出来
残り火がまだ母にあるうなじ　和泉市　岡井やすお

税から出す年金にまた税をかけ
父古いと言った子が今古い父
夕刊の小説やはり時代物　羽咋市　三宅ろ亭

四島を連らねて日本の新夜明け
道草をするのもあって蟻の列
七人目の敵から和議を申し入れ　広島県　藤解静風

後押しの妻がいつしか前を曳き
気に喰わぬ会へ血圧利用され
常備薬無駄を重ねている平和　広島県　田村新造

定年でいつか馴染んだ昼の酒
八十年の航跡閉じる銅鑼が鳴り
瀬戸大橋歩けば虹が近くなり　奈良県　宮川古都路

初陣が古豪を負かす甲子園
京鹿の子色もよければ着てもよし
縄のれん殿御かわいや寝ずの晩　静岡市　永倉僕川

躓いただけさ若さは気にしない
贅沢は言えず健康という宝
悲しさへつくり笑いの顔でいる　有田市　松井かなめ

娘と話すより孫の片言ききたがり
あなただけと言った話が宙を飛び
ダイエット中　赤福餅の土産くる　富田林市　片岡智恵子

全身を色であらわし山笑う
変哲のない白シャツの正義感

糸引いている黒幕の羽繕い　海南市　三宅　保

泥舟にノスタルジアが重すぎる
焼香を待ってる列に笑い声
頑なにピースを喫っている男　守口市　森川　まさお

受付に縁起をかつぐ人が居り
掛け金に話しかければ椅子にかけ
絆創膏の指を枝豆逃げて行く　吹田市　茂見　よ志子

春愁にバランスくずす独楽の芯
燥いで喋ったツケの不眠症
相続税あの手この手を友が説く　和歌山市　山田　高夫

春爛漫人を阿呆にしてしまい
花開く花に試練の横なぐり
春うらら擬音で走る縄電車　茨木市　堀　良江

ふくらんで内緒話が戻って来
おみやげのカニも湯疲れしています
花の下老人会と遠足と　守口市　結城　君子

ひとの心はうつろい易し桜追う
春風を甘くは見ない柳の芽
やっと春中間色でやってくる　茨木市　井上　森生

湯豆腐のぬくさの友が丁度よい
雪吊りの過去しばられた美しさ　唐津市　山口　高明

腹の子のために還ると言って発ち
負けて勝つそんな事無い勝負ごと　出雲市　石倉　芙佐子

陽炎はゆれて恩師逝き給う
夜鴉が哀しみ彩のドラマ書く　出雲市　小白金　房子

一坪の花壇楽しむ花ばさみ
菜の花の小道牛追う昼下り　出雲市　久谷　まこと

どれ程が国産品か古のれん
切れ味を試せば他人傷付ける　大阪市　寺井　東雲

休日の子守嫌いで用作る
昼抜いて弁当代をパチンコに　大阪市　松尾　柳右子

今日も雨コインランドリー集会所
肉も好きサラダも好む人嫌い　大阪市　塩田　新一郎

何事ぞ遺族にマイクつきつけて
ノーネクタイもう七人の敵も無く　大阪市　渡部　さと美

自慢ばなし男はんかてよく喋り
緑陰にすやすや乳母車の天使

大阪市　宮下とし
またたく間仲間の出来る朝の風呂
夫病みお百度踏んだ石畳

鳥取県　土橋はるお
三羽ガラスの一羽が花粉症らしい
ぶらんこに乗っている児誘拐してみよう

鳥取県　乾喜与志
三度の膳に掌を合わせてる倖せよ
友達とお茶の葉摘みにお茶呑みに

鳥取県　田村きみ子
遺言を書いてずぶとく生きてやる
逆立ちをすると邪心を見すかされ

鳥取県　津村八重子
七難を耐えて女の太い指
ときめきの胸は内証にしています

和歌山市　神平狂虎
小舟ゆらゆら売られていった僕の絵よ
盃の底にもきつい坂がある

富田林市　松本今日子
春愁や音もたてずに花を抱く
真中に紅のはじらい握り飯

和歌山県　新谷忠昭
俗気また晴耕雨読を妨げる
もらいもの菜園自慢聞いてやる

高知県　小澤幸泉
あれこれと思い残して友の逝く
一枚のハガキに過去がよみがえる

高知県　北川竹萌
瀬戸大橋多い期待に呑まれそう
土佐訛りドラマの話題和みあう

姫路市　中塚遊峰
北限の岬に立った思いの日
沈黙を誤解されてる通夜の席

米子市　小村てい子
薬湯が漂う部屋で春を病む
大山の緑に恋をしたわたし

竹原市　石原淑子
自分なりの歩調丸い風になり
倖せに慣れて不満をつのらせる

吹田市　園田文子
煮てさ焼いてさすかたんばかり陽がくれる
堪えしのぶ母の勲章ある笑顔

箕面市　椎江清芳
乾杯の音頭明治の生き残り
温泉に来てもやっぱり妻の酌

東京都　吉川一郎
冷蔵庫寂しがり屋が一杯に
正義感気負い過ぎてる頑なさ

河内長野市　植村喜代
ごみ出し日猫もこの日は忙しい
ボーナスを皆持って行く合格通知

岡山県　直原七面山
犬連れて娘は逢いに
海を見て亡父を恋い

自選集

人一人死んで一つの時代去る
女だてらにとおんなが考える
ベースアップが欲しいと思っている卵
手の内が中々読めぬ初試合
リハビリのつもりなるべくなら歩く

金井文秋

とげのある言葉をまるく聞くも齢
まだ喜寿の耳底にある子守唄
金婚を祝う夫婦の数え唄
ご無沙汰を詫びればゆらぐ亡父の灯
板の間の艶が亡母を物語る

藤村〆女

竹やぶに生れた風が語りかけ
さやさやと風が渡って竹の径
指のあとが残っていそうな竹の青

正本水客

爪先上りに竹やぶの径雨になる
嵯峨野を歩く心の準備はできている

児島与呂志

一病息災私は幸せかも知れず
決断は下駄の鼻緒を選る如し
禅寺で一計案じた蟻の列
失言も開き直れば無になれる
誇らしい話に老いをちょっと見る

黒川紫香

五月雨をひとりで歩く京もよし
さよならに弱い女の柔い肩
猫さえも帰らぬ夜にあるしじま
八百の嘘を並べてまだこりず
道少し変えても嫌な奴に逢う

市川鈴魚

団地出勤帆柱高く上げた船

抱かれたは夢で耳鳴りまだつづく
耳貸さぬ男に風がよく喋る
思いちがいで負けたと言えぬ髭がある
一喜一憂男が靴を光らせる

小林由多香

亡母憶う母の愛した香をたく
被害者が寒い示談の風に逢い
ブランコにだあれも居ない祭笛
達筆の硯くぼみが少しある
自信ないテスト鉛筆とがらせる

工藤甲吉

このほかは何も出来ない田を起こし
菩提薩埵は宇野千代を言うならん
ケチンボの願いへ神はあかんべい
霊感商法そんな御先祖どこにある
お支払いだけに用ある我がハンコ

本田恵二朗

糟糠へちっちゃな花を持たせとき
髪型を変えたぞ失恋したらしい
今日も晴天欲捨て去った身軽さよ
底知れぬ博学多くを語らない
楽しそうに嘘並べ合い並べ合い

大矢十郎

旅淋しスーツケースに黒い服
不老長寿こんな薬がある熊野
真向いのミニが時々芝居する
今まさにくしゃみへ妻が話しかけ
しとしとと思い出一つ雨が降る

野村太茂津

曖気にも出せぬ嘘です懐手
眉唾の歴史は書かぬ父の旅
放埒の旅で人間決められぬ
好感が持てる素直な鉢合わせ
苛め苛めて自分が細く消えぬよう

山内静水

尼縁之助氏を悼み一句

惜しまれて往く柳魂の炎え尽きて
有夫恋とどのつまりはオスとメス
杖ついてまでは履けないハイヒール
嘘をつくたびに重たくなるバッグ

藤井明朗

四季巡る思い出光る句碑の顔（尼先生ご死去）
人情もひとり芝居に終る父
自由平等　嫁がシナリオ書いている

欲で掴む札束は落し穴がある
満開のさくらを賞でる詩の客

水粉千翁

クリスマスローズの背伸び春の女
お達者のへいへいへいと春の風
襟を合わせてあなたの礼儀貰います
てのひらは返すものとは知りながら
お粗末な話　蝶ネクタイ似合う

米澤暁明

ライバルを励ましておく下心
恩返しとは心ない近づきか
パフ使う指が止った物思い
音ほどは日曜大工きかぬ釘
歩には歩の生き方がある人生譜

高橋操子

唯ゆれて妥協はしないイヤリング
せっかくの花をあらして戻り寒
春の使者大陸からの黄砂舞う
やまい重く心のうさよ今日も雨
面影のままでわたしの恋進む

八木千代

私に　ははは今でも塩を振る
今日も川を覗き失くしたもの探す
能面を脱ごう窒息してしまう
赤い小さいお釜に春の水を張る
自動ドア前へ出るよりほかになし

小出智子

豆腐屋のおばさん夏を待ちかねて
サラリーマンの妻を羨む八百屋さん
悩みなさそうな魚屋のおかみさん
どこかわるいのですかと言う酒屋
ケーキ屋のドアは軽く出来ている

月原宵明

桜観る日のマニキュアはせずにおく
赤い鼻緒で男が雨のポストまで
子沢山北向きなどと言うとれず
鳩時計妬心をそそる首を出し
春風にさきがけ女の膝小僧

橘高薫風

高野山

山桜高野四郎は聟殿よ
昨夜聞きし鐘を孫娘と仰ぐ

高鷲亜鈍さんへ

赤いベレー老いてますますフォービズム

川柳太平記（121）

川柳の群像

高橋散二

東野大八

川柳雑誌に須崎豆秋、ふあうすとに延原句沙弥、番傘に高橋散二―このユーモア作家三羽烏については、うち二人は前章でふれた。いずれ劣らぬこのユーモア川柳作家のあとに続く作家が現在一人もいないということは、まことに寂しい限りである。

本稿は高橋散二をとりあげたわけだが、この作家は右の三人中でもきわだって一読明快、その絶妙の可笑味は、豆秋、句沙弥とは一味ちがったストレートな笑いがある。筆者は古くからの散二川柳ファンであったことを白状しておく。

散二には、散二川柳の粋をあつめた高橋散二遺句集「花道」（昭和48年刊）がある。この跋で礒野いさむは次のように述べている。

「散二川柳はことさらに日常茶飯、身辺雑詠を避けて、演劇・小説・童話の世界に素材を求めて、華麗な色彩とロマンをくりひろげている。散二は演劇通というだけでなく劇の中に展開される人間の哀歓を適確に拾う感覚を身につけて、ときには舞台スケッチ、劇場風景にまで及んでいる」

また序文で近江砂人はこう推賞している。

「番傘の歴史の中で、あなたほどたくさんの秀句を世に示した方はいない。あなたの句風は当百にも五葉にも似ています。大変通な芝居の川柳、読む者を吹き出させる滑稽な川柳は他の追随を許さないものがあります」

こう激賞された散二川柳を鑑賞してみよう。

○メリケン粉つけても海老はまだ動く
○気ちがいが癒ってたまご売りにくる
○金貸さぬようにと親がきて頼み
演劇通でなければ詠めない句。
○長火鉢前の幕から五年たち
○折檻に雪のつもった日を選び
○尻からげして死んでいる定九郎
文学的風味に溢れた抒情的点景句。
○神楽坂あの学生は芥川
○一葉は風呂へ暈被たお月様
○漱石へ梯子をかける古本屋
散二川柳おはこの名詞の重ねぶりの句。
○仲居から仲居の死んだ話聞く
○正直に粗品と書いてある粗品
○橇で逃げた女を橇で追う吹雪
軽妙洒脱穿ちと可笑味に溢れた散二川柳は、明確に定義づければ古川柳の延長そのものである。柳樽の持った人間的風味を遺憾なく現代の持味に変身させた切れ味の冴えは、この人独得のものである。従って現代の川柳人が捨て去っていった古川柳の味覚をそのまま承け継いだ作家は、散二その人であったと思わざるを得ない。高橋散二こそ、こうみると最後の古川柳作家といえるのではないか。

散二は本名高橋福市。明治42年7月香川県多度津に生れた。大正5年大阪府下門真市に

移り大正13年から大阪中央郵便局に勤務し、生涯郵便局業務畑から離れなかった。そして昭和46年8月18日交通事故に遭い大阪市内の路上で62年の生涯を終った。釈浄福。

柳号の「散二」は、散という字が好きでつけたとあり、当初は「散江」であった。何故かこの散には運命的な因縁を感じる。

川柳に手を初めたのは昭和8年ごろで「番傘」一筋、昭和23年本社同人、のち参与。昭和30年代には本社編集部幹事で活躍した。

○校正の眼がさかさまの田をみつけ　散　二

番傘社中でも屈指の酒豪で、議論を好まず、寡黙な性格で、苦労人気質が独自の散二川柳を作り出したようだ。

一枝夫人の話によると、散二は幼少にして父を失ったが、芝居好きの母に連れられて、小さい頃から芝居に親しんだ。このことが川柳作品に大きく影響したとみられている。

葬儀（昭和46年8月19日）の斎場で、砂人の弔辞のなかにつぎのような個処がある。

「あるとき、今はなき食満南北先生が、あなたの近詠を見てハタと膝を打たれ、この川柳家散二さんはうまいねえ、と感銘されました。「印籠の薬がすぐに効く芝居」がその句であったような気がします」

「散二川柳の芝居の句について、ある人、ある時、散二は川柳すべき素材の発見に苦しんでいるのではないか。懐古趣味で芝居の句は難解だと評した。散二はそれに答えて

私の芝居の句は素材に困って作ってきたのではない。私は芝居の句を作る時間が最も楽しい時間なのだ。今日見てきた芝居を、或いは何時か見た舞台の記憶を想い起して作句する。曲りなりにも一句を得たときはしみじみと川柳する喜びを感じる。懐古趣味は捨てよといわれるが、私は芝居の句に断ち難い愛着を持っている。そもそも川柳に手を染めたばかりの私が、最も感銘を受けたのは、岸本水府、木村小太郎氏らの芝居の句であった。

○花道へ東海道の布を敷き　　水　府

○花道の洒落は袂に手を入れて　　〃

○あとには一人政岡の母性愛　　小太郎

○沢市のうれしさ踊る外はなし　　〃

私は今もこれらの名吟に新鮮な魅力を感じる—と芝居の句に対する強い信念と愛着を述べている。これが散二川柳のバックボーンになっている」（散二遺句集「花道」跋より磯野いさむ）

亡き散二の川柳作句上の天分と人柄に水府も傾倒していたようだが、「番傘」は昭和46年9月号に約七頁の散二追悼特集を編み、「川柳人間座」創刊号（昭和50年5月）にも—高橋散二その世界「花道」研究—の特集を組んでいる。

散二遺句集「花道」の書名は、一枝未亡人の希望によるもので、この書名には亡夫への芝居供養の意味がこめられているという。

「そのお人柄を思い出しますと、非常に地味な人で、しかも腰の低い人、たとえばこの人が畳敷の句会へ入ってくる姿をみると、小腰をかがめて、私が若い頃通った寄席の、常連の旦那衆が入ってくるのとそっくり。とにかく客観の句オンリーで、自分の主観句というものはほとんどみられません。それから句会でも決してムリをしない。気に向いた句はサッと出すが、相性の悪い題はソッポを向いてるんです。句会の入選率も二句か三句〃今日は全没ですねん〃と気さくにいわれる。そういうところがみなの親しみを増したようです」（「番傘」高橋散二の人と作品・岩下俊作）

★次回は「**中村冨二**」

誹風柳多留廿六篇研究（三十六丁）

南　得二・小野真孝・本多正範
石田成佳・大屋六郎・八木敬一
鈴木　黄・石田晋一・多田　光
故岡田　甫

613 **世帯道具か寄り合ふと松がとれ**

南＝七種の行事を詠んだ句。

「世帯道具が寄る」とは、普通新しい俎の上に、火箸・すりこ木・庖丁・杓子・わり薪の五種を並べて、交互につかって七草を打ち囃すので、これらの道具を揃えることを指す。

句意は、七種の宵「世帯道具が寄り合うと」同日に門松が取り去られとなります。

七種は弁慶ほどな道具だて　六八28

八木＝賛。

七種ハ台所中の音をさせ　宝十松3

朝寝ぼう六日に松を取はじめ　二〇28

台所ハたたく表ハひっこぬく　一〇31

多田＝賛。

614 **弥生とさつきごたまぜの壇の浦**

南＝寿永四（一一八五）平家一門壇の浦に追いつめられて入水滅亡の際の情況を、安徳天皇はじめ附随の公卿官女を三月三日の雛人形に、平家一族の武人を五月五日の兜人形に見立てて、壇の浦に浮んだ死体が、雛人形（弥生）と兜人形（五月）が「ごたまぜ」さまざまに入り乱れたごとく浮んでいたろうということ。

三月と五月のやうな壇の浦　二九25

弥生端午を取ちらす壇の浦　一一九3

多田＝賛。

壇の浦今も烏帽子や太力がとれ　一四一22

615 **はつかしく丸わたて来る伯父の内**

南＝「丸綿」は、婚礼の時、花嫁の被る綿帽子の事。

伯父の内に綿帽子で来るとは、先ず従兄妹添いが考えられる。

句意は「伯父さん」「伯母さん」「お兄さん」等と気易くその家人に対し、出入した伯父の家に、さて今改まって花嫁として、綿帽子をかぶり嫁入るとなると、どうも恥ずかしいとのこと。

来た晩に物をいふ娘従弟也　笠二23

さっそくに用立ッ娘ハいとこなり　安八智3

そのよからはたらく娘はいとこなり　安七義1

多田＝賛。

616　**いただひてのんだ息子がいっちもて**

南＝遊客が遊女に持てる持てないということで、通人であるとか野暮であるとか、遊客の傾城買心得ともいうべきことが問題にされる。

「いただく」は、薬など飲む時、祈る気持で頭上においただくことで、盃を頭上にいただけば、いかにも野暮ったく遊女は脇へ眼をそらすのであるが、首題句の場合は、うぶっぽく可愛く見えて結局一番もてたということになる。大一座の場合か。

いただいてさすがむす子の買はじめ　七36

小野＝賛。大一座でしょう。

大一座いただいてのむやつもあり　六14

石田成＝大一座と思います。

鈴木＝うぶで律義そうに見える男は案外もてるものだ。

多田＝賛。「遊子方言」の「子息」を思い出した。

617　**鷹の羽て掃キ庭にする本望さ**

南＝違鷹羽の紋は浅野家家紋。本家広島四十二万六千石と赤穂五万三千石とは同形であるが、鷹の羽渦紋が相違している。柳句の場合殆んど赤穂浅野と見るべきと思う。

鷹の羽は矢羽として珍重されるが、本句の場合は羽箒として使用、「鷹の羽て庭を掃く」となり、赤穂浪士が吉良邸に討入りして本懐を遂げたことを譬喩的に現した句。

鷹の羽の家中死スともほハつます　八11

多田＝賛。

618　**泉岳寺わるひ工もする所ロ**

南＝「工」は、たくむこと、かんがえ、てだて、くわだての意で、本句の場合、泉岳寺墓所にある赤穂、浅野内匠頭に通ずるか？

見物にむだ口の無ィせんがく寺　九21

赤穂浪士の壮烈な義挙に感動を新たにし、敬虔な気持で義士の墓に参拝するが、その反対に「わるい工」とは、芝高輪の泉岳寺から近い品川あたりへ帰途繰込むこと等けしからぬたくみをする所でもあるとのこと。

せんがく寺わるいたくみをむすこする　六九30

品により息子のたくむ泉岳寺　九〇36

八木＝賛。浅野内匠頭に掛けてあることは重要。そのために寛政の改革でこの句は削られている。

多田＝賛。

619　**はてずるひやっと女房の櫛を借り**

南＝「廻り髪結が時過ぎても来ぬのに、小言をいいながら、女房の櫛を借りて一時の間にあわせに髪を撫でつけておく体をよんだ句」とは『解・鑑』「揺籠から墓場まで」の杉本長重氏の解。一応この解をとっておく。

小野＝あんなにちゃんと約束しておいたのに未だ来ぬ「はてずるい奴だ」と女房の櫛を借りたのでしょう。

多田＝同右。

620　**雛店へ素見ンのはづて娘行キ**

南＝雛を欲しがる娘は、買って貰えなければ只見るだけでもいいという。そうした約束で雛店へ娘を連れて行く。

座五の「娘行き」に、只見るだけでいいという幼い娘のとことついて行く姿を想像すると、なおましてそのせつない気持が感ぜられ、いじらしく哀れである。

素見さと十軒店へ女房行　五六9

ほしい顔せまいぞとひな店へつれ　九15

小野＝賛。いくら素見のつもりで行っても、いざ見れば欲しくなるのは人情。

おそわったとをりにひなをねだる也　一八22

多田＝賛。

江戸川柳富籤志 (1)

阿達義雄

(一) 序説

江戸時代には富籤のことを単に富或は富突と言った。幕府が社寺の修理費に充てさせるとの理由で、この富の興行を許したのは享保十五年で、京都御室仁和寺に於けるそれが最初であったと言われ、又は江戸の谷中感応寺の方ざ先であったという説もある。

『正宝実録』によると、元禄五年五月に江戸市中の富突講が禁じられている処を見ると、此処では既に元禄時代に富突が行われていたことが分る。

富突というのは、大きな木箱に容れてある番号入りの、多くの桐の小札を先ず充分に振り動かし、突役が其の箱に穿ってある小孔から長さ三尺、穂先一分程の錐で、是等の木札に突き当てる仕方に基いて呼んだ言葉であって、その場合、その最初の錐先に突かれた木札の番号が一の富の番号で、之に対する賞金は大抵百両と定まっていた。

初期の富興行においては、一番目の一の富の当りが最高の金額であって、二の富、三の富と次第に低い金額になっていたのであるが、文政の頃から一の富の百両は其の儘として、二の富、三の富と次第に金額を多くする様なことも行なわれたようである。

この場合、百番目のものを突留の大当りと言い、二百両又は三百両、稀には之を千両とした富突もあった。

富興行の場所については、時代によって相違はあるが、最も有名なのは谷中の感応寺、湯島の天神、目黒の竜泉寺で、之は江戸の三富とも言われて有名なものであった。

『宝暦現来集』には「文政六年より所々へ富御免仰せ付けられ、江戸内計三十一ヶ所有之ける」とあり、文政末に刊行された『わすれ残り』には、富興行の個所として、谷中感応寺、浅草観音、杉の森稲荷、銀町一丁目白旗稲荷、麹町平河天神、芝神明、茅場町薬師堂、本所回向院、霊岸島などが挙げられている。

なお、天保期に入ると、更に興行個所の数が多くなり、その上、以前から行なわれていた影富、第付等の様な、一の富の番号を標準にして行なう賭博的行為の弊害が甚だしくなったため、遂に天保十三年三月、水野越前守忠邦によって、富突一切厳禁ということになり、さしも江戸の民衆を沸騰せしめた富興行も、又、之に伴う影富や第付も其の痕跡をも残さぬようになって了ったのである。

富興行は、その初期には一ヶ年三度であったものの、文政期には毎月一度ということになった。

富札の代金は時により所によって相違があるが、享保の様な発生期の頃には、京阪では、十二文とか七十文とかの廉いものであったが江戸の富突では、一朱、二朱、一分、二分など色々であった。川柳等に見える富札の代は殆んど一分と相場がきまっていた。

(二) 富の札

先ず誰にも分り易い「富の札」の句を示してみよう。

富の札会日までは生きて見え　宝暦一二・信1

――「会日は抽籤日である」

結構な札を血の出る金で買い　八七・11

貧すればどんと取る気で札を買ひ　一〇四・10

富の札買ふとむほんが腹に出来　一二七・102

富うりが見込んではいる御不勝手

錐で突く札を血の出る金で買ひ　九四・5

あら何ともな昨日は過ぎて富の札　四八・16

――芭蕉の「あら何ともな昨日は過ぎて河豚汁」の文句取　一八・25

首くくり富の札など持っている　五・31

富札の引き裂いてある首くくり　七・22

慰みに一枚買った奴が取り　川傍柳五・13

次に富札代一分(一歩)を詠み込んだ句を並べてみよう。

感応寺命からがら一歩捨て　五五・8

不二の夢谷中へ一歩遣って見る　五七・15

富士の夢山がはづれて壱歩捨て　四四・14

桐一ト葉出すは錐が便り也　六三・22

――右の「桐一葉」は暗に一分金を指している。

（つづく）

瀬戸の海を斬る

本田恵二朗

瀬戸大橋を渡るまでは生きとらニャー、オエンぞ（岡山弁）を合言葉にしていたご老体達が、マイカーや列車で嬉々として渡り、その素晴しさに大満悦、長生きしてよかったなと語り合う姿を、あちこちで見る昨今である。私もご多聞に洩れぬ人種の一人である。

早速に長男夫婦の車で、老妻も同車して、下津井インターから坂出インターまで往復してみた。フェリーなら五十分要するところを、たった十分間で渡ってしまうから驚きである。愛用のカメラを油断なく構えているものの、シャッターチャンスがアッという間に消えてしまうではないか。十分間で瀬戸内海を袈裟斬りしてしまう早技は正に居合斬りのその如くある。いつも見なれた島たちも、全く違った角度から眺めるので、どこかの名所に旅してるような気になったりもする。

浩宮がおみえになって、下津井城址（拙宅至近）から多島美や瀬戸大橋を眺められたり、また皇太子御夫妻が、大橋完成式典にお出になったり、ひとしきり嬉しいさわぎの連日であったが、現在は落着きを取戻して、博覧会だけが人間の渦を巻いている。

皇太子御夫妻がお乗りになった列車マリンライナー号の一号車（グリーン指定席）の乗車券を確保することが出来たので、長男夫婦と私夫婦が、往復乗車を試みた。マイカーでは展望がよくないが、列車は展望満点、殊にグリーン車の座席は豪華で、回転自由、窓からの展望は値万金、申し分なし。それにしても往復が短時間過ぎると思うことしきりである。また反面、橋至近に住む人達は、想像以上の音響に悩まされておられる。拙宅はその害もなく有難く思っているが、列車のスピードを少しゆるめることで音響を少なくすることが出来るのではないかと素人考えをしているが、めいわくをしている市民のいることを見捨てないで欲しいと願望してペンを置く。

瀬戸の橋島また島に支えられ　恵二朗

五湖抄

黒川紫香選

母負うて花のトンネルくぐり抜け　高槻市　笠嶋恵美子

六道の辻でさいころ振っている

子は命土嚢を高く積み直す

マリオネットの自信過剰を嗤われる

温室の花ですお手を触れないで　佐賀県　寺中三枝子

今朝の鬱解けず水中花を涸らす

ふとよぎる不安ペンペン草が鳴る

猫舌のあなたに合わす玄米茶

袖口の綻び妻よ心せよ

一杯の酒で家路を見失い　今治市　野村京子

春待たず哀しい恋の片結び

もう誰も追っては来ない北の駅

恋を舞う少女が履いたトウシューズ

グラスで咲き思想は持たぬ水中花

誇り捨て父の甲羅が乾き切る

春の絵に私のうたを書き入れる　米子市　足立由美子

一服の抹茶で朝を入れかえる

息切れをしない歩幅で生きている

四季の花　庭で咲かせる幸がある

義理借りた時から首がまわりかね　八尾市　高杉千歩

竹とんぼ休んでおいき豆の花

電子レンジ操作男も自立する

婦人会館女が変る生きている

呆けてない応えが欲しい長電話

思い通りになるのも恐い狂い咲き　静岡市　片平静代

残月が朝日と別の位置にいる

ご飯ですパパは日曜大工さん

一徹を通して寂しい世を渡り

表彰をされて重荷がつきまとい

二者選択曖昧な手を挙げる

傷心の女に触れる春の風　尼崎市　児玉歌子

そっと手を握り群れから抜けたい手
雑用をさせて社員の意気を見る
肩を持つ女に油断はせぬ事だ
企みがある横町の絵看板　富山市　舟渡杏花

もう二度と掛けることない椅子を撫で
年中無休軍手の穴から覗く指
ワンテンポ遅れて予言歩き出す
凡夫のカバンへ鼻の脂を塗っておく
隠し味程度のトリックポケットに　名古屋市　藤井高子

皿の数に負けてしまった皿まわし
すこし汚しておかねば浮世の絵にならぬ
玄関の鏡も結構人見知り
長病みの父のある日は仏の瞳
反古にした筈の証文しゃべり出す　熊本市　永田俊子

手のひらでゆれる豆腐をだまし切る
活けづくりの鯛にはったとにらまれる
同権論どうでもいいよ焼きいも屋
小鳥のラブコールせめてピンクの服着よう
年金の飴とけないようにして暮す　岡山県　清水悠貴女

やさしさの一点におく鬼の面

猿芸の太鼓叩きのまま果てる
和紙人形わたしの好きな藍を着せ
原点に戻る夫婦の熱いお茶
さりげなく耳は女の噂きく　広島市　流奈美子

早春譜ステップでくるサクランボ
進化論七輪出してサンマ焼く
家中の風邪締まらない顔並ぶ
雑草の踏まれる事に馴れて伸び
平和論蛇口の水が漏れている　長岡京市　木本如洲

感動のドラマが終る波がしら
傷ついた街から友が消えてゆく
健康に敏感すぎる豆のめし
坂ひとつ越すといのちが軽くなる
唐招提寺の砂は彼岸の地獄もつ　熊本市　宇野昭代

友達に面会が来た寮の夜
退職が延びてプランを練り直す
春帽子かぶって足がはずんでる
還暦の赤いセーターよく似合う
突風に乗って帽子が逃げて行く　熊本県　大川幸子

錆させちゃならない母の敷くレール
おじぎする癖がなおらぬ電話口
プライドが堅い殻から抜け出せず

生き甲斐というパチンコの指のタコ
半分は出ていた妻の角かくし

米子市　大田　みさと

ふところがふくらんでいるだけでいい
うれしさを包むえくぼが二つある
春の朝嬉しい夢に起こされる
お揃いの茶碗洗える老いの幸
ハンカチの正方形が憎らしい

徳島市　宮武　まつ女

日本髪おんな女の業を埋め
野地蔵もわたしも濡れる俄雨
約束へ正面きって来る鴉
七転びしての素足へ陽が昇る
騙し絵の中に笑えぬ嘘がある

鳥取県　山根　八重

人情の涙が好きなさくらんぼ
ひとつ咲きふたつこぼれる紅椿
散り際をきれいに飾る風である
パレットに春のみどりをしぼり出す
落ちこぼれなどないつくしよく揃い

西宮市　秋元　てる

たずね人眠れぬ母がここにいる
目いっぱいじらしておいてノーと言う
問われない齢を答える年齢になり
花便り遠くに聞いて看取る日々
楽茶碗指になじんで梅雨に入る

熊本県　岩切　康子

初かつお直送便の有難さ
陳情書庶民の声を積み上げる
食い下手を犬がきれいに処理をする
肥後つばき幾種か咲いて満足し
旅で得た種子ポケットで年を越し

京都市　松川　芳子

タバコの輪誰も相手にして呉れず
ジョギングがその気にさせたハワイ行き
世情には流されまいと杭を打つ
自己主張ましろい円がまだ画けず
高僧の話上手に聞き上手

久留米市　鶴久　百万両

天に在わす父の訓えが耳朶にある
讃美歌が流れる曲がり角が好き
絵日記のパパは良寛さんのよう
牙をむく妻といくさができますか
五月雨に男の軽い鬱が溶け

草津市　久保　和友

アップリケ夫は本を読んでいる
野沢菜が届く雪解色をして
春の駅久々に聞く故郷のうた
夫と鍵分けて出るドア春の音
若者の神輿はだかでよい海辺

大阪市　上田　柳影

春衣軽い話をしてくれる

拡大鏡になんと優しい老いの顔
大陸のうつを運んで来た黄砂
いつ株を買うたか妻の相場欄
眠れない話を持って娘の帰省

静岡市　沢田きん

校庭の号令乗せて春の風
弾みたい身体へ病魔つきまとい
生き方を変えて明日へ脱皮する
寝つかれぬ自分の脈を確かめる

吹田市　井上照子

あたたかい心戴く師の手紙
一人歩きする子に贈る知恵の本
母の手の造花ふしぎに生きている
スケジュール詰まった手帳くたびれる

鳥取市　小谷美っ千

この頃はさみしくなると爪を塗る
角砂糖ふたつ入れたら叱られる
シクラメン幸せ彩に咲きそろう
コンピューターわたしに指図してくれる

貝塚市　池田寿美子

銀髪にレインハットが背すじ立て
エッセイを読みたい午後の菜種梅雨
巻ずしもカステラも好き端っこが

三千院にて

花冷えや写経に温い仏の眼

静岡市　薗田漠沓

旅なれた人は財布を二つ持ち
ちょん髷と長ドス俺に似合いそう
投げたのは小石だったが大波紋
死んだ子の齢を数える母は老い

東予市　小山悠泉

墨壺の糸が妥協を許さない
子が孫が埋める夫婦の隙間風
母達者乾く間がない台所
美しい別れ思い出風化せず

岐阜市　渡辺杏村

かあさんの蛇の目の傘が美しい
お仕置を慰めている蝸牛
貧乏にもなれて楽しい壁のシミ
見下ろすとビルの谷間に傘の花

京都市　木村たけし

王様の呉れた言葉に罠がある
花柄のふとん童話を聴いている
石垣の歴史に生きる白い梅
腕相撲孫が百円賭けてくる

滋賀県　安田志津

空と湖けじめぼかして春の雨
手抜きした畠の草に泣かされる
頼まれて押すシャッターへ花が散る
さりげない添え書にしてアドバイス

兵庫県　東浦砥代

我が胸の中なる鬼をいとおしむ
いつわりの顔に仕上げる吊り鏡
母さんの涙に神通力がある
年金を十二で割った暮らし向き

堺市　桜沢あか里

花より団子植木鉢にはミニトマト
目玉品だけが売れてる忙しさ
真直ぐに伸びた松では絵にならず
丸いりんごまあるく剝いて満ち足りる

岡山県　杉本伊久栄

行く当てはあるのか雲に問いかける
お土産で解る隣の旅行先
瀬戸の橋四国が近うなりました
命ある限りは咲けよと水をやり

廿日市市　森川抜智

バラバラの古い辞典が手放せず
マイカーで渡るは瀬戸の花嫁か
年金を少し残して旅に出る
殻を割る知恵はラッコに教えられ

静岡市　杉山やす

デザートのように年寄り薬のみ
喋るだけ喋ってストレス置いてくる
万歳の余韻いつまで花吹雪
年寄りに宿題がある川柳会

静岡市　三浦つね

メートルに弱い明治の目分量
非常ベルロボットだけは慌てない
差し向い少し眩しい人と居る
叱られて寝る子は何の夢を見る

和歌山市　堀畑靖子

アルバムを広げゆとりを取り戻す
一通の手紙大事にしてる愛
多忙なり花は見頃になってゆく
不謹慎な言葉に軋む車椅子

西宮市　松本一郎

お帰りと鸚鵡が僕を出迎える
人生が終る日のこと考える
思い出は全て美化して懐古趣味
駅前の屋台で今日をしめくくる

大阪市　川原章久

油断した金の卵は孵らない
逃げ道は狸寝入りと決めてある
休診日富山の薬で間に合わせ
小さいがやっと父さん出来た墓

出雲市　金村青湖

ハンカチの折れ目に妻の愛がある
肩書がわずらわしくなる日曜日
傘を打つ雨も旅情の中のもの
人妻と饒舌になる趣味の会

熊本県　高野宵草

米を研ぐ音嫁さんに欲しくなり
今日からは定退なのに落ちつかず
残酷な指が運んだおどり食い
終業のチャイムへ睡気ふっとんだ

熊本市　黒田緑

雑学の入口に来て後退り
肯定の中の否定をつい忘れ
これしきをけちって見栄を張る虚勢
七色の旅は続かぬシャボン玉

熊本市　北川一進

人気スター何時もカメラの中に居る
体験入隊これも会社の初仕事
野良犬は野良犬同士誘い合い
声だけが誘って行った通学路

佐賀市　古川一徳

言訳をするから仮面剥げてくる
人間の裏が見たくて旅に出る
六法が出ると会話が行詰る
一本の藁にもあった好き嫌い

岡山県　土居ひでの

大海を知らぬ蛙がよく跳ねる
溜息をつくには空が蒼すぎる
底辺であしたの答さがし当て
独立の一歩踏み出す一年生

尼崎市　山田保蔵

球根が土を揺さぶる音がする
初孫にマネのできない顔見せる
貸しもせず長長説教聞かされる
考えてみますとうまく逃げられる

尼崎市　的場十四郎

群衆で目立つ男になりたがる
弁当をひらけば峠に春の風
怒鳴っても亡妻戻らぬ春の宵
病みついて窓一輪にはげまされ

佐賀市　江口万亀子

偶然に遺跡ほり出すショベルカー
仏壇にゴキブリ取りもおいてある
針一本不明に母のあわてよう
啓蟄にナメクジも出るにぎやかさ

尼崎市　森安夢之助

遠来の友が来るから掃除する
残り物食べて満足そうな貌
婆さんにカラオケ歌う芸がある
餅肌へ触れた石鹸の独りごと

尼崎市　鈴木良征

毛色の違う嫁パートで汗流す
若者が鍬を捨てても米余る
空缶を親がポイ捨てして見せる
ぼちぼちと新入社員鍛えたろ

鳥取県　太田幸枝

垣根越しの花と語っている独り
墨を濃くふくませて書く愛と書く
長寿して息切れのない靴を買う
よい友で居ましょう等と茶をいれる

静岡市　諏訪志げ

花の名をおぼえてからの散歩道
み仏の肩に悩みをおいて来た
すりへった母のぞうりのなつかしく
思い当る事があるので医者通い

鳥取県　横山房子

歩けない足でマラソンばかり見る
ふりあげた父のこぶしを母は解き
ままごとも値上げお客ともめている
この悩み洗うセッケン買いに出る

尼崎市　尾宮弘治

付き添いの妻がソファーで先に寝る
十階の家に老母も馴れてくる
パート着を投げ込む夜の洗濯機
バス降りるパートの母を傘が待ち

酒田市　永沢裕子

気まぐれな天気気儘な友の来る
逃避行らしい女は黙ってる
親だから言うのに小言宙に舞い
自惚れが僅かにあって役を受け

寝屋川市　宮崎菜月

齢とった証拠よ身体のことばかり
青柳に影を太らす二人連れ
じゃがいもの花は木綿の母に似る
過去責める自動ドアーが閉ざされず

尼崎市　野瀬昌子

目に見えぬ敵が電話を掛けて来る
春財布中に五円を入れてくれ
苦労して探し当てれば留守でした
我だけの人形飾る雛の宵

尼崎市　吉永伊三郎

未来永劫どころか三日と持たず
手のふるえ一円玉はもう浮かぬ
占いは外れたけれど陽は昇る
胃カメラが白で明るい顔帰る

静岡市　安本孝平

無い袖が振れる老母の迎春譜
夕闇に軍歌の響く父の部屋
告白のときの踏絵は買ってある
結び目をまだたしかめる夫婦帯

旭川市　朝倉大柏

明日の夢ほしくて開く時刻表
グルメブーム結局落ちつく母の味
化粧品の方が毎朝あきれてる
塾に塾やって安心まだ出来ず

鳥取県　西川和子

頼りない犬が一番よく吠える
ぶらんこのきしみをほぐす星が降る
郵便受に嫁の名前を書き添える
なつかしい友が方言持って来る

兵庫県　森脇和子

待つことも楽しい春のちらしずし
古傷が癒えずさみしい寒の道
赴任地へ好物送るのも内助
さよならの握手へさわぐ泣き黒子

島根県　加本義良

プライドを捨てて世間に丸く住み
車間距離保って本音崩さない
法話きくみな善人の貌でいる
掃き寄せて捨てたい程にある自由

大阪市　吐田純子

すいとんを喜ぶ夫は戦中派
酒好きにドクターストップ聞こえない
好きな人出来たらしいと三面鏡
雨雲が物干竿をいそがせる

寝屋川市　井上すみれ

今年又右の手袋だけ残り
夕焼けに肩を並べて浜乙女
沈黙が囲んだ思わぬ請求書
我れながら下手な言い訳して寂し

十和田市　阿部進

根まわしの効いた会議が生臭い
守り札持って居たのに事故に遭い
渋滞が何んだと走るミニバイク
ママゴトの亭主が尻に敷かれてる

熊本県　増田一乗

難病がすぐにも治るチラシ来る
流行を追えとテレビが洗脳する
天与とは無心に乳吸う涼しい眼
趣味講座鼻歌まじりにペダル踏む

藤井寺市　高田美代子

倖せやさかい善人にもなれる
試されていそうでうっかり怒れない
お坊ちゃん育ちで風を避けきれず

河内長野市　大西文次

取り立ての免許で旅に誘われる
女難の相妻に話そかやめとこか
痩せる本買って帰りに上まむし

鳥取県　田村千絵（高二）

フルートがとっても好きで吹いてます
空想は十六歳にこだわらぬ
青春は両手を打って飛びながら

羽曳野市　吉川寿美

義理と見栄のせて粗品でございます
手さぐりで姑となる日の絵の具皿

待つことになれた女の二十五時
鳥取県　乾　隆風

不揃いな人間だから面白い
花柄を揃えて枕買っておく
より添いながら杜若は燃える
高槻市　芦田静江

胡蝶わび助知った茶室のひとり言
塔五輪からすと遊ぶ古都の昏れ
郷土うりこみ多彩な橋の貌になる
鳥取県　西浦小鹿

バナナには南のうたを唄わせる
ライバルの的を大きくしてやろう
おでん屋にホテルの鍵を忘れちゃった
和歌山市　田中輝子

未完のままの映画今も胸にある
久々の映画結婚記念日に
独りみた映画生涯明かすまい
和歌山市　森　茜

お膳立てできたところへいつも来る
散会が近づきジョーク冴えてくる
美しいものだけ見たい老眼鏡
尼崎市　木下義嗣

天満宮渡り廊下で梅眺め
別れ船カモメの群れもついて飛ぶ
夜桜の花見の宴に月映える
堺市　山本半銭

料理屋の弁当名前が凝っている
風邪もよし夫が粥をたいている
子と話す子の目の高さまでおりて
岡山県　千原理恵

ウインドガラスにしゃれたポーズをして見せる
蟻の列乱さないのが蟻の主義
一匹のハエ友となる闘病期
大阪市　亀井円女

呆け除けにしごきますよと恐い嫁
紙人形の胸に残したわらべ唄
クッションを素直に置ける年になり
鳥取県　黒田くに子

方言の男の台詞信じよう
我慢するたびに胃ぐすり飲んでいる
外人がロビーで読んでいた漫画
京都市　小林英子

引越のシーズン汗拭くエレベータ
赤いバラ馬酔木の白へ嫉妬する
島六つ履いて四国へ瀬戸の橋
和歌山県　森　三枝子

台所のくらし知ってるゴミ袋
客間などないがお客の絶えぬ家
顔ぶれが変り四月の通勤車
伊丹市　小熊江美

婚約はしないが一緒に住んでいる
思慮深い男の返事遅過ぎる
野球拳の強い女にぬがされる

豊中市　村上　とく子

言訳をするからはげて行くメッキ
涙が落ちそうだから喋らない
うれしさを一緒につめてランドセル

高槻市　神野　節子

時どきは仲間でいたいと母は来る
春よ春　電話で変身する話
朝露にぬれて人待つ花見ござ

熊本市　鶴田　謹爾

この駅で降りて見ようかひとり旅
連休に日帰り旅行子ら不満
ベチャクチャと茶の間のテレビよくしゃべり

寝屋川市　太田　藍子

寝たきりの母の笑顔にすくわれる
決断は無口な父のアドバイス
ごきげんな父は今でもバナナ買い

唐津市　浜本　治幸

切り札を持った強さが疎まれる
春が来て一つの棒が外される
花よりも酒にひかれて莫蓙の上

出雲市　金森　知恵子

失意の胸へ優しさジーンとくる
どっさりと商魂はさむ朝刊紙
自画像のしみを消したら嘘になる

尼崎市　新井　泰子

どう見ても年上彼女の身が軽い
セルフサービスでビジネスの話など
昨年のジグソーパズルがまだ解けぬ

米子市　新　正子

手話習うナースやさしい娘です
定年を称えて妻の熱い酌
青いレモン下着は白と決めている

兵庫県　奥野　テル

割切った心に揺れる未練の灯
小鳥鳴く春に目覚めた少女の詩
一人部屋疑い知らぬ姫鏡

西宮市　上嶋　ふさ子

目薬をさしてドラマのつづき見る
子離れで母と旅する茜雲
大好きな煮ころがしは祖母ゆずり

岡山県　後安　ふさえ

野仏も傘が欲しかろ吹雪日は
雪山の奇跡へわが子待ちつづけ
お月様一緒にまたぐ水溜り

奈良県　横井　都姫子

入学式へ一歩前行く息子の背
入院の夫へ届ける庭の花

付き添いの髪の匂いを抱きしめる　岡山県　福原辰江

口にせぬ我慢の母の座りだこ
孫が来て大阪弁にみなそまり
日曜大工一ぷくの茶に子が並び　寝屋川市　内本さかえ

やんわりと左遷の椅子が用意され
駅からはお迎えのある披露宴
無雑作に見えて急所に釘を打つ　和歌山市　田中みね

メルヘンの世界へ誘う花の群れ
その昔抱かれた父の遺骨抱く
奥さんの惚気言うから大嫌い　和歌山市　山口三千子

気を抜けば障害物につきあたり
割り切ったつもりが夢でよみがえり
兄妹もライバルになる事を知る　和歌山市　丸岩晏

錦を着ないから駅に迎えがない
さりげなく葉書の隅に会いたいと
財テクの真似してみたが天につば　尼崎市　佐藤美代子

さわやかな死顔彼に負けました
カタカナを読むため眼鏡買いました
ハイハイと心はそっぽ向いてます

母の数珠紫色が目に残る　尼崎市　中澤向西

いそいそとパートに出てゆく妻の朝
一泊の高原ロッジで足伸ばす　大阪市　松永すすむ

大望を果たした後の酒の味
永遠に明日という日続いてる
何事も遊び心で過ぎて来た　久留米市　中垣米之

啓蟄に背をむく今日の寒さかな
確定申告一銭めぐる攻防戦
ここだけの話が村中知っている　羽曳野市　麻野幽玄

飲み過ぎはないが飲み忘れる薬
プロポーズその気になれぬ人ばかり
六十を越したおしゃれは皆似たり　黒石市　相馬英三

バス停の客一様に四股を踏み
損得の計算うまい老眼鏡
自販機を叩けば降りる怠け癖　鳥取県　木下芙葉

喜びも悲しみの座もお茶でもち
この人は茶飲みの友と亡夫に詫び
いさかいの後のわびしさ茶もさめる　枚方市　森本節子

春眠を貪っている気楽な身
空を見て何を夢みるラッコの子
春になりなあがくのびた福寿草
鳥取県　鈴木芙美

的を射た忠告湯気の向うから
再会のドラマロビーの握手から
お茶漬がほしいに妻は高いびき
尼崎市　明壁敏之

中流をバイトやパートで持ちこたえ
大粒の涙に善人騙される
流しびな娘の病気のせてやり
倉敷市　田辺灸六

年金に礼を言いたい花の旅
とぼとぼと当てが外れた工面坂
奇禍の子の椅子がポツンと空いている
高松市　竹川折荷

暫くは散り敷くままに桃の庭
橋桁へ物言いたげな島の屋根
種蒔けば烏が笑う禁猟区
神戸市　高吉恭子

アイドルと呼ばれる子役よくしゃべり
お料理の腕が泣きます一人居で
長く生き自分のドラマが又も増え
大阪市　今西静子

片意地な父を納得させた恋

こんな夜の話し相手を恋うワイン
伝承の味覚も継いで万福寺
枚方市　中山おさむ

還暦を可もなく不可もなく通る
ロックしてしばらく独りだけの夜
微熱もう老妻に凭れる声になり
大阪市　平山和多留（わたる）

嬉しくも淋しくもあり無料パス
なかなかに続かぬものは万歩計
愚痴だけは言わず語らず冥土まで
桜井市　前山美恵子

古くさいことがやっぱり合う律義
ライバルの味方をするな向い風
パワーくらべ団地の壁が揺れている
豊中市　玉井房子

蹲に琴の音を聞く心聞く（妙心寺退蔵院の庭）
児の網へ戯れている蝶二匹
顔のない紙人形に見る憂い
伊丹市　猪原石荘

アフリカの国の名いくつ言えますか
機嫌よく暮して妻の手が荒れる
食堂のネオンも切れて過疎の町
静岡市　久保きぬ

老いの足孫の動きに追いつけず
旅立ちへ気になる予報聞いて寝る

逆境に立ちて足場の軋む音
静岡市　中川　みつ

新聞よチラシの量に負けるなよ
お見舞のメロン値ぶみして切られ
カラフルな肌着へ姑の旅仕度
青森県　波　ただお

また一つ灯が消え団地の春の夜
柱時計毎日一分ずつ進み
花開きたくて蕾はムズムズし
青森県　福士トキ

お別れは寂しいことよ春の雨
目のごみを取る名人で祖母の舌
顔を剃る気になりました外の春
愛媛県　八塚三五島

フラッシュ一発心の奥をつき破る
狼かも知れぬ男と夜の街
街の灯に溶けぬ女のひとり酒
出雲市　岸　桂子

尼先生を慕う

師を追って追ってとどかぬ一里塚
目を閉じる明日が見えるまで閉じる
満員車となりの人の温み着る
和歌山市　根本　実

落日茫茫風の輪廻が果てしない
唇を忘れたいから花を揉む
風も私も同じ轍を踏んでいる
和歌山市　前田美子

お地蔵も立退きされる羽目となり
連絡船最後を惜しむテープ切る
マル優に近づく年齢がゆれている
田辺市　染道佳明

立喰いのうどんに挑戦しています
ジーパンで気軽に行こう宝石展
引っ越した隣の名前も知らなんだ
高槻市　津田スミ子

横車おしてゆっくり飲んでいる
摘み草のある場所老母の勘たしか
かすかな音でポストは責を負うている
島根県　小田川昭子

親思い娘がくれたバースデー
子離れの心を決めて荷を送る
感嘆の一語につきる瀬戸大橋
和歌山県　岩崎瑞穂

暇ないと言ってる人の長電話
ひな流し海峡こえて波の果て
国訛りがとりもつ旅の友楽し
八戸市　島田昭治

仏壇の鉦地獄まで届くのか
誰も見ぬ所で普通なことをする
ライバルの怪我真っ先に見舞って来

夜桜の花の一ひら浮くコップ　唐津市　入江喜久夫

四国路を巡る遍路もバスツアー
新入社ネクタイ一寸強く締め　泉佐野市　大工静子

来生で待つとは亡夫せっかちな
一人寝の全身耳にして一夜
従順に流れに沿うて老い生きる　静岡市　小木久子

店頭にメロンは少し気取ってる
褒められて今更本音言いにくい
口裏をあわせる嘘の面映ゆさ　弘前市　小寺ギホウ

小指の爪長くして耳掃除
胡座かく中三の娘をしかれない
シナリオがあり交渉を切り上げる　奈良市　米田恭昌

連絡船別れの曲が風に舞う
ハイポーズ鹿は無断で顔を出し
「サクラサク」はずむ娘の赤電話　愛媛県　石手武

住みついた風邪を追い出す玉子酒
正義感失せて見ぬ振りするずるさ
台所女が二人居て揉める　兵庫県　酒井靖子

明日の灯を掴めぬままに遺書を書く
その時の用意切り札持ち歩く
想い出を又も引きずる日の孤独　岡山県　中嶋千恵子

呉服屋の標的となる娘も二十歳
島々をまたいで通る瀬戸大橋
三猿になって聞いてるもつれ糸　岡山県　伏見すみれ

亡き母と同じ道歩くのもさだめ
心配をさすからキリキリ胃が痛む
大世帯になってリズムが乱れ出す　兵庫県　西脇冨美

たんぽぽも熟せば自由に翔んでみせ
兄征きし駅なく兄は還らない
太陽が好きで引越す植木鉢　島根県　小田川智重子

春ごよみ思い出せない〇印
のろのろのゴキブリ闘志が湧いてこぬ
銀婚式夫の癖をよう留めず　島根県　今川三津江

少額へ老いの非課税してもらう
春の陽へ小鳥もひともしゃべり出す
ほら貝の音に読経の和す峯寺　静岡市　青柳金吾

乾布摩擦やっているのに風邪をひく

万歳は悲しい過去の二等兵
意気の良い声で魚を買わされる
大和高田市　寺脇三倉

弟の嫁にどうかと里へ文
弟という男性と住む女
また来てる嫌いな人の靴がある
静岡市　丹羽定次

歳月は心の傷を埋めてくれ
古くとも僕には僕の暮し向き
生きている証しのように課税され
静岡市　谷紀代志

武者飾り忘れてならぬ親の恩
片隅で生きる証しの火を点す
鼻風邪も妻から移る夫婦仲
流山市　神田治

大あくび疲れが春へ溶けてゆく
ブルゾンで気どってみよう春の中
僕を軸に女が廻る春の夢
堺市　宮本かりん

見おとしを注意しているすみれ草
にこやかに会話相手の名が出ない
大阪市　山北三三三

制服の父の職場を子は知らず
家庭円満わたしは妻に惚れている
静岡市　柳沢たま

古里へ帰れば知らぬ団地出来
喉ばかり渇く今夜の寿司の味
静岡市　浅子まつゑ

うぬぼれも程度を越すと疎まれる
病院へ忘れた傘の梅雨晴れ間
豊中市　小林一夫

サンマ焼く匂いに安堵する暮らし
床の間を背に銭金のことばかり
和泉市　中川楓

コーヒーが出てほっとしたフルコース
一周忌今年は桜が咲いている
米子市　門脇晶子

好きな花いちばん好きな壺に入れ
方言を袖にかくして旅に出る
奈良市　井上大

税務署で励まされている長寿
海渡る列車ごらんよお母さん
鳥取県　伊吹富恵

着くずれの姿は鏡見ないでね
唇を噛んで多弁の自己嫌悪
岡山県　富坂志重

言い勝った言葉に悔いて夜がふける
健康がちょっと気取って春の服
大阪市　柏木八重子

春浅しぬれて行こうと妻が言う

片隅に一きわ映ゆる梅一輪　岡山県　松本元江

ちっちゃな手であふれる夢を組む積木
手も足もあって出来ない事ばかり　奈良県　和田萬里

窓開けて蠅一匹の大捕物
白木蓮うわさ話は気にしない　川西市　田中喜俊

雪山を画布にのせたが春がきた
フレッシュマン名刺出す顔あどけない　鳥取県　山田草人

竹とんぼ孫と削った夢飛行
波風の立たぬ夫婦で徽生やす　岸和田市　三輪通彦

廃校も知らず桜の花盛り
親も子も着飾って練る稚児の列　八尾市　向井しづ子

あく一つ落ちた気がするさつきの葉
こおろぎが食べて遊んで財テクる　静岡市　大石たき

引き受けて動きのとれぬ事もある
雨つづき空をうらんで床につく　鳥取県　久野野草

お茶席の作法も知らず招かれる
ロビーから英語楽しいプラン練る　唐津市　野田旭恒

吉と出た筮竹だけを信じよう
幸せと希望を積んで立つ舟出　唐津市　福島紀一

春愁や恋という字を書いてみる
山桜雑木林も花明り　八尾市　椎尾公子

山墓へ花見かねての老夫婦
ふる里へ感謝の日々の夫婦独楽　鳥取市　西村黙光

湯上りの裾へ絡まる旅の風
荒野にも緑の風が吹き渡り　大阪狭山市　桜井荘次

好き嫌い蠅にもあって膳の上
球根の力を溜める花を摘む　岡山県　福原悦子

悲しみに耐えて鍋の底磨く
窓一杯開けて鶯声遠し　寝屋川市　立床晴風

人様をあごで使っているリッチ
車内での目障り五指の貴金属　今治市　渡邊伊津志

心配を空の蒼さが掠め取り
活力の源という忙しさ　岡山県　後安江山

頬寄せて好きだと花の匂いかぎ
静岡市　西村千代

愚痴こぼす相手なくても日々達者
静岡市　西村千代

新年会胃薬一服しのばせて
大阪市　平山登代

耳掃除してから良い事よく聞こえ
大阪市　平山登代

女の児走るオモチャに目もくれず
藤井寺市　楠昭子

積立の旅は空しく己が怪我
藤井寺市　楠昭子

よく見ればメダカの学校にあるいじめ
吹田市　西岡豊

浮き沈みバランスがあり店閉めぬ
吹田市　西岡豊

地酒屋で充電をして二次会へ
静岡市　滝花喜平

見栄捨てて気流にのった春の宵
静岡市　滝花喜平

ああ四月悲喜交々の転勤期
岡山県　牧野秀香

繋がれし犬血統書とも見えず
岡山県　牧野秀香

吾が心臓勤続稼動八十年
大阪市　喜多佐津乃

過疎の町俄に騒ぐ町議選
大阪市　喜多佐津乃

ワンテンポ遅れて着いた採用通知
東大阪市　大平太一郎

横の人と気楽に話せた植木市
東大阪市　大平太一郎

ハワイへは土産はチョコと決めて発ち
泉佐野市　真崎浪速子

京の春どっと寺から祇園から
泉佐野市　真崎浪速子

栄転という引越の荷が軽い
島根県　菅田かつ子

勝名乗り受ける力士の大銀杏
島根県　菅田かつ子

ファイトが余り女をつい忘れ
静岡市　三井三津子

集金に昨日も今日もあそばされ
静岡市　三井三津子

動かない玩具にしてる子の育ち
米子市　服部朗子

同じ顔していて姉が売れ残り
米子市　服部朗子

抱っこしてずっしり重くなった孫
新潟県　高野不二

帯ゆるめかあるく歩く老いの坂
新潟県　高野不二

ループタイどこかしまりのない男
泉南市　坂根流水

昨年の日記同じ事が書いてある
泉南市　坂根流水

紀三井寺ご詠歌慕い坂のぼる
大阪市　桝本蕗児

春の海ゆらりゆらりと藻もゆれる
大阪市　桝本蕗児

カラスにも皇居の森に住む夢が
藤井寺市　菊地繁男

年度末予算あるから道を掘る
藤井寺市　菊地繁男

株式欄真っ先に見る妻の陰謀
儲けいい話を湯舟で聞いてくる

久し振りの友に出会った花の下　岡山県　平田たけよ

仏前に灯して遍路朝を出る　大阪市　島路太郎

死の予言医者に話せば笑われる
今年こそ嫁ぐと決めて見合いする　島根県　児玉幸子

首飾る花を見つけた孫の守り
ぼんぼりがつき夜桜へ妻誘う　寝屋川市　北風波留吉

入籍を決心させた岩田帯
行きずりの昔の女妻見抜く　岡山県　江口有一朗

こちこちと過ぎゆく時に追いつけず
柔かい心で固い身をほぐす　豊中市　三宅つえ子

車椅子つかず離れず蝶が舞う
絶望の距離蝶の羽濡れている　兵庫県　倉垣恵美

伊予柑一コ部屋の空気をひとりじめ
釣書またあずかり娘に無視をされ　京都市　山脇正之

大臣に詫をせまるという度胸
四月馬鹿つきたい嘘もあった筈　羽曳野市　福田満洲子

東京ドームパイポで堪えるカメラマン
名曲の耳を裏切るコマーシャル　奈良県　田中紀美代

ちらしずし広げて姑と花の宴
うれしさを一夜で詰めて妻の旅　吹田市　山田里子

熊園の中の小さき人の檻
ママコーラス窓いっぱいの葉桜へ　呉市　岡田寿美礼

紅梅に見惚れ足とめ老いの散歩
落ちてなお紅失わず寒椿　熊本県　立道善太郎

逓信記念日となりは局の起工式
休憩ベル少しおくれて鳴りました　大阪市　堀口欣一

降っているらしい心斎橋の雨
千日前やはりまむしの匂いから　島根県　高橋武衛

留守番の孫へ土産は忘れない
ぼんぼりへ今年の桜見て終る　出雲市　高橋きよし

人情が薄れ岩肌もろくなり
独り身で苦にせぬ汽車は自由席　島根県　岩田三和

目もくらむような岩場でひな育て

右の足サッと出させる左の手　寝屋川市　豊福路子

釋尼春好さくらの寺に旅立ちて
理髪師が夫の背丈を賞めあげる　和歌山県　田中隆積

コンニャクを作り我が家に灯がともる
園田駅ギターを弾いた過去おもい　大和郡山市　渡部トキワ

美しく老いて行きたい趣味と生き
老い独居趣味が心の糧となる　大阪市　平井露芳

ブランデー平湯の雪を舌で割り　故田谷力三氏

春風や野辺の花まで君送る　富田林市　加藤ミツエ

古希迎え夫と共に祝う梅
草餅をそっと供える辻地蔵　兵庫県　円増貞子

寝顔だけ見れば短気と思われず
溜息の出そう宝石店のショーケース　橿原市　西本保夫

室内犬よく寝る妻と二人切り
未亡人の意識で開ける車間距離　高知市　山崎一求

春なのに秋風が立つ倦怠期
デモの顔各国共に覆面し　大阪市　冨岡温子

中国語旅行の意欲かき立てる
決断はやっぱり夫にして貰う　八尾市　片上英一

香典は生きてるうちにくれないか
世の中をさかさまに見るナマケモノ　豊中市　額田明吉

ゴールデン温泉セットのバス旅行
賃上げのストも穏やかメーデー歌　島根県　松本聖子

犬でさえしょんだれ目になって春
大胆な柄も着てみる春の宵　鳥取市　武田帆雀

呑み足りぬ男残して辞表書く
惜敗へ勝者の校歌耳を裂く

◆ジュニアの部　尼崎市　新井朋子（中三）

散ってなおなにかを語る花の精
今年こそがんばりぬくぞと空にいう　尼崎市　新井晶子（小五）

友だちのふざけた顔がおもしろい
おじゃま虫私だけではないでしょう　大阪市　福西範子（10歳）

せんりゅうが成績アップの理由です
宿題がなくてうれしい春休み

—同人吟

秀句鑑賞

—前月号から

小西雄々

背が伸びた分だけ無口になる息子

玉置重人

息子が成長するにつれて、口数が少なくなってきた。すくすくと育つ喜びと、もう少し喋ってくれたら……という親心がうまく捉えられている。

花束と一人娘を引き替えに

舟木与根一

一人娘を嫁がせた複雑な心境が、「引き替えに」で、十分わかりますよ。

合鍵を郵送にしてさようなら

高橋千万子

親の反対を押し切って、好いた同士で同棲しても、何かの原因で簡単に別れてしまう新人類の姿が「合鍵を郵送」で言いつくされています。

歩行者天国やっぱり左右確認す

時末一灯

交通事故から自分を守るための習性が、歩行者天国でも、つい出てしまうとは、ほほえましい事柄といえましょう。

閏年の一日損か得したか

西出楓楽

オリンピックの開催される年に、閏年がめぐってくるが、これに対する損得は、人によって全く違った答が出てくるようです。

職持たぬうしろ姿は隙だらけ

松下たつみ

定年退職すれば、七人の敵にも気遣いは必要ないし、うしろ姿の背も少し丸くなり「隙だらけ」に見えることと思われる。

躓くとみんな他人の顔になる

安平次弘道

エリートコースを順調に進んでいても、何か失敗すると、表面的には同情しても、内心は喜ぶ者もいて、それこそ他人の顔になってしまう。

大正の間引きが続く春の雪

春城武庫坊

今年は春の雪が度々降った。この天候不順のためか沢山な訃を知った。大正生れが間引きをされるように、次々と逝くのは淋しい。

脳細胞空いているのに受付けぬ

本間満津子

脳細胞は百四十億個もあり、ふだん使っているのは一〇%程度だという。ボケ防止のため空いているのを、何んとかしたいと思っても、できぬところに人の悩みがある。

すぐ眠る秘伝を妻にきいてみる

田口虹汀

「貴方が傍にいるから……」と、返事をするかも知れない。

食べすぎた鳩は屋根からおりて来ぬ

石垣花子

餌を求めて近寄る鳩は可愛いが、食べすぎて屋根から降りて来ぬ鳩には愛想がない。飽食は人間ばかりでは無いようだ。

病院の七階で見る春の街

川崎秋女

春の街を見て、一日も早く元気になって、退院したいという意欲が湧いてきた。

老妻の前でも入歯外さない

川村映輝

永年、連れ添った妻にも見せてよいものと見せられぬものがある。入歯もその一つ。

松葉蟹値だけを聞いて旅終る

荻野鮫虎狼

山陰へ旅行しても、松葉蟹はあまりにも高すぎて土産にできず、値を聞くだけである。

63年度

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 63年1月号
至 63年4月号

路郎賞候補作品

正本水客

言うにいわれず大根をすぱすぱ切る　春城　年代
聞き流すつもり補聴器はずしてる　玉置　重人
車間距離きっちり守ってついて行く　福本　英子
あした咲く程は山茶花散っておく　石垣　花子
亡姑の部屋片付ける手がまた止まる　奥田みつ子
退院の日の老妻がこそばゆし　土居　耕花
舎弟淳一郎逝く
制癌剤と四つに組んで寄り切られ　春城武庫坊
鈍行でゆこうよ先が見えたから　赤川　菊野
すみませんと言って女は先手打ち　越智　一水
大根を洗えば大根背を伸ばす　渡辺　独歩
ゆたゆたと生きとし生ける春の川　高杉　鬼遊
病気しているよりましと昼の酒　宮口　笛生
イミテーションだから私にも似合う　政岡日枝子
気の利かぬ振りして急場切り抜ける　河井　庸佑
新鮮な魚をクチャクチャにしてグルメ　都倉　求芽

野村太茂津

几帳面すぎて貴女は絵にならぬ　久家代仕男
あだ花を咲かし続けて生きている　春城武庫坊
この胸に触れたい男がひとりいる　土橋　蛍
坊さんの車は少しボロがいい　土居　耕花
未亡人寡婦なんとでも言いなはれ　稲葉　冬葉
音で描く空想の絵の素晴らしさ　堀江　正朗
濡れ衣がいつか馴染んでよく似合う　西山　幸
化粧ポーチすこし不倫にあこがれる　西口いわゑ
合鍵を渡すチャンスに茶を乞われ　福本　英子
花が咲く女がきっと逢いにくる　西村　早苗
鉄格子とも見える原稿紙の枡目　谷垣　史好
振り向こうまだ手応えのあるうちに　松原　寿子
笑う日がきっと来るだろ温い飯　小野　克枝
街の子よ　うちに柚子湯が湧いている　遠山　可住
ともかくも勉強部屋の灯を信す　森井　菁居

黒川紫香

ポケットベル付けて遊びに来られても　福本　英子
新しい夢を見ようと枕買う　菅井とも子

前置きがとっても長い話下手　榊原　秀子
ロボットに知れたらアカン程もうけ　小池しげお
絶対に風邪は引けないパスポート　津守　柳伸
目薬を指して夢からさめている　時末　一灯
本心をかくそうとして猫を抱く　奥田みつ子
お月様今宵は連れがありますの　田形　美緒
加害者で巻尺の端持たされる　田中　叶
車から降りて車が恐くなり　森田　熊生
パレットに三原色がある未来　田中　正坊
税金が少うし還るので笑う　小島　蘭幸
新しい顔で出て来る陽が好きだ　田中　亜弥
ぬくぬくと男の傘の中に居る　西口いわゑ
年ごとに嫁に貫禄つく不安　茂見よ志子

西田柳宏子

父と子の壁を子が塗る厚く塗る　春城武庫坊
看護婦が綺麗と思うまだ死ねぬ　土居　耕花
どっぷりと和の中にいて和が見えず　堀端　三男
無駄口は決してきかぬ力釘　玉置　重人
お荷物にならないようについて行き　藤田　泰子
少し残る女へ小紋の柄を選る　福本　英子
歯科内科お医者のはしご草臥れる　行天　千代
イミテーション大事にしてます母の指　鍛原　千里
あそうだそうだとトイレから戻り　中川　滋雀
おばあさんと約束がある種袋　新家　完司
飴玉が口にある間の小休止　政岡日枝子
鈍行でゆこうよ先が見えたから　赤川　菊野
学歴に負けぬ雑学もっている　柳楽　鶴丸
すぐ馬鹿になれる夫を尊敬す　神夏磯典子
うぬぼれてうぬぼれて今日を生きる　林　荒介

橘高薫風

もの想う時いつからか萩の道　黒田　真砂
御命日　私が咲かせた菊の花　宮尾あいき
六十の知恵をうながす福寿草　柴田英壬子
坊さんの車は少しボロがいい　土居　耕花
猫を抱いていたのはおとこ都会の灯　小島　蘭幸
あした咲く程は山茶花散っておく　石垣　花子
一、二本さぼるのもある蛸の足　小池しげお
梅干しが酸いので安心しています　玉置　重人
約束を守り寝ている蛙たち　吉岡きみえ
逆さまに絵本が読める満二歳　高橋千万子
濡れ衣がいつか馴染んでよく似合う　西山　幸
母さんに似て来たなどと不満そう　西口いわゑ
風花や想い出ごっこしています　中原みさ子
体形も似てる三役婦人会　松尾柳右子
句の種がころりところぶ置炬燵　平松かすみ

川柳塔賞候補作品

高杉鬼遊

仏より自分の好きな供え物　大西　文次
敬老日今日は子守りを休みます　山田　保蔵
不束で来てしたたかの強い嫁　柳沢　たま
相合傘とっくに雨は止んでます　伏見すみれ
中耳炎洞窟にいる冒険者　新井　朋子
母さんが女になってダンスする　高野　宵草
貸して戻らぬ傘とおんなじ傘を買う　舟渡　杏花
最初から悪妻だった訳でない　秋元　てる
秋風が吹いて計算ばかりする　児玉　歌子
針の穴くぐった糸もほっとする　沢田　きん
どいてどいて低く飛んでいく鳥　森　茜
鶴と亀としも知らずに生きている　森川　抜智
独楽が止ってハッと気が付く独楽の彩　藤井　高子
鳶の親トビの子産んだまでのこと　金森知恵子
祈りつかれ鶴折り馴れて冬の章　吉川　寿美

小出智子

受け流すことも覚えてみかんむく　森　三枝子

公園の子供はすぐに輪をつくる　的場十四郎
ひきかえすにはあまりに遠い道しるべ　野村　京子
描き切れぬ想いが墨をにじませる　東浦　砥代
踏まれた草が春を覚えていてくれた　亀井　円女
みんないい顔して聞いている法話　森　茜
相槌を打って共犯者にされる　笠嶋恵美子
神様に断りもせず離婚する　大西　文次
ブーメラン戻って来ると信じこみ　朝倉　大柏
友達は働きすぎでつまらない　椎尾　公子
年賀状孫も一人の顔をもち　福島　紀一
金賞の絵だから感心して眺め　宇野　昭代
仕事着はいつも万歳して干され　宮崎　菜月
自画像がひとり歩きをして困る　高杉　千歩
行列の中程に居る安堵感　太田　藍子

板尾岳人

無器用に生きて来ました破れ傘　松川　芳子
鬼ごっこ鬼が疲れて日が暮れる　松本　元江
矢の届く位置で足元たしかめる　山口三千子
なじめない森に毒矢を刺しておく　木村たけし
祈りつかれて鶴折り馴れて冬の章　吉川　寿美
ぬれ衣を黙って受けている時計　結城　君子
白状をさせてから咲く曼珠沙華　門脇　晶子
寒風のなかを転がる赤い毬　中尾まゆみ
ロボットの骨の始末をしてやろう　土橋はるお
芸のない風は一直線に吹く　東浦　砥代
内緒話知ってる壁を塗り替える　大西　文次
掌の荒れへ女の音符冷えて冬　野村　京子
野の草に我が生きざまを問われけり　藤井　高子
空港で遺書を書いてる旅人形　的場十四郎
面倒見のよさが取り柄の握り飯　中山おさむ

谷垣史好

行く末を案じて葦が佇ちつくす　吉川　寿美
鳶の輪にすっぽり入る町に住む　薗田　漠沓
アメリカンばかり飲んでるお付き合い　田中紀美代
トンネルひとつどんな未来があるのかな　中尾まゆみ
ロボットの骨の始末をしてやろう　土橋はるお
見渡せばみんなお金で買ったもの　宮崎　菜月
欲出した分だけ男下げている　児玉　歌子
愚かにも賽銭箱を覗き込む　笠嶋恵美子
黒豆の皺のあるのを先にたべ　森川まさお
ママゴトのお客も歳暮持って来る　相葉　あき
恋文へ鉛筆の芯折れやすし　小林　一夫
中耳炎洞窟にいる冒険者　新井　朋子
議論百出小骨ばかりを持てあまし　藤井　高子
全快へ麦わら帽子が掛けてある　久保　和友
釣り百科今日は地球を釣りました　新　正子

河内天笑

千体の羅漢の中に君がいた　小谷美っ千
つぎはぎの愛情ですが仲がよい　鶴久百万両
雑草も胸に抱かれる夢を見る　楠　昭子
とかなんとか言っても夫婦にある絆　田中　みね
相性抜群今日も喧嘩になり候　田中紀美代
許すより忘れてあげる思いやり　土居ひでの
ヘソクリのあるばあちゃんはあわてない　渡邊伊津志
ある不安キミと話題がずれてくる　寺中三枝子
マイペースなどと不精がひどくなる　宇野　昭代
母さんが女になってダンスする　高野　宵草
妥協して力のぬけた顔をする　東浦　砥代
話下手せめて聞く耳磨きたい　沢田　きん
相槌を打って共犯者にされる　笠嶋恵美子
野の草に我が生きざまを問われけり　藤井　高子
パチンコ屋なんで軍艦マーチやろ　桝本　露児

愛染帖

橘高薫風選

一椀の雪一粒の米になる　弘前市　斉藤　劭
りんごの皮一里も剝いて津軽春　大阪市　小出智子
ここまで来たからには生きてゆく手立て　青森市　工藤甲吉
親戚は豪華な結婚式をして　鳥取県　江原とみお
薫風や親馬仔馬駆け回る　米子市　八木千代
山一つりんごの花に包まれる　岸和田市　古野ひで
春がくる馬百頭をいななかせ　鳥取県　新家完司
父の遺産は土性骨だけでした　高槻市　河瀬芳子
大根の花別の世へ散ってゆく　高槻市　笠嶋恵美子
面を打つ部屋には誰も入れられぬ　鳥取県　さえきやえ
てのひらのくぼみで受ける小さい幸　大阪市　塩田新一郎
春の音また消えかかる菜種梅雨　岡山県　小林妻子
ももひきを脱いで花見に出かけよう　今治市　矢野佳雲
さくらさくら十年先もこのように　富田林市　藤田泰子
余りにも幸せ過ぎていて無明　吹田市　西岡豊
酒一族花が咲こうと咲くまいと　北海道　府栄野香京
椅子取りゲーム声出してたら負けになる　和歌山市　木本朱夏
裸婦の絵に得心をして椿落ち　高槻市　笠嶋恵美子
糸切れた時から自由失いぬ　米子市　新正子
懐にとび込むことも逃げること　鳥取県　さえきやえ
結び目がほどけて愛がどっとでる　大阪市　塩田新一郎
ぞんぶんに飲んで唄った莚席　西宮市　奥田みつ子
邂逅や紅さし指のやわらかき　鳥取市　武田帆雀
あさやかに枷を抜けゆくシャボン玉　茨木市　井上森生
脱ぎ捨てた服が怒りを溜めている　和歌山市　神平狂虎
多情多恨好きと嫌いは紙一重　和歌山市　後藤正子
錆び切って今さら飛べと言われても　松江市　竹内寿美子
椿掃く明日の吾が身を思いつつ　和歌山市　西山幸
喪に服す桜に雪が舞いまする　熊本県　立道善太郎
白壁のむこうに好きな風が吹く　西宮市　頼尾六郎太
純白を前に畏れとときめきと　笠岡市　松本忠三
魂胆はおんな結びに秘めておく　大和高田市　寺脇三倉
土持たぬ軽さパートに出る団地　唐津市　久保正敏
太ってる財布に鈴はいりませぬ　唐津市　福島紀一
椿掃く明日の吾が身を思いつつ　豊中市　田中正坊
錆び切って今さら飛べと言われても　西宮市　西口いわゑ
脱ぎ捨てた服が怒りを溜めている　富田林市　藤田泰子
多情多恨好きと嫌いは紙一重　吹田市　西岡豊
邂逅や紅さし指のやわらかき　北海道　府栄野香京
あさやかに枷を抜けゆくシャボン玉　和歌山市　木本朱夏
椅子取りゲーム声出してたら負けになる　今治市　矢野佳雲
酒一族花が咲こうと咲くまいと　岡山県　小林妻子
余りにも幸せ過ぎていて無明　吹田市　西岡豊
懐にとび込むことも逃げること　富田林市　藤田泰子
糸切れた時から自由失いぬ　鳥取市　武田帆雀
裸婦の絵に得心をして椿落ち　茨木市　井上森生
椅子取りゲーム声出してたら負けになる　今治市　矢野佳雲
酒一族花が咲こうと咲くまいと　岡山県　小林妻子
御器嚙を妻御器嚙となって追う　西宮市　奥田みつ子
瀬戸大橋処女を失う四国かな　鳥取市　武田帆雀
入学に青い地球儀届けられ　茨木市　井上森生
天元に徳利置いて酒を呑む　和歌山市　神平狂虎
雪洞の緋にせかされて一分咲き　和歌山市　後藤正子
溜息に白い蝶々が来て止まる　松江市　竹内寿美子
いつのことかおぼろ月夜の花の下　和歌山市　西山幸
中傷はいつもきれいな花言葉　熊本県　立道善太郎
十戒を守りとおして散るさくら　西宮市　頼尾六郎太
四月一日開けてはならぬ玉手箱　笠岡市　松本忠三
梅まつり大器晩成組もあり　大和高田市　寺脇三倉
殊更に順序不同と書いてある　唐津市　久保正敏
力んだら駄目と教えるシャボン玉　唐津市　福島紀一
死を賭けたジャンケン何時か負けるだろ　豊中市　田中正坊
春うらら強い日本が顔を出し　西宮市　西口いわゑ
沈黙の夫婦へ猫が来て座る

夜空にも仏はおわす星曼荼羅　佐賀市　古川一徳

中卒の課長割勘主義を採る　和歌山市　桜井千秀

尾の振り方が中途半端で見苦しい　茨木市　藤井正雄

いい話だった余韻で本を買い　八尾市　片上英一

聖子様松田・橋本・田辺殿　米子市　政岡日枝子

パズル解くお茶はゆっくり冷えていく　枚方市　森本節子

黄の花が黄色の蝶を呼び寄せる　東大阪市　中尾しんじ

せせらぎにそと指先を春のこと　吹田市　栗谷春子

春の野辺都わすれと道忘れ　守口市　結城君子

白雲は動かず土堤に春の息　広島県　森川抜智

三年は長く四十年は短かく感じられ　岡山県　富坂志重

変な人と何げなく言う好きな人　河内長野市　植村喜代

来年のことを言うほど母元気　兵庫県　北川とみ子

どんぐりが寄ると一つが背伸びする　大阪市　板東倫子

自分史は四百字詰何枚か　町田市　竹内紫錆

録音のわが声外で犬が啼き　富田林市　松本今日子

この様子ならたのしそう幼稚園　島根県　榊原秀子

春がすみ安定剤に似て眠し　浜田市　佐々木裕

歯ごたえは無いが二人に冷や奴　和歌山市　堀畑靖子

秘密打ち明けたを悔いる夕ざくら　倉吉市　野中御前

地の底でマグマが唄う散る椿　鳥取県　土橋蛍

還暦の体の中を風が吹く　岡山県　福原辰江

派手すぎるまた地味過ぎる旅仕度　唐津市　田口虹汀

ある日フト僕は物言うモルモット　香川県　上藤多織

先生の人気余談にあるらしい　徳島市　宮武まつ女

すばらしいガラス細工の中の嘘　岡山県　矢内寿恵子

人間の鱗が溜まる吹きだまり　米子市　小村てい子

正面の敵にまばたきばかりする　唐津市　山口高明

雨やどり犬も隣へ来て坐り　八戸市　島田昭治

死亡欄少し羨む気にもなり　寝屋川市　岸野あやめ

仲良しに内緒の貸しが大分ある　尼崎市　春城武庫坊

灯を消して春の夕べの時を止め　藤井寺市　福元稔

世の移り進む世だとは言いかねる　仙台市　川村映輝

心ここにあらざる時を狙われる　高槻市　辻白渓子

受けて立つ議論はいつも持って居る　兵庫県　吉田明

正も邪も呑みこんでから反芻し　伊丹市　樫谷寿馬

春遅し動かぬままの亀と石　米子市　林荒介

糖衣錠ゆっくり死ねる手は無いか　堺市　桜沢あか里

お近づきに先ず愛犬の名を覚え　今治市　月原宵明

続編は二人で渡るかつら橋　姫路市　中塚遊峰

大護摩の火へ心経の声重ね　大阪市　山田妙子

私にも春が来るのをお忘れか　奈良市　米田恭昌

真贋の謎秘め菩薩笑み給う　島根県　板垣夢酔

ひらは平なりにお城となる机　川西市　松本ただし

そこいらで待ってくれてる福の神　米子市　田中亜弥

毛虫のなかに僕に似たやつ一ついた　芦屋市　竹中綾珠

野球にも攻撃型と守備型と

凡作の書棚に住んで凡主なり　和泉市　西岡洛酔

腕時計肥満度計の代りです　青森県　相馬英三

自画像を刻んだ石に顔がない　広島市　流奈美子

春一番まだ残ってる北の彩　吹田市　井上照子

花の芽がいやいやしてる遅い春　岸和田市　芳地狸村

うつの日の救いはやはり仔犬の目　大阪市　亀井円女

春麗ら一服なさい不動尊　岡山県　池田半仙

好きな紫むらさき似合う人に逢い　大阪市　今西静子

紫にやがて染まってゆく絆　和歌山市　牛尾緑良

まな板に乗るまで跳ねて跳ねた鯉　米子市　石垣花子

本番で別の私が主役です　羽曳野市　中村優

女神には素直に懺悔できそうで　米子市　小西雄々

あの頃の私が今も居る故郷　高知県　赤川菊野

蜆汁やっぱり俺は日本人　大阪市　桝本蕗児

平凡な倖せくれる待ち時間　生駒市　森田カズエ

黒を着て女妥協はせぬつもり　岡山県　灰原泰子

ご老体はエッチなことも言いなさる　名古屋市　藤井高子

肩に手を置かれた重み信じよう　堺市　高橋千万子

目の前の雲ひらけ行く遍路道　堺市　山本半銭

あどけない顔のナースに宥められ　和歌山市　山川克子

雛の顔大事に納め無口なる　米子市　白根ふみ

たっぷりとかけた保険が恐くなり　愛媛県　八塚三五島

愛の深さ煎じつめては女たり　羽曳野市　吉川寿美

一人しかいない私と生きている　鳥取市　広本文子

知りすぎた街で迷うた春うらら　和歌山市　福本英子

核へらす交渉控え核実験　羽曳野市　麻野幽玄

スパイかも知れない耳に耳打ちし　鳥取県　松下たつみ

やるせなく昭和の初期は多感なり　尼崎市　春城年代

春らんまん列島見事に繋がれる　宝塚市　丸山よし津

粉飾も交え心配事相談　熊本県　増田一乗

走るもよし歩くもよしの術を知り　吹田市　園田文子

条件を呑むビールの泡が消えている　岡山県　清水悠貴女

塩送る謙信今も後の世も　奈良市　岡田きぬゑ

毎日の老いの楽しみポストあけ　大阪市　大福留吉

走馬灯師の声はまだ耳許に　出雲市　久谷まこと

盃に想い出尽きぬ師を語る　島根県　堀江正朗

負けるなよ松喰虫に負けるなよ　堀江芳子

平凡を静かに積んでゆく非凡　岡山県　江口有一朗

＊

投句先　〒560　豊中市中桜塚三丁目13—15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題「話」　選者　**橘高薫風**
締切　**6月10日**
（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3—43
NHK大阪放送局〝ふれあいラジオセンター〟川柳係

発表　6月26日（日）ラジオ第一放送
午前11時5分から

女性コーナー

黄香の芯

八木千代選

陽炎を追って退屈などしない　佐賀　寺中三枝子

どんなに追ってみてもわが手で掴めるものではないけれど、天の気、地の気、の中に溶けて見詰めつづけているうちにいつかは陽炎の芯のようなものが見えるかもしれないと、三枝子さんは歩いています。幻でもなく夢でもなく、このゆらゆらと、とりとめもない陽炎の内容と自分の生と結びつける道程こそ、退屈どころか真剣勝負の道だと私は思うのです。

毬の弾みの確かなる日を吉日に　尼崎　春城　年代

親しい人だから言うわけではありませんが、正に私の心をスカッと書いて下さった年代さん……握手しましょう。てのひらの毬が弾んでくれる感触こそ、陰陽五行も何のその。何よりも嬉しい大安日のしるしでしょう。まいにちの営みを確かに積み重ねてゆけば毬はかならず弾むはず。いい川柳も生まれる筈。

またの日を性善説に賭けている　和歌山　西山　幸

まばたきをせずに心をみつめよう　和歌山　田中　輝子

慌てずに立ってごらんよ浅瀬だよ　米子　石垣　花子

私の歩幅と背丈忘れまい　松江　竹内すみこ

旗を振る人とは違う旗を振る　和歌山　後藤　正子

もっと深くもっとやさしい句読点　富田林　藤田　泰子

それからも餌はたっぷりもらってる　寝屋川　稲葉　冬葉

峠を越すと見えてきた　かくれんぼ

マシュマロが届かず葱をきざんでいる　和歌山　福本　英子

フィクションの中のことだと信じよう　鳥取　広本　文子

伏せといた籠で蛹が孵える頃　和歌山　桜井　千秀

豆の木よ楽しい話いたしましょ　西宮　西口いわゑ

弱い者いじめてよわいもの同士　松原　佐藤　藤子

神様に道のまん中開けておく　茨木　堀　良江

握りしめた石が許せと囁いた　西宮　奥田みつ子

約束でけものは森の土になる　米子　政岡日枝子

土踏まずに土を踏ませて安らぎぬ　大阪　西出　楓楽

母さんの時計はいつも進んでる　藤井寺　高田美代子

いつからか子猫一匹いなくなる　鳥取　川崎　秋女

つきあげて来るものがあり花を折る　和歌山　木本　朱夏

お花見の列車にいつも残される　米子　寺澤みどり

サングラスはずしまともに花を見る　吹田　井上　照子

これも些事　朝には朝の陽が昇る　羽曳野　吉川　寿美

鍬いっぽん　あなたと堕ちる穴ならば　和歌山　松原　寿子

シンデレラしましょう年に一度二度　富田林　片岡智恵子

白旗の予備をいつでも持ち歩く　米子　新　正子

地蔵さま少し動いてみませんか　竹原　信本　博子

憧れた自由さびしく日が暮れる　八尾　宮西　弥生

つながりがあるので同じ橋渡る　米子　青戸　田鶴

はね人形　反らす力が湧いてくる　大阪　田中　弘子

捨ててきたぐちが戻ってくる恐さ　堺　高橋千万子

いつだってジョークかざして負けている　米子　小村てい子

私を裁く小さな自尊心　和歌山　森　茜

風船の自由な旅を案じてる　和歌山　内芝登志代
傘をさすことも教えて連れ歩く　西宮　林　はつ絵
フレッシュな対話している春の墓　大阪　町田　達子
野の草でよかった仲間わんさ居て　米子　川上より子
ひとり居もよろし松風たぎらせて　名古屋　藤井　高子
去る者は追わずだなんて淋しいね　和歌山　山川　克子
むらさきに遠く消えゆく母の傘　米子　林　瑞枝
淡墨で恋のうた書く春は隣　姫路　釣　遊光
着飾ってみてもわたしに音がない　松原　北野　久子
もうそこに明日が見える余花の雨　八尾　高杉　千歩
わた雲へそっと白状しちゃいます　兵庫　倉垣　恵美
孤独とは二本の箸を洗うとき　島根　松本　文子
何ひとつ追いつけぬ間に母が逝き　和泉　中川　楓
花吹雪ぽっくり寺へ背を向ける　高槻　笠嶋恵美子
ぽっくりと逝って貴方はエゴイスト　倉吉　青砥　菊枝
花ひらく夜明け信じてねむろうか　米子　門脇　晶子
心憎い静かな声に負けている　岡山　清水悠貴女
ときめきは何時か忘れた砂糖つぼ　大阪　鍛原　千里
斜視だからあなたの愛が信じられ　広島　流　奈美子
女なる哀しみ白い乳の草　寝屋川　宮崎　菜月
道草は丸いポストと出会う道　米子　三好寿々子
ひと握りほどの愛でもいいのです　高槻　河瀬　芳子
雄蝶雌蝶の舞の向うにある踏絵　岡山　千原　理恵
自動ドアこっそり出してくれません　堺　近藤　豊子
宿命の芽を馬鈴薯は疎まれて　寝屋川　岸野あやめ

木々芽ばえ期待ばかりが先走る　大阪　鈴木　節子
春の恩しっかり返す水芭蕉　大阪　津守　柳伸
揚げひばり今後の住いどこにする　八尾　向井しづ子
点滴に一人の命吊される　岡山　灰原　泰子
たまさかのヒットを糧に続く道　和歌山　田中　みね
根づくまで待てずに世話をやきたがり　西宮　秋元　てる
春先はもの憂いものときめている　大阪　堀　いくの
苦慮熟慮ポットのお湯が空になり　羽曳野　福田満洲子
つまずいた石大切に持ちかえる　米子　白根　ふみ
聞き役にまわると温い春の風　大原　福原　悦子
ピカピカのランドセル真直ぐ歩かない　和歌山　坂部紀久子
真夜中の無人駅から抜けきれぬ　米子　沢田　千春
新鮮な目を通したら黴が見え　大阪　神夏磯典子
ストレスを鏡の顔に話しかけ　藤井寺　武部　敦子
夕暮れて人の心が読めてくる　米子　野坂　なみ
待たされた焦り灰皿からあふれ　有田　松井かなめ
美しいことばだろうか桜散る　大阪　島村美津子
白地図に人生の的書き入れる　和歌山　生馬芙美子
背を越した息子と目線合わされぬ　宝塚　丸山よし津
春の陽へ若いからだが欲しくなる　奈良　横井都姫子

◇

ハガキに雑詠3句　毎月10日〆切
投句先　〒683　米子市花園町14
八　木　千　代

句評リレー

前月号から

小林由多香　津守柳伸　塩満敏　野村太茂津

失恋を青春賛歌とも思う

西口いわる

由多香　失恋を青春賛歌とも思う、おもしろい発想である。しかし「ん、そうか」で終わってしまいそう。

柳伸　恋に恋する思春期の悲壮感。チャーミングな、いわるさんに失恋は似合いませんけど、賛歌と言われる成長過程が知りたいものです。

敏　イギなし。失恋して大きく脱皮します。そして文学も生まれます。

太茂津　失恋大いに結構。失恋を重ねて、ひとは磨かれていく。但し若き日の、アダムとイヴならば青春賛歌のテノールもソプラノも澄んでいるが、初老の（失礼）失恋なら如何だろう。

由多香　どのような内容であっても「とも思う」で結ばれた句は、敏さんの「イギなし」で終ってしまい、訴求力も、迫力も弱い。

柳伸　「とも思う」は確かに弱いとは思いますが、すっきり、きれいにまとめられたと感心しています。

敏　六十年近くヒト科に属し、孫から「おじいちゃん」と言われるようになっても、「愛」も「恋」もしたいナと思っています。何度「失恋」したことか。それにもコリずに「恋」はしたいもの。「青春賛歌」と言い切った句主の心情ワカルワカル。

太茂津　「とも思う」は、もう一つの意味がありはしないだろうか。「青春賛歌」が、「青春悲歌とも思う」を含んだ省略だと思う。失恋を繰り返し大きく脱皮して生きている限りは、青春賛歌をキボーシマス。私は青春とは、年齢ではなく、その時の心の内なるものであり、七十歳でも八十歳でも青春の情熱がある、と信じています。だからいつも恋しています。

苦労した人で上手に酒を飲み

遠山可住

由多香　よくわかる無難な句、それだけに感動も少ない。

柳伸　どんな苦労か。上手な飲み方とは。少し疑問を覚えますが、さすがに句のリズム感にひかれます。

敏　いつも度をすごして失敗ばかりの私には、上手に酒を飲む人がうらやましい。

太茂津　苦労した人なら処世術も人あたりもまるく、上下、縦横、相手に合わせた酒を飲めるというものだ。自分の適量も弁えて、宿酔することもないだろうが、時には下手に飲みたいのが酒だと思うのだが……。下手も上手も考えながら飲むなんて、酒の醍醐味がなかろうに……。

由多香　酒で失敗する人も多い。失敗もなく楽しんで飲むのが上手な飲み方ではなかろうか。喜怒哀楽には酒はつきもの、百薬の長

とも言われ、ストレス発散にも結構。問題にする句ではなさそう。

柳伸　たぶん宮仕えの頃を回顧されての句でしょう。人の上に立たれて、大きな視野をまとめられたのだと思います。

敏　「苦労した人」の苦労を、いろいろ解釈するのも鑑賞者の自由で。

仕事・金・女・酒等々妄想をめぐらせていると、この句はとても面白く、楽しくなってきました。そして酸いも甘いもかみわけた句主の顔がダブってきました。カンパイ!!

太茂津　苦労した割りには、明るく楽しい人物像が浮かぶ。美味そうに、いとおしむように、酒を飲んでいる丸い背が絵になってくる。

理屈っぽい話は抜きにして、軽く一杯やりませんかという気分だ。

いろいろの生き方をもつ眉を描く

宮西弥生

由多香　生き方と眉、女性らしい思いつきのうまい句と思う。普通「いろいろな」とするが、「いろいろの」としたところに何かがあるのだろうか。

柳伸　さすがベテラン。女性ならではの見つけに脱帽。大勢の女性客に接しておられるので、敏感に眉の動き方も読み取られるのでしょう。うんと楽しい眉を描いて下さい。

敏　座五の「眉を描く」が、わかりにくい。白い眉、蛾眉、助平眉等は知ってたものの、女性達が眉墨で造型する眉に、意味があったとは。化粧は女性の特権。

太茂津　女性ならではの句ではあるが、ベテランにしては着眼が平凡。いろいろの眉を描ける女性に男性はときどき騙されているようだ。

由多香　どの評者も触れられてなかったが、「いろいろな」と「いろいろの」の使い分け、この句の場合やはり「の」がいいなと勉強した。敏さん、「眉を描く」は深く考えなくていいではないでしょうか。

柳伸　男性に負けまいとする働く女性の眉がだんだん逆立ってゆくのをご存知でしょうか。素晴らしい着眼に敬意を表します。

敏　「一髪二化粧三衣装」とか。髪が砂漠化してる私には、眉よりも髪の方に関心が行きます。女性の長い髪には、何故か魅了されてなりません。句主の良いミツケにあやかり、これからは眉の方にも注目していきます。柳伸さん指摘の逆立って行く傾向の眉はショック。エッ、「人の顔ジロジロ見て」とは、ワイフ。

太茂津　「生き方をもつ眉」が言い得て妙、生きる女性の顔、姿勢を語る眉になっている。

それにしても働く女性の眉が、あまり逆立つことのないように願いたいものだ。

一人旅　解放感と孤独感

上田登志実

由多香　一人旅をして味わった解放感と孤独感。別に問題とするものはないだけに、感慨の薄い作品。

柳伸　喉元過ぎて熱さ忘れる、の感じ。わずらわしいと思える伴侶も、離れてみれば心細いものです。省略の妙。

敏　一般論では、そうだナと判りますが、ヘソ曲りの私には、解放感と期待感。

太茂津　一人旅で得るものは、豊かでありたい。私は一人旅が好きで、放浪癖ではないが、時々一人で飛び出す。一人旅でなくとも大勢の中では猶更、孤独感も解放感も募る。

由多香　この作品、正直言って突っ込むほどの内容はないように思う。

柳伸　正直言ってもう少し状況説明が欲しい感じ。裃を着て突っ立っているように思えます。

敏　「と」以外は、漢字で表現されていますが、固苦しくなく「カン」「カン」のリズムで快い句です。「一人旅」をしたくて寝台車に改造したものの、定年二年後に至っても実現できません。「孤独感」を十分味わいたいものです

太茂津　長いこれからの人生一人旅……なら、孤独感はまた別だろう。

敏氏のように孤独感を味わい、解放感と期待感を楽しむ一人旅に変われば、状況説明も広がる筈。

この句は「一人旅」になるまでの、長い？旅のドラマを連想させてくれる。

水甕の底に沈んでいる余裕

玉置重人

由多香　別に「余裕」でなくても何でもいいではないかと言いたくなる。このような傾向の句は好まない。

柳伸　豊かさがさせる懐手、そんな感じがします。陰と陽の対比の面白さを狙われたのでしょうか。「余裕」で救われた、と思えるのですが…。

敏　近代化で、水甕を使っている人も少なくなり、専ら鑑賞用のカメ—水の入っていない—しか浮ばないので困った。最近軽味の句に佳句の多い句主だが、それにしても器用な句。

太茂津　「沈んでいる余裕」と言い切れる作者は倖せ。だが、底に沈んでいるものは余裕ばかりとは限るまい。水を満たし、ことに備えている水甕ではあるが、冷静洗着な表面も一変する日を思うてもみたい。

由多香　最近は見かけることも少なくなった水甕と、余裕を結びつけられたうまさは、確かに器用であるが、やっぱり私には動く句つまり「余裕」でなくとも、いろいろなことばが置き変えられる句と感じられる。

柳伸　お言葉を返すようで申し訳ありませんが、「余裕」でなければ陰気に沈んでしまうように思えるのです。五七五の中で明るいどんでん返しはさすがだと思います。

敏　「二物衝撃作句法」をマスターしている句主。苦吟中の敏にとっては羨望の作家です。各評者の評に啓発されること多し。「余裕」の中に、噴火を待つマグマみたいなものも感じられます。

太茂津　由多香氏の「余裕」が動く句であるというのも、一つの見方ではあるが。

水甕の容色、静かさ、満たされている水の底……ならやはり「余裕」が沈んでいそうだ。〝静〟から〝動〟を汲み取りたい句だ。この句の「余裕」は動かない。

石捨てにゆくなら水のある川へ

政岡日枝子

由多香　句意はわからぬでもないが、何かつついてみたくなる作品、「ゆくなら」、「水のある川」などに抵抗を感じる。

柳伸　捨てられる石は、箸にも棒にもかからない、ゴツゴツ角だらけ、せめてなら水の流れの恩恵で美しく、丸く変身させてあげたい。そして大勢の仲間と共に過ごせるように。とても優しい味わいと、思いやりのある佳句。

敏　柳伸さんのように素直に鑑賞すればよいのだが、すぐリクツを言うのも男。川には水がある筈と。ゴメン!!

太茂津　「石」とは何の比喩だろうか。水の無い川が増えて、干涸らびてゆく日常から脱出したいという願望もある句だ。その川には水がなければならぬ。

由多香　私も柳伸さんまでの解釈はしなかったが、ほぼ同感。しかし太茂津さんの評もうなずける。とすると石は何の比喩だろうか。むしろ敏さんの考え方が素直。佳句とする人、

没にする人、なかなか川柳もむつかしい。それだけにまたおもしろい。

柳伸　石を人間に置きかえますと「楢山」？これではあまりにも夢がありません。「ゆくなら」の迷いに惹かれます。

敏　「母」なる河（川）に流す風習があります。例―雛、精霊、骨等。

「石」が象徴してる事物は謎ですが、句主にとっては、今一番の関心事には違いないようです。「水に流す」というコトバもあります。柳伸さん評のように、丸く変身させられるかも。

太茂津　「石」は愚痴、世迷い言、秘密、あるいは〝私〟等々……。

いずれにしても、この句が「水のある川」を願望しているのは、索漠たる、乾いた日常からの脱出ということか。

含みの多い、奥行きのある句だ。

あの世でも歌える歌を覚えたい

小西　雄々

由多香　あの世でも歌える歌とはどんな歌であろうか。歌の内容、歌詞なのか、また上手にうたえるということなのか。

柳伸　人生いつまでも勉強。同じ一生なら、楽しい歌を、来世まで歌い続けたいですね。夢のある楽しい句です。

「覚えたい」が素晴らしい。

敏　オンチの私には、やはりムリ。せい一ぱい先輩達の良い句を覚えたい。

太茂津　歌にあの世、この世の区別も無かろうが、寿命の尽きない歌を覚えようではないか。そしてこの世で心に染みる歌を沢山抱えてあの世へ……。

由多香　なるほど、柳伸さん、太茂津さんのおっしゃるとおり、あの世も、この世もなく楽しい、心に染みる歌をと、素直に解釈すべきですね。因みに、雄々さんはただ今カラオケ猛勉強中とか、ご夫婦で……。

柳伸　一億総歌手の時代です。ご自分の喉にあった歌を覚えて楽しむことは、健康にも大変いいことです。句のリズムが良いようにご夫妻のリズムも揃って最高でしょうね。

敏　カラオケブームで一時期ウケに入っていた作曲家や楽士も、シンセサイザー（電子楽器）等の実現で転業とか。

とまれ、歌は聞くもよし、調子はずれでも歌うのは、さらによろしい。あの世までもって行ける良い歌を。イノチあるウタ!!を。

太茂津　あの世でも歌える歌を覚えたら雄々氏にご教示をおねがいしたい。自他ともに許す音痴で、覚えが悪いので…。

おたがいに、あの世へ行くのは焦らないことに。

〈訂正〉　5月号66P、田中亜也は**亜弥**の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

第七年度『夜市川柳』題と選者

		締切
第1回	「銭」	谷垣　史好	6月末
第2回	「答」	土橋　蛍	7月末
第3回	「味」	高杉　鬼遊	8月末
第4回	「力」	両川　洋々	9月末
第5回	「輪」	小島　蘭幸	10月末
第6回	「舟」	小出　智子	11月末
第7回	「寿」	里　小路	12月末
第8回	「月」	田中　好啓	64年1月末
第9回	「話」	寺尾　俊平	2月末
第10回	「字」	中尾　藻介	3月末
第11回	「手」	土居　耕花	4月号
最終回	「乳房」	橘高　薫風	5月末

投句先　〒593　堺市堀上緑町二丁九―二
河内天笑方
堺川柳会

言いまわしの個性（一）

――あなたは和語派か漢語派か――

竹内　紫錆

1、まえがき

毎月の川柳雑誌類をめくると、作品ばかり並んでいて、添削例は別だが、上達の指針を示唆する人は少ない。もっとも、誰かが書いても「では、お前が秀句を毎月示せるはず」と言われて頭を掻くことになりそうだ。

筆者はそこで、先輩の句を分析し、自作の句との違いを統計的に知り、不調の反省に役立て、場合によりチェンジ・オブ・ペースを図ろうと考えた。

しかし、その根拠を柳論風に書くには、文法、語彙、集計値などの漢語中心の説明を最小限やらなければならない。グラフを作っても、本誌の読者は、中学時代から数学や文法が嫌いになった人が主であろうから、紫錆が語彙論をやっても読む気にならないかも知れない。そこでせめて、雅号に漢語を使った方々に、以下の雑稿の通読をお願いする。

詩歌の頭の音ごとに作品の分類・集計をしてみても、それは国語辞典中の語数（頁数）の比率と同じだろう――と学友の歌人に言われたが、果してそうだろうか。松井栄一氏（日本国語大辞典編さんの主軸）と懇談するうち、昔から短歌には和語が多数使われるので、漢語より圧倒的に数の多い和語、例えば「あ」で始まる短歌が沢山集まりそうに思った。

俳句や川柳でも、何百人の作品の平均と、各個人の好みの字句との差異が、上五の語彙だけについて分かるかも知れない。そこでまず、五十音順の索引の付いた柳書・句集から気付いた点もあるが、それより各句の冒頭語の品詞と種類を区別する方が「発見」への早道と分かった。そこで、二千句近くの作品を語種別に数え上げた。表1がそれである。

この結果、昔からある有名句の約六割が和語であり、三割が漢語、残り一割が外来語や固有名詞などであることが分かった。そして女性作品ばかりの選集を調べると、和語がさらに高率となる。

個人別に、先年の「自選百句」を利用して同じ分類集計をすると、表現の硬軟、具象性と抽象性、といった差異も目につくし、作者の職業趣味も見当がついて面白いが、これは次回の楽しみに残そう。

2、句集の索引から

日本語で　あ、い、う、お、で始まる言葉には和語が非常に多い。漢語で始まる語は、和語（訓読み）と区別する必要のある時にカタカナを添える用語集がある。例えば、アで始まる音読み語は　愛、安、（挨）ぐらいが文芸むきだが、和語の要素となる漢字（あ）は、青赤明秋朝味足温厚兄姉雨新……といっぱいある。外来語や固有名詞を含めて、これらの語種の使い方が、作句者によりかなり違うらしい。第一、筆者自身が漢語多用族なので、あ、い、うの句が殆どないのである。

（注　先稿で、折句やいろは句について書いたが、

表1　選集作品の句頭語の分類

書名・句集名	調査句数	語種％				固有名詞％
		和語	漢語	外来語	混種語	
浜田・神田・渡辺：「川柳のすすめ」	*863	63	29	3.5	2	2.5
田辺：「川柳でんでん太鼓」	646	55	34	5	2	4
女性作品集：「茴香の花」	321	72	22	4	1	1

（注）　和語・漢語の区分は、訓読み・音読みの別に従って付けた（新潮 現代国語辞典の表記による）。仮名や当て字は、語源から考えて和漢を区別した。

混種語とは、和・漢・外の語彙の組合せで一語となった熟語をいう。例えば赤電話、赤チン、プロ野球、知恵の輪など。

固有名詞にも和・漢・外・混の種類があるが、合計のみを別欄とした。外来語欄は従って普通名詞。

＊古川柳71句（そのうち和語は8割）を含む。

実は「あ」（特に和語）で始まる句がかなりあることは確かなのだが人により使いこなせないのはなぜか、と考えた。

血液型と違い、後天的な才能の問題だろうが、実業界に職をもつ者とか国文愛好家、あるいは教師・医師・主婦・「お咄し業のプロ」等々で、日常の多用語（連想語）の種類に差があるのではあるまいか。趣味に注ぎこむ時間の差もあろうし、作句者を支える得意語彙の幅にも違いがあることだろう。

本誌の作品中には、個性といえないまでも右の四例で示したような

漢語多用型
和語多用型
固有名詞多用型
外来語利用型

の句の集り（又は作者の傾向）が見られる。

今回はその話と全く関係がない。誤解のないようにお願いする。）

さて、巻末に索引のある句集から次の四句を、説明の都合上、拾った。

愛情のない異動だと一致する　紋太
あんた何する唇が寄ってくる　南都
アイロンのやうに鴛鴦向きを変へ　三太郎
秋吉台石の饒舌雲の黙　薫風

もともと、一句の着想段階では、作者の人生体験や取材力や感性がものを言うので、他人がどうこう言える筋合いはないが、「言いまわし」については、みな語彙の不足を嘆きつつも、脳中のテープだか字引だかをフル回転しているのだろう。それでも、川柳の神様が見て「使ったらいい句語があるのに本人は気が付かない」という状態が何年、何十年と続くのではあるまいか。

3、職務上出し入れする語彙

就職先で給料をもらうには、その業種の「公的用語」を懸命に覚えて、発言・執筆に活かす必要がある。なかには、字数が多いほど収入が多くなる仕事もあるから、短くする努力を人はしないし、句作に関心をもつ中年者は少ない。

企業の職場には硬い書類が多い。即物的文章もあれば抽象文もある。漢語のオンパレードみたいな感じがあるが、関係者はそれに慣れると、次には数字や外国語の暗記に力を使い果たし、とても詩語には頭が回らない。

言葉の使い方に軍隊の感化もあった。教育に使われた「範典」の類や「勅語」の語調、はては軍歌の歌詞にまで漢語が浸透していたから、戦中派の人は、今も作文に言葉の「い

れずみ」が消えない。新かなづかいになっても語法は教える人の呼吸が継承される。そして戦後登場した新製品の命名にも、漢語を結合さす習慣は続いた。やがて日本人の命名力が衰え出すと、新技術の現れるたびに皆面倒くさくなって、コンピュータとかワープロと呼ぶ世の中に変り、機械を使いこなす人々は横文字とカタカナを必死に覚えてきた。

言葉をつなぎ合わせた術語は、情報用語体系を作り出し、専門毎に編集された辞典が職場の戸棚を占めている。会社名も、部課名もみんなその類語だ。同意異義語も電話の相手は察してくれる。

一般の主婦は、そういう公的用語を嫌うから、夫と妻が話し合う共通の日本語が少なくなった、と思う。俵の『サラダ記念日』には「カン酎ハイ」も出たが、一方、ちょうど十四音を占める団体・職名（例えば、磁性材料研究所長）が現れ、ハッとさせられた。三十一文字の中では、詩語を硬質の語彙に置き換えても短歌の本質は保てるのであろう。

なお、伝統の短歌の流儀では、漢語を一つぐらいに制限して使う方が、響きのよい作品になる――と、石本隆一氏が添削講座で述べている。

4、漢語の使い方の統計

ここまで書いたら、角川小辞典＝9『図説日本語』（昭57）を思い出した。同書には、市販出版物の膨大な文例から、品詞ごとに語数を集計した研究が圧縮されている。例えば各種文章における漢語の比率は（昭38頃）新聞の社会記事中では45―49％、見出し中では59―64％あるのに対し、短歌の中では5―8％、俳句中には11―13％程度だという。また「話しことば」の中の漢語の割合が調べてあり、(イ)「公的生活」から「私的生活」の場面に移れば、和語の使用率が増える。(ロ)男の漢語使用率が14％であるのに女は12％、(ハ)あらたまった場面では、それが男23％、女16％に増加する……等々である。

我々の作品は「書く」のが主だけれども、朗詠を意識してじっくり練る人もあるし、作詞・作曲の心得では、強拍で始まる音を選ぶなり、特定の子音を弱めるとか、工夫があるようだ。

読者は、小倉百人一首のうちで、「あ」から始まる和歌が16首もあることを御存知かと思う。次いで、な、お、わ、た、こ、が多く「むすめふさほせ」が各1首ずつあるが、このことは、かるた取りに勝つための常識であるそうだ。結局、昔の短歌はほとんど和語から成り、例えば「あ」―「あさぼらけ」とか「秋の田の」など――の上句が目立つのであろう。

（続く）

NHK学園東北川柳大会

日時 **昭和63年7月31日**（日）午後一時

会場 エルパーク仙台（仙台市一番町4・11・1地下鉄勾当台公園下車徒歩5分）

宿題 （事前投句・各2句）
祭／堀口北斗選・細かい／佐藤良子選・奥／藤沢岳豊選
2題／片倉沢心・菅原一宇選

席題 2題／片倉沢心・菅原一宇選

講演 今野空白
川柳随想　各選者のリレー柳論

事前投句の締切6月30日必着

投句先 〒186東京都国立市富士見台2丁目30　NHK学園川柳センター
東北川柳大会係

投句料 一五〇〇円（入選作品集代含む）

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

森井菁居

こころの火ともして走る少年よ
小谷　美っ千

受験戦争は過熱するばかりであるが、自分を信じ、鞭打ち、家族の愛に励まされながら突っ走る我が子よ。呉越同舟、それも生き甲斐!!

賛め言葉だけを聞いてる赤いバラ
藤井　高子

人間社会でも言える事であるが、エリート向かい風にもろし。擬人法が成功している。

ためらいもなく同席は夫婦かな
大川　幸子

それでこそ、花も嵐も乗り越えてゆかねばならぬ夫婦像。二人三脚愉しの句。

泳ぎ方変えたら痛む五十肩
宇野　昭代

私も先般花の五十路を歩みはじめたが、マイペースこそ肝要。されどOA社会から逃避すれば私の負けになる。一生が勉強か!!

仏さまに許してもらう花を買う
野村　京子

神仏を信じる信じないは別問題として、かくの如く素直な気持こそ貴重なり。

巣立つ子に空は無限の青さなり
金村　青湖

人生は自分で創るもの。ホップ・ステップ・ジャンプではばたけと願うのが親ごころ。

根回しに走って補佐の役どころ
中山　おさむ

上司になって部下の気持がピタッと分かる…のであればよろしいけれど。

早春の風に遅れをとらぬよう
田中　輝子

やる気充分の気概を持続するのも自分なれば、初心忘るるべからずで毎日が勝負と行こうじゃないか。

単身赴任という赤紙が来てしまう
大西　文次

世はまさに単身赴任時代、その経験もなくいくさも勿論知らない世代の私であるが、「現勤務地を絶対離れたくない」と拒絶して降格を選ぶかどうか難しいところ。実感句とすれば人生の一大転機ではある。

控え目に生きて幸せ見えて来る
久保　きぬ

旧作に「上を見る暮しに不足つきまとい」があるが、作者の場合、全く逆な発想で年輪が感じられる。

病院で少女の長い髪に会う
西浦　小鹿

病院は本来的に暗いイメージが漂うところ。少女の肩まで垂れた黒髪は、いと清新な一幅の絵として目に映ったに相違ない。

言い訳の脚本を書く終電車
丸岩　晏

発散手段としての梯子酒……。ファミリーをこよなく愛しているからこそ「言い訳」を考えるのかも。逆説的な分析であるが。

目立たないまま春を待つこぼれ種
奥野　テル

風雪を乗り越え、やっとの想いで発芽したものの、こぼれ生えの悲しさ、雑草の中で生命を燃やさざるを得ない宿命をもつ「こぼれ種」にしたたかな勇気を与えてやりたいものである。

こだわりが溶けて朝日が温かい
芦田　静江

喜怒哀楽の人生であるが、日々是好日と行きたいもの。

退院の妻にやんわり矢を放つ
乾　隆風

愛が無ければ放たない矢であるが……。

とり返すことの出来ない時と住む
江口　有一朗

明日を頼るな、昨日を追うな、今日を生きよう……。されど難しきかな人生。

●中国吟行の旅に寄せて (1)

始皇帝の地下軍団俑

東野大八

川柳塔社では今年の中国吟行の旅は、洛陽—西安だという。洛陽・西安—この中国きっての古都の名を口にするだけでも、私は限りなき懐旧の思慕を覚えるのである。

中国ではよく六大古都という。西安・洛陽北京・南京・開封・杭州をさし、四大古都とは、前の四都市をいう。西安は、明代まで長安の名で知られ、西周・秦・前漢・前趙・前秦・西魏・北周・隋・唐の十王朝が西安付近に都した。洛陽とともに長安は千年の王城の地であった。

この両都のわが国への影響は大きく、わが平安京の前期、西半分の右京は長安、東半分の左京は洛陽といわれるのも唐代の両都城の形態を模倣したためである。京といえば王朝の巨城を指し、都へ上ることを上洛というのは洛陽に拠っている。

この地上の支配者は天の長子として「天子」と呼ばれた。天地人の三画は宇宙的存在を示し、そこに縦に貫く一画こそ「王」を暗示した。(『春秋繁露』王道通三) 王は王者と呼ばれ天子と称された。天子こそあらゆる秩序・道徳律・権威の根源であり、王城こそはそれらのものを整然と調和した秩序の宇宙国家の本城でもあった。

要するに中国の都城は、実際の生活面を考慮した機能性のほかに神聖な天子の住む居城としての奥深い象徴性を持ち、しかもその二つが違和感なく融合した総合的な存在だったというべきであろう。

陝西省長安は、黄河の一支流渭水の両岸にひろがる肥沃な黄土平原で、秦漢時代はこの地を「関中」といった。三国志の魏蜀呉の争奪の地でよく知られている。関中を陥れるものこそ王即天子というわけだ。

司馬遷の「史記」は神話時代から前漢の武帝に至るまでの中国古代史である。西安とその付近—陝西省南部が舞台となったところが少なくない。この司馬遷の生地は西安北方二五〇キロの韓城県芝川鎮にある。西安から自動車で三時間ほどのところだ。一名司馬遷祠とよばれ、丘山高く円筒状の墓が今もある。雄大な展望は人を慄かすが、彼はこの地で少年期を送り、長じて長安に出て史官となり死後ここに葬られた。長大な一大歴史書「史記」は、この地で著述されたと墓碑にある。

王城長安のルーツは、私見によれば渭水の岸に糸を垂れた姜子牙に始まるとみる。氏は呂、名は尚。世にいう釣師の別称太公望とは彼のことである。悪名高い殷の紂王の世を避け、六十余歳まで釣糸を垂れてすごし、豊京に住む明君文王が眼をつけ彼を招いた。

○釣れますかなどと文王傍へより (古川柳)

かくて太公望は、文王の子武王を助けて西

周王朝を築いた。（前一一二三年）兵書「六韜」は彼の著作。この武王進軍の際、有名な伯夷・叔斉の兄弟が現れ、武王の鞍を叩いて諫め周の粟を食むまいと誓い首陽山に餓死した。文王の居城豊京がのちに長安という一大王城を生んだのである。武王の死後、その子成王があとを継ぎ、文王の弟周公旦が摂政となって補佐した。

「久しいかな、吾また周公を見ず」

と後に孔子が嘆いたのがこの賢宰相周公旦のことである。

西周王朝はかくして第十二代三百年を閲したが、この王朝滅亡の因をなした一人の女性がいる。名を褒姒。竜の吐く精気から生れたというこの褒姒は絶世の美女だが、幽王の妃となったものの一度も笑ったことがない。

○笑ったら小じわが寄ると褒姒言い

ところがある時、国家の非常時を告げる烽火が上った。すわっとばかり馳せつけた諸侯たちが、それが誤ちだと知れて呆気にとられた。そのポカンとした多くの顔付をみて、笑わぬ褒姒が莞爾と笑った。その悽艶な微笑に幽王は忽ち魂を奪われた。このことから幽王は、女の喜ぶ顔見たさに偽りの烽火を幾度も打ちあげたが、このことから本当に国家存亡の危機に打ち上げた烽火には誰も見向きもせず、ついに西周は滅んだ。

このあと戦国の世の六国を平定した秦（前二二一）を建国した秦王政こそが始皇帝である。秦の都城は咸陽である。この地は、今の咸陽市の東約一〇㌔の地で、漢唐の長安とは渭水をはさんで南北に向い合っていた。

秦に併合された燕は亡国の際、刺客荊軻を秦に放った。義によって燕の太子丹の心に報ゆるための特攻である。彼は「壮子ひとたび去ってまた還らず」と詠じて易水を渡る。

○見送りがすみ易水でカゼをひき

こと敗れて彼は秦廷で惨死する。

始皇帝をめぐるドラマは数多いが、とにかく彼は北方の匈奴を破り、長城を築き南方では越人を平げ広東、ベトナムまでを支配する空前の天下統一を果し、帝と潜称した。彼が君主権擁護のため「焚書坑儒」の暴挙を演じたが、文学・度量衡・貨幣・律暦・法律などを統一した果断の政治家でもあった。

始皇帝はその権威の名実にふさわしく大咸陽城を完成させ、渭水の対岸南北まで城廓の一部に抱え込み、そこに壮大な「朝宮」を造営し、その前宮として「阿房宮」を作ろうとした。七百五十㍍四方の大宮殿のため、その用材搬出に遭い遠く蜀（四川省）荊（湖北・湖南省）の山々は丸坊主になったという。山をわたり谷を越え、天子の通る高架道は雲間を跨ぐといわれた豪壮華麗さであったが、造営開始後二年にして始皇帝は急死した。

反旗をひるがえした項羽は、無残にもこの朝宮と阿房宮を焼いた。以来火は三ヵ月も消えずと史書にある。

始皇帝といえば、彼の死後永眠するための帝陵が驪山陵である。この陵の造営は、彼が十三歳で秦王に即位した当時から開始されている。西安の約35㌔の臨潼県である。

この陵の造営には七十万人の罪人や、数十万人の農民たちが駈りたてられ、深く掘り下げられた墓室の内部は宮殿や百官の像が作られ、珍奇な宝玉や器物で満たされた。盗掘者があれば自動的に発射される弩矢が設置された。下部には水銀を注いで川や海をつくり、ドーム式の天井には、日月星辰が描かれ、人魚（洛陽付近を流れる伊水産のさんしょう魚）の膏をともして、墓室を永遠に明るいようにした。「明珠を以て日月となし、魚膏を脂燭となし、金銀を鴨・雁となす」とある。（「長安志」十五所引）

この墓所内には秦帝国の広大な版図の縮図

が描かれている。これは死後も大秦の帝王として永遠に生き続けようとするすさまじい始皇帝の執念を物語っている。

この始皇帝にとって全世界の縮図ともいうべき巨大な陵は、死後幾年もたたぬうちに暴かれた。項羽は三〇万人を動員、三十日間もかけて中のものを運び出そうとしたが、果たさなかった。

項羽にかわってこの陵に科学的なメスが入れられたのは、始皇帝の死後二千年以上を経た一九六二年のことである。そして七四年にはおそるべき現物大の陶俑の地下軍団に出あった。しかし、未だまだその調査は完了なかばといわれている。

陵本体の墳丘は南北二一七三㍍、東西九七四㍍ざっと計算して甲子園球場の約四十倍である。これに陪葬墓などを含む陵域となると南北七・五㌔、東西七・三㌔、約五十六平方㌔という広大さである。

一九七四年発掘され、世界中を驚倒させた始皇帝陵の軍馬兵団俑群は、始皇帝の東一四〇〇㍍のところから出土した。井戸掘り中の農民が発見したもので、その時点で発見された陶俑は将兵七千余体、馬六〇〇頭、戦車一二五輌、これらは現在一号から四号坑と名づけられ、現在一号坑をすっぽり覆う形で「秦始皇兵馬俑博物館」が作られている。

これはあくまで推定だが、兵馬俑軍団は数万件は確実とみられ、現在発見されているものは陵墓を守る先鋒部隊と考えられている。本来は美しく彩色されていたとみられるこれらの陶俑は、容貌や表情がすべて異り、あくまで個々に作成されたもので、まさにその塑像のリアリズムの確かさは、二千年以上を経たにもかかわらず、その技術水準の高さが全世界の人々を驚愕させている。

五年前に中国では兵馬俑発掘ののち、始皇帝の銅製の馬車の初公開も行っている。

始皇帝の銅馬車は、彼の巡幸癖を裏づけるもので、その武威を誇る威風の様は、その儀杖まで大変なものであった。彼の乗る輿は華やかな金根車で、前には先導車、後には供奉百官の属車八十両が従った。戦国時代の帝王の属車は九両とされていたが、始皇帝は六ヵ国を併呑してのちそれを九倍にした上そのうちの七十九両には虎の皮をかぶせ、最後の二両に豹の尾を飾った。その威風堂々の様子に、当時まだ無頼の地方小官吏だった漢の劉邦がこれを見て「大丈夫たるものかくあるべし」と感嘆し、若かった項羽は「彼にとってかわるべし」と口走って叔父の項梁があわててその口を手でふさいだという。

始皇帝は第三次巡幸で博浪沙(河南省北部)で奇襲攻撃をうけ、重さ六〇㌔の鉄錐は狙い外れて副車に当り、難を免れたが、敵は車隊があまり膨大なので、皇帝の所在が判別できなかったのである。

この銅車馬を中心にした兵馬軍団は、殷周以来の伝統的な鬼神を打ち破る完全な武装に身を固めていた。彼等の武器は、矢・矛・戈・弩・戟・まさかり・刀剣などで、合金製の矢じりは七七%の毒性亜鉛を含み、高い殺傷力をもっていたという。

いずれにしても司馬遷の「史記」の大スター、始皇帝、項羽、劉邦らの綺羅星の如き英雄豪傑美姫侠女は、都長安をメインテーブルに縦横の活劇を演じたのである。

古川美津枝さん（大阪市）から
金一封拝受いたしました

川柳塔社

尼 緑之助氏を悼む

柴田午朗

尼緑之助君が死んだ。私より一、二歳若かったが、ここ数年間は不自由な体になっていた。彼は若い時から麻生路郎氏の門下であったし、私は岸本水府氏の指導下に居たので、若い頃川柳について議論をしたという記憶は殆どない。

親しくなったのは中年以後だが、若い頃、彼は村役場や市役所に勤めていた。若き日の彼がどんなに真面目な良吏であったかを思わせる片鱗を、年とってからも屢々見せた。

彼は出雲国の中心ともいうべき出雲大社に近い村に生れ、育ったせいか、最も出雲人のよい所、悪い所をそなえ持つ人間であった。同じく彼の出生地に近い所に生れ育ち、今を時めく人に竹下首相がある。竹下首相は「言語明瞭、意味不明瞭」などと、いろいろマスコミから揶揄されているが、彼もまた出雲人の長所短所をそなえた純粋の出雲人である。竹下氏と尼氏を比較するなどは少し脱線だが、お二人とも親しくしていた私としては、歳に二十歳のへだたりはあるが、よく似た性格の人だったと思う。

彼は昭和四十六年に、大社に近い日御碕海岸の景勝地に句碑を建てたが、十年後の五十七年、天皇さんが日御碕へおいでになった。そして日本海の説明をきかれたのが、丁度彼の句碑の近く。自分の句碑をバックに、天皇が写って居られる写真を見て、彼はどんなに感激したことであろう。これまた彼の人柄のなせる業かもしれない。

さて本題に入る。六十年の柳歴をもつ彼の作品を、今更どうのこうのという力も持たないが、彼の極く若い頃の作品に

○雪降る——出雲製織株式会社　緑之助

というのがある。また昭和初年の作に

○嘗つて絵にもなき月の小川なる　緑之助

こうした作品に、師の路郎氏がどんな批評を下されたか、当時路郎氏に近かった人の「緑之助評」がききたいものである。

彼はまた九人の子福者であった。

○子宝のみな雑草のように生き　緑之助
○小、中に大学も居る夏休み　同
○欠けもなく伸びた九人の二十五年　同

今はそのお子達がどうして居られるのか、私は詳らかにしないが、ともあれ羨しい限りである。

彼は酒を愛した。酒の句にいい句が沢山にある。

○川柳は吐息酒から句が生まれ　緑之助
○噛んで飲む寝酒サラサラ夜半の雪　同
○十円を五つ並べてもう一杯　同
○酒ばかり詠みいたずらに友を恋う　同
○朝よし昼よし残ったそばでもう一杯　同

ともあれ八十年を生きて来たのである。生活に大きな不安もなく、また川柳の世界でもめぐまれた彼の一生。川柳友達の一人として静かに眠り給え、やがて俺も行くという外はない。

○天と地のはざまにふわり生かされて　緑之助
○人は皆善なり向かい合ったとき　同

○どっこいしょ何を願おか喜寿の春　緑之助

ご冥福を祈る。

温情と柳魂権化の師を悼む

久家　代仕男

職場川柳の講師として昭和二十五年にお会いしてより三十八年間、師の高邁清廉なお人柄と見識、素晴らしい抱容力と温情に魅せられ御薫陶を頂いた師の御逝去は口筆に絶する悼みであります。

川柳活動六十有余年の御生涯は川柳即生活を生き甲斐として再発直前まで御不自由な身体で、しかも冷春の半ば川柳指導に出席なされ、川柳の裾野発掘には異常なまでの執念と情熱を傾注された御活躍は卓越した精神力と柳魂に対して驚嘆の外ありませんでした。

師の柳話はお世辞にもお上手とは申せませんでしたが、訥々とした出雲弁の中に永年培われた川柳の真髄を摑んでの語り口には、人間としての温か味より滲み出る深い味があり、聴く者を引きつける魅力が溢れていました。長いおつき合いのうちに唯の一度も不快を顔にされたことのない心の広い師でした。師弟の垣根を越えて大変気ごころが合って引き留められるまま柳談に長居をする昨今でした。

川柳は人間陶冶の詩、故路郎師のお言葉を具現して私達にお手本を示された師の瓢々とした人なつこいお姿と、あの詩情溢れる川柳に二度と触れることの出来ないことをこの上ない悲しみと致します。

昨秋の出雲市文化奨励賞、続いて県教育委員会より県芸術文化賞、二十周年記念の功労者としての受賞二つの祝賀川柳大会が師の餞になろうとは露ほども思いませんでした。

県の川柳先駆者として献身的な功績は私達の知る限りでも枚挙にいとまございません。唯々残念の一言に尽きます。

残された傘下の者は尊い師の御遺志を継承し、守り抜くことこそ師に対する報恩と心得奮起をお誓いし師の御冥福をこころからお祈り致します。

合掌

むなしとも空し手向けの句が出来ず

尼緑之助先生の死を悼む

恒松　叮紅

巨星墜つ　夕日が沈むかのように

先生の死を知った直後に思わず口先に出た句である。四月六日早朝の、電話のベルは不吉な予感で受話器を取った。久家代仕男氏からの緑之助先生ご逝去の報せであった。瞬間この世にかけ替えのない大切なものを失ったような思いがした。ちかぢかお見舞いに行こうと同人舟木与根一、柳楽鶴丸らとも相談しあっていた矢先で、こんなに早く亡くなられるとは誠に残念でならない。

戦前、私がまだ米村あん馬選者の松陽新聞柳壇に投句していたかけだしの頃、先生の—

雪降る——出雲製織株式会社

の句に感動し、それから川柳雑誌を購読しはじめたのが今の川柳塔社同人となるきっかけであった。今も私の座右の句として、いつだったか川柳塔目次欄に載せた事もある。

先生は、大正十五年以来六十余年の歳月を川柳と共に歩み、山陰中央新報の山陰文芸川柳選者或いは島根県川柳協会副理事長として又、地元出雲市で柳誌「いずも」を主宰し、公民館や福祉施設の川柳部門の講師として後進者の指導と、数多くの新人を育成されて来られた。五十五年に最愛の奥様を亡くされ、その後脳血栓で倒れられてからも、川柳への情熱とリハビリによって克服、ご不自由な身をおして遠路をもいとわず、各地大会などへ出席され、その献身的なお姿にはただただ頭の下がる思いで、温厚篤実なお人柄は県下川

柳人の良き師として誰からも慕われ、その人望と力量は島根県の川柳界になくてはならない存在であった。

四月七日、葬儀の行なわれた明顕寺は、蕾ふくらむ桜花とはらはらに、朝から冷たい雨が降りつづいていた。居並ぶ参列者の悲しみとも、又恰も天がその人の死を悼むが如くのようでもあった。　合掌

哀悼　尼緑之助先生

園山　多賀子

〝早暁の南の空に星一つ〟一際光り輝く新星を見る。暁の正夢か、四月六日早朝の電話のベルに訃報を知り絶句。案じていた予感が的中。その前日御見舞した時、呼吸困難の状態でもお声をかけると通じて反応が表情に窺われ、今一度の奇蹟を願って帰ったばかりだった。兄も存命長生きの血統だと自負、五十五年の発病以来足が不自由、言語障害もあり、それにも屈せず松江は勿論、浜田方面までも御出席、出雲の女達は必ずお供して喜んでお世話を焼いた。川柳一すじの生涯その気力にはほんとうに頭が下るばかり。

翌七日の葬儀は朝からの冷雨、ふくらみ始めた桜も足踏み、〝桜待たず柳抱院釋緑仙居士〟米子、石見など先生の遺徳を慕い参列者大勢。賑やかな葬儀となる。納骨に花を捧げる人達私は川柳塔いずもの灯が炎え続けるよう祈り真っ赤に炎えるカーネーションを撰ぶ。

雨しとど墓石を伝う涙雨

大正十五年たかせ会からスタート六十有年川柳の長い径を数多の柳人を育て川柳いずもの中に人徳不滅永遠に生きる師の柳魂がある。

四十八年海猫の乱舞する景勝の地に句碑建立、〝灯台の夕陽神話を抱きよせる〟(当時私はまだ川柳の道に入っていなかった)詩情溢れる名句に岬を訪れる人達はそれぞれの憶いを寄せることであろう。それから十年、恰も喜寿と六十周年を記念して句集〝生かされて〟を上梓、豊かな人格と詩情で綴られた句集は私達柳人の座右に置いて師を偲ぶよすがとなる。六十二年出雲市文化奨励賞に次いで県教委表彰と多彩な功績に陽が当り、柳友こぞって祝賀の句会も盛会であった。

先生とは十二年間の交際御薫陶を受け思い出の糸を手繰れば尽きない憶いがある。

人はみな善なり向い合った時　緑之助

天と地のはざまにふわり生かされる　〃

余りにも人生を達観した著名な句と言える。

唯唯御冥福をお祈りするのみ。　合掌

柳楽鶴丸句画集「自然点火」発刊記念川柳大会

日時　**昭和63年6月5日**(日)10時開場

会場　松江市殿町　むらくも会館
県民会館前バス停下車徒歩2分
一畑百貨店北

会費　三、〇〇〇円(小宴含む)

お話　黒川　紫香

宿題　「光る」　久家代仕男選
「相性」　本庄　快哉選
「宝石」　小林由多香選
「リズム」　河内　天笑選
「本音」　橘高　薫風選
「反骨」　柳楽　鶴丸選

謝選　各題2句　締切12時
席題なし　投句拝辞

◇4日(土)の宿泊(一泊二食六千円程度)希望の方は**5月25日**迄に左記へ

〒690　松江市雑賀町一六八六

主催　川柳塔まつえ

電話　0852(24)5450

初歩教室

題 ― 新鮮

阿萬萬的

今月の課題「新鮮」を書く前に編集部より皆さんに謝らねばならぬ事がございました。それは四月号の予告に、なんと締切の済んでしまったものを掲載していたのです。しかしこんなに沢山の投句を頂いて本当に感謝致しております。さて「新鮮」ですが。

若いっていいことですね。

新鮮に若さも風も春謳う　富　恵
目いっぱい新鮮してるレオタード　治
（レオタードからはみ出している若さ）
新鮮な光の中で汗流す　小　鹿
（新緑の光に若い汗をかく）
新緑とくれば山里の空気は一層に――
新鮮な空気に心の底洗う　由　梨
新鮮な空気がうまい山の里　富　恵
新鮮な空気　水貯めてる山の里　悟　郎
（新鮮なみどり貯めてるダムの水）
トンネルを抜け新鮮な空気吸う　都姫子
下五を「風に逢う」としてみては如何。

新鮮な空気の過疎に職がない　光　子
（空気だけは新鮮過疎の進む村）
だが、都会では……
新鮮な空気が欲しいファンヒーター　温　子
新鮮な空気に金の要る都会　三　倉
新鮮な空気が街で売れている　正　子
（山の空気　缶詰にして街で売れ）
旅に出て朝市には、みずみずしさが一杯で
今朝採れた野菜を青空市で買う　三千子
新鮮な土の香添えた野菜市　由　梨
朝露をつけた野菜を買うテント　和　子
朝市の大根土のついたまま　美　子
朝市の新鮮野菜露ひかる　明　吉
朝市のみずみずしさに宿の下駄　しんじ
野菜の外に魚市場にも新鮮な声が溢れています。
掛け声が新鮮にする魚の棚　三　倉
新鮮な声につられて買う魚　金　吾
朝市の新鮮魚のセリの声　ミツエ
（男の声が新鮮にする魚市場）
朝市で海の青さの魚買う　ちず子
一尾だけ朝のざこ場で買う活気　結　美
（声につられて朝のざこ場で買うて来る）
トラックで鰯もいきてる黒門町　明　吉
（手手噛む鰯や男の声で売り捌き）
新鮮な魚だ息をついている　小　鹿
（まだ生きてる証拠にエラが動いてる）
新鮮な目玉が並ぶ魚市場　三津江
（新鮮な目玉がギョロリと魚市場）

新鮮な魚を買いにバスツアー　義
朝掘りの筍には旬の香り土の匂いがして
朝掘りの筍土が濡れたまま　勝　美
朝掘りの筍姑を喜ばし　サワ子
新鮮が嬉しく近所へおすそ分け　正　之
（土の香の筍近所へおすそ分け）
だが街に住んでいては……
水耕の新鮮野菜旬知らず　方　子
陽の恵み季節感さえない野菜　サワ子
（新鮮だが季節を忘れている野菜）
新鮮な野菜話のはずむ膳　美恵子
手作りの新鮮野菜食卓に　ミツエ
（ミニ菜園ささやかながらいい香り）
鶏舎から今朝の玉子をそっとくれ　遊　峰
新鮮を家庭に届けるのが農協　正　之
（農協さん家庭に新鮮さも届け）
純白の皿に花つき胡瓜あり　八重子
ふる里からの宅急便にはそれぞれ……
航空便活きた魚も届けられ　登　代
宅急便里から届く山の幸　三千子
新鮮な香りを乗せて宅急便　喜代子
苺には新鮮な甘い香りがして
温室の外にも匂う苺狩　紀代志
新鮮な苺もハウスの味がする　美　子
口の中新鮮な苺に春含む　繁　男
（口の中朝採り苺に春含む）
おどり喰いの句もありましたが私はねえ
目つむりグッとかまえておどり喰い　結　美
生き造り宿で楽しむ夫婦箸　ふさ子

活造りに魚の泪をふと思う　円　女
ここらで趣向を一寸ばかり変えてみて…
新歌手のデビュー新風巻き起こす　喜与志
（ちとはみ出した新風ギャルがデビューする）
流行の新鮮ほどに価値もなし　登　代
（新鮮だけを売り物にしてギャルの歌手）
家庭内も少し覗いて見ると……　美恵子
新鮮味土日たのしむ父帰り　八重子
夫出張たまの逢瀬が新鮮です
（新鮮味単身赴任の父帰る）
結婚三年やや新鮮味欠けてきた　み　ね
新鮮なドラマが欲しい倦怠期　ちず子
知り過ぎた裏に失した新鮮さ　遊　光
（知り過ぎた裏で新鮮さが鈍り）
ファインダーに入れれば妻も新鮮に　晏
化粧品変えたな努力してる妻　治
新鮮さ先ず円満のかくし味　太一郎
（家庭円満少うし新鮮さがうすれ）
新鮮なサラダに餓える更年期　緑　良
人生の節目に新鮮の風を入れ　繁　男
（新鮮な風が節目に活を入れ）
新鮮な気分ふたりの宿浴衣　静　子
新鮮な気持で夫と向う朝　かず子
（新鮮な気持で夫と旅の朝）
新鮮な料理で旅の疲れとる　照　子
（フレッシュな料理の旅だが疲れて来）
手術した目に新鮮な初夏の空　金　吾
息子に嫁が来る孫が出来る。そこに又新鮮味が生れて来るもので…
新鮮な話題明るい嫁が来る　ふさ子
ホヤホヤの夫婦茶碗にある温み　章　久
新鮮な風が吹き込む子の新居　純　子
新鮮な話題をもって孫が来る　照　子
新鮮な風を入れる孫の嫁　サワ子
（フレッシュな風吹き込ます孫の嫁）
同居して新鮮な気分で若がえり　喜代子
（子等同居新鮮な風入れてくれ）
そして老境ともなると…
春風と妻に誘われ芹を摘む　紀代志
フレッシュな心で描く無我の地図　路　子
新鮮な話題が欲しい老人会　温　子
訓示や会議はとかく新鮮味のないもので…
新鮮味はないが訓示に堪えており　晏
新鮮な意見聞きたい会議室　都姫子
（新入社へ新風期待する訓示）
新鮮な祝辞聞える皿のメロン　ト　キ
（皿のメロン祝辞も新鮮なるみどり）
座る位置変えて会話が新鮮に　和　子
（席変えて金話に新鮮さを入れる）
そして気になる政治にも…
新鮮味いとも乏しき竹下氏　和多留
政治家よユーモアのある新鮮味　和多留
（政治家に欲しいユーモア新鮮味）
ここでいつものように諸諸の句を…
墓参り朝採り野菜のあまさ知る　方　子
（ふる里の朝採り野菜にある香り）
大原女のいでたちに見せ野の匂い　しんじ
（新鮮な若葉が匂う大原女）
はみ出してどうしようもない新人類　隆　雄
（新人類のはみ出し新鮮だが困り）
ラッカーで新鮮に化けている蜜柑　悟　郎
（艶出しで蜜柑は新鮮そうに化け）
ひた走る女子ランナー胸ゆすり　治
（ひた走る女子ランナーの胸ゆれる）
新鮮な顔を揃えて開店す　保　夫
（新装開店みな新鮮な顔並ぶ）
ハネムーン新車に乗って渡り初め　喜与志
新鮮な気持で君に逢いに行く　正　子
フレッシュな風に揺れてるイヤリング　純　子
新鮮な一番出世の肌の艶　遊　光
新鮮なオレンジを選る太い指　つゑ子
もぎたてのトマトの艶の官能美　勝　美
新鮮なままつき合いの平行線　保　夫
勲章があるので新鮮さに欠ける　緑　良
新鮮な構図で海をひとまたぎ　三津江
キャスターの鮮度が落ちて替えられる　義
和解して澄んだ空気に包まれる　み　ね
では次号を期待致しております。

◇

題「**身軽**」　**6月10日締切**（8月号発表）
ハガキに5句以内
「蜘蛛」　7月10日締切（9月号発表）
宛先　〒598　泉佐野市中庄一〇八一―九九　阿萬　萬的

雲

森田熊生選

あの雲を突っ切ったまま特攻機　素身郎
蒼空へ許してならぬきのこ雲　義美
暗雲がいまだ漂う北の島　白峰
雲に染む屍と散った友がいる　蛍
雲の峰越えたら亡父に逢えそうで　三千子
浮き雲は明日の命を知らぬまま　博子
思想ない雲がさっさと風に逃げ　たつみ
どうしても雲突き抜けぬ棒グラフ　章人
鍵っ子にもうおかえりと茜雲　正敏
大空をキャンバスにする飛行雲　保
陽を覆う雲にも雲の道があり　ちかし
過去は皆消えてしまった飛行雲　喜代
夕焼け雲みな美しい影になる　大柏
巡る四季雲は主役の彩放つ　三枝子
ちぎれ雲絵になる富士の位置へ浮く　白渓子
ひと刷毛の雲さわやかに秋にする　静子
寝ころぶと雲の吐息が聞こえそう　保夫
孫の絵の空にはいつも雲一つ　温子
無策の日雲の流れを追って暮れ　鉄治
雲の峰亡母の笑顔がいつもある　寿恵子
迷うてもおれぬ雨雲低くなる　多織
ちぎれ雲相談相手欲しくなる　さかえ
大空へ雲は自画像画いている　典子
焦点がきまらず雲に乗ってみる　旭恒
雲間から働き蜂は覗かれる　雄々
八起目の希望を雲が見届ける　玉恵
白い雲ペダルを軽くしてくれる　三和
いやな雲洗濯物が干してある　早苗
どん底にこんな明るい茜雲　悦子
幾度か勇気を呉れた雲の峰　規不風
行く先は雲にまかせて汽車に乗る　諷云児
孫悟空のせて童話の雲が乳ぶ　悠泉
クレヨン画母に似ている雲を描き　明水
ひとときを雲が隠したかくれんぼ　美代子
合格の報らせに雲が美しい　重人
一寸浮気で行く先言わぬ流れ雲　枯梢
少年の夢は無限の雲に乗る　清芳
山の子の夢果てしなく雲にのる　佳
愚痴一つ明日へのばしたあかね雲　さと美
雲流れ都会へ消えた娘をおもう　砥代
雲一つない蒼空と耕耘機　〆女
雲じっと見つめ鍵っ子動かない　妻子
台風が雲食って去る蒼い空　人　兼治郎
雲紅く炎える涙が乾くころ　地　幸一
流れ雲故郷のおやじは達者かナ　天　緑良
わらべ唄雲と指切りして帰り　軸　雀踊子

駅

脇田米朝選

宿下駄の不倫がすこし匂う駅　三五島
駅前に居ながらしょっちゅう乗り遅れ　素身郎
子が迎う方向音痴の駅に降り　寿恵子
何時の間にもぐら掘ったか地下の駅　章久
リヤカーで駅まで来いと母のふみ　虹汀
過疎の駅秘境の蒼に吸い込まれ　正敏
方言が次々胸打つ駅に降り　軒太楼
降りたとこ動くな東京駅不便　多織
湯の街の駅で干物を買うて乗り　白渓子
過疎の駅始発は車掌と顔なじみ　森脇和子
影法師と仲良くおりる無人駅　玉恵
終着へまだまだ夢の駅がある　晏
再会の駅で少年の日に戻る　文平
駅弁を味で買う程旅に慣れ　明水
駅長がそばを打ってる山の駅　杏村
親切な女が降りた駅の名は　蛍
も一人の私を駅で見失う　はるお
始発駅今日のドラマを乗せて発つ　元江
無人駅蓮華を敷きに春がくる　照子
駅からの電話夕飯待っててね　恵美
ラッシュアワーのんびり見てる駅の鳩　典子
ふる里の駅に無口な温い父　規不風

故郷の駅は変らぬ蟬時雨　寿美
花好きの駅長が居たローカル線　よし津
駅からはハイヤーにするすねかじり　暁明
ユーターン迎えてくれた無人駅　さかゑ
道づれと所詮別離の駅が待つ　知恵子
駅馬車にロマンを乗せる西部劇　白峰
心の奥に私の終着駅がある　雀踊子
無人駅もう嘆くのはやめました　三枝子
駅からの距離広告を信じない　三倉
駅舎の鳩はつらい別れを知っている　枯梢
思い出の駅でひと汽車あとにする　遊峰
発車ベル無情に二人の仲を裂き　千秀
フラッシュが駅を囲んだ時の人　静子
双方の顔立て駅の名が長い　本蔭棒
もう逢えぬ予感へ寒い駅に立つ　雄々

佳

母が待つ駅に向っている安堵　ちかし
うまが合う穴場が駅の裏にある　可住
ふるさとの駅から温い風になる　〆女
栄転が着いて左遷が発った駅　宵明
この駅で牛蒡剣をつけた過去　和友

人

やりなおすつもり女の始発駅　辰江

地

駅長が貼る沿線の花だより　正坊

天

駅裏のペンペン草はお金持ち　治

軸

点滴で終着駅から折り返し

好き

田形美緒選

野の花が好きで出世に遠くいる　正坊
流行に遅れた服を好きで着る　照子
好きな人へ出す絵葉書選っている　静子
仇野の仏を濡らす雨が好き　達子
京訛り嵯峨野に住んでみたくなり　大柏
赤字線好きな景色が続く窓　白渓子
好きだった人の訃を聞く花ぐもり　素身郎
好きずきがあって残った花も売れ　典子
好きですは一度も聞けず老夫婦　辰子
好きでなく嫌いでもなく添い遂げる　倫子
恋に恋して十六歳は桜いろ　あやめ

優

冗談が言えても好きとまだ言えず　智恵子
気にならぬ仕草とことん好きだから　寿美
以心伝心向うも好意持ったらし　千秀
横顔が好きで隣の席を取る　高夫
傍に居るだけでときめく好きな人　〆女
好きだから噂を信じまいとする　不二
好きですとあっさり言うから信じない　さかえ
本当は好きで意地悪してしまう　本蔭棒
只一度好きと言われた過去がある　規不風
好きな人なので生涯負けている　洋敏
男勝りで大輪の花が好き　白峰
親の血を素直に承けて遊び好き　勝美
好き嫌いない父ちゃんでたよりない　忠三
ばあちゃんが好き小遣をくれるから　美代子
好きだから何も要らないなんて嘘　宵明
貧乏と縁が切れないうどん好き　狸村
たこやきが好きな男に嘘はない

保

たこ焼が好きで天下を論じてる　よし津
薔薇よりもより添う霞草が好き　元江
この土が好きで根を張り花咲かせ　諷云児
好きやからまた逢うレール敷いておく　三倉
抜けているところがあって君が好き　正子
好きなのに妻を泣かせてばかりいる　公一
好きだから別れてあげる蛇の目傘　純子
好きすきと書いた日記が遠くなる

佳

猫好きな家族で丸い日を送り　秀峰
雑草が好きで非運を嘆かない　奈美子
紙ヒコーキ好きな女にとどかない　雀踊子
一か八か好きだと言うてみるつもり　玉恵
ふるさとの山は大きな声が好き　可住

人

青空が好きで野良犬やめられぬ　緑良

地

好き嫌い花弁はいつも奇数だが　晏

天

一坪へ私なりの好きな花　克子

軸

仏像が好き優しさに餓えている

柳界展望

集録―敏・武庫坊

★各柳社の一九八七年度の各賞発表

・かもしか川柳社（青森）
かもしか賞　野沢省悟
・時の川柳社
ときせん賞　中野正王
・小樽川柳社
冬眠子賞　朝倉大柏
・川柳研究社
川柳研究年度賞　福田豊
・川柳きやり吟社
周魚賞　黒田茶円
浅田竹渓
・川柳宮城野社
最優秀作品賞　佐藤千草
・川柳えんぴつ社
えんぴつ社賞
村井智恵子・渡辺美峰
泉久令・岩田妙子
・ふあうすと川柳社
ふあうすと賞
伊佐次無成・和田町子
安西まさる・藤井高子
紋太賞
鷹野五輪・尾崎黄紅
赤城一平・石部明

★第33回全国川柳作家年鑑参加作品公募

句稿―参加用紙を使用。作品7句（新旧作いずれも可）
参加費―三千円（海外は20ドル）定額小為替か振替
締切―63年6月30日
発行―63年9月下旬の予定
投句先―〒675-01加古川市平岡町二俣753・18安川一醉あて
刊行・ふあうすと川柳社

★堺番傘川柳会は「ちぬ」誌五月号を五人の句碑除幕記念特集号として発刊。

白い手を汚しにんげんらしくなる　中田　たつお
寝ころぶと地球の丸いのがわかる　海堀　酔　月
城跡に花咲く夢をすてきれず　児山　有　楽
虚も実も白く照らして丸い月　半井　甘　平
よろこびのふたりにながい道があり　辻　香　豊

堺市小谷城址に、合計十三の句碑が建立された。

★松江番傘誌五月号に中国新聞のいずも・いわみ文人列伝欄（川柳・尼緑之助）を一頁にわたり転載。

★吉永川柳社は、四月十日憩の森でお花見句会を開催。

★はびきの市民川柳会は、四月二十四日隅谷義一米寿籾山昇古稀祝賀記念句会を開催。

★広瀬川柳愛吟会の第一回川柳愛吟コンテストの最優秀賞は、四枚田正敏氏が受賞。

★「愛吟」誌三月号の「友誌拝見」欄に、川柳塔七二五号～七二八号の中から二十七名の作品を紹介。

★大阪府公園協会川柳部の会誌「川柳はまでら」創刊号が三月二十一日発行された。

また、四月五日～十五日堺市浜寺公園内の桜並木に同部員と「川柳大阪」のメンバーの短冊が吊り下げられた。

★旭川川柳社の「川柳あさひ」誌は一月号で五百号に。

★いずも川柳会の「いずも」誌は四月号で二百号に。主宰尼緑之助氏が入院加療され、同人有志が緊急会議で運営分担し、会誌発行、句会続行を決めて発行に至った二百号です。

尼主宰は発行を見ずに他界された。

新参事紹介

平田市　久家　代仕男

▽新　刊△

★藤村青一作品集
A5判百頁・千三百円
発行所―大阪府豊能郡能勢町大里六六の八　詩画工房
※高鷲亜鈍氏（寝屋川市・本社相談役）の傘寿記念に編まれたもので、氏の詩集「保羅（パウロ）」、誌集「秘奥（ひおう）」、句集「白黒記」「阿呆理住・豆・亜鈍（アフォリズム・ド・亜鈍）」「水谷知久歌曲集」随筆集「詩人複眼」等から抄出された作品集。

★柳楽鶴丸句画集
『自然点火』
A5判二四〇頁・非売品
※還暦・銀婚・退職・川柳歴35年・俳画歴10年を記念しての発刊。柳画？六十点が圧巻。希望者には、千五百円、送料三百円、但し部数に限りあり。
松江市菅田町24―9
松楽　鶴丸

★川柳自選句集「吉備団子」38集
A5判一四四頁・千五百円

（〒60円）
発行所―岡山県邑久郡邑久町山手一四四五　川柳岡山社

★時実新子著
「川柳添削十二章」
B6判一八二頁・千二百円（〒250円）
発行所―東京都千代田区神田司町2―7　東京美術

★朝日なにわ柳壇第六集
B5判五二頁
昭和六十一年・六十二年度の入選作品集。
朝日新聞社刊

▽**同人・誌友消息**△

★本田恵二朗氏（倉敷市・本社参事）「ますかっと」五月号の「川柳女心と男心」に執筆。

★東野大八氏（美濃加茂市本社相談役）「きたぐに」誌三月号のきたぐに秀吟抄に執筆。また「柳宴」五月号に「句碑をせんさくする」と題して執筆。

★吉岡きみえ氏（島根県・本社参事）第一回川柳愛吟コンテストの優秀賞を受賞。

★井上喜酔氏（河内長野市本社理事）三月誕生した大阪府公園協会川柳部の指導を担当。

★黒川紫香氏（副主幹）尾崎市地区高齢者大学のきようちくとう学園の中で六十四年一月に文芸部門でことばと風土―大阪弁と川柳―の講師を担当される。

★4月24日開催のふあうすと年間賞発表川柳大会で高杉鬼遊、林荒介両氏は夫々秀句賞二個宛獲得。

れんげ菜の花
おんなごころは揺れやすい
土一揆の草の根あつき
　血が通う　鬼遊

撃鉄を起こせば戯れて
　済まされぬ
一粒の種子は戦の外に播く
　荒介

★5月1日開催の尼崎春の川柳大会で次の通り秀句賞獲得。

名優の咳一つにも間の深さ
　春城武庫坊

しゃが咲いて藪の仲間も
　目を覚す　春城　年代

★林荒介氏（米子市・同人）が第十九回東洋樹賞贈呈川柳大会で時の川柳社賞を受賞された。

★阿部柳太氏（富田林市・本社副理事長）が町並み保全のための建物修景工事の完成を記念して「格子より花の香こぼる寺内町」という句を入れたテレホンカードを作り、町内に配ったことが五月七日付・朝日新聞の大阪府下版に写真入りで報道された。

▽**逝　去**△

■井阪東天紅氏（和泉市・同人）

■新開千代女氏（富田林市同人）の夫君、豊氏は五月九日逝去、告別式が十日、行われ、薫風・泰子・美緒智恵子ら同人が参列した。

▽**お便り**△

■堀江正朗・芳子氏（島根県・参事）
4月14日の観桜句会には紫香、雀踊子先生等御来駕の由ありがとうございます。先般尼緑之助先生御逝去の節はお心づかいありがとうございました。御逝去の前日お宅よりの電話で駆けつけました。目を開いて何かおっしゃいましたが声にならず残念でした。

■斉藤三十四氏（東大阪市理事）
皆様にご心配かけましたがやっと退院、家で養生しております。今しばらくしましたら句会にも出たく思っております。

■久家代仕男氏（島根県・理事）
尼先生御逝去以来あわただしい日を送っております。4月24日いずも川柳同人総会を開催、私を会長に、原独仙氏を顧問に選任しました。

▽**訂正**△

■3月号76P中段4行目
「噂話のかけら集めて風の私語」の作者は**美智子**

新同人紹介

冨岡温子（とみおか）
―薫風・公一・右近・満津子・典子推薦

谷口次男（たにぐち）
―菩句・独歩・由多香・鬼遊推薦

田辺灸六（たなべ）
―薫風・千翁・克枝推薦

本社 五月句会

五月七日（土） 午後六時
メンズファッションセンター

朝からの雨が四時過ぎから激しくなる。連休明けとあって気遣われた出足もまずまず。遠来の田中好啓、寺尾俊平両氏の名披講で、ひきしまった会となった。

おはなしは阿萬萬的氏。テーマは古代大阪の歴史。

日本建国は、ニニギの命の天孫降臨—神武東征—橿原の宮で即位という従来からの説に対し、もう一つの説を紹介。神功皇后が朝鮮の任那を助けるべく出兵、しかし戦い敗れて九州北岸のクヌ国に逃げて来て、そこで大和の国売りの話を持ち出し、クヌ国の皇子と共に瀬戸内海を東へ帰って来たのだが、先回りしていた伝令によって、この事が知らされていて大和に入れず、詮方なく住吉に上陸。一行は泉北の地に住みつき農耕や土器の生産をはじめた。しかし、神功皇后は大和への郷愁たちがたく、葛城豪族の仲介で、やっと大和入りする。

住みついた朝鮮文化の高い人達、僧侶や文人たちとかなしい恋が芽生え、その娘さんのことを狐になぞらえて伝えたのが葛葉稲荷の話となったのだと思われる。尻っ尾を出したというのは、かくし切れないふる里の風習が露見したというふうに解釈できないこともない。

この他、堺東駅前からバスで三十分ほどの室堂町にある女鹿坂にまつわる伝説や、光明皇后が実は鹿の子の生まれかわりで、足の指が蹄の形で二本だったので常に足袋をはいて足を見せなかった。これが足袋のはじまりである、などなど、歴史に造詣深い萬的氏ならでわの話であった。

今月の月間賞は西山幸さんが獲得。

（進行—天笑）（受付—年代・藤子）
（記録—射月芳・月子）

出席者—〆女・小路・芳子・敏・杜的・武庫坊・年代・好啓・太茂津・萬的・元紀・諷云児・白渓子・喜風・しげお・柳伸・寿美子・アキラ・栞・作二郎・悦郎・重人・柳宏子・藤子・天笑・月子・美房・幸・冬葉・規不風・白峰・達子・満津子・典子・章久・紫香・美智子・庸佑・鬼遊・はつ絵・みつ子・憲太郎・英子・楓楽・吐来・泰子・美緒・東雲・あいき・ダン吉・三男・正坊・恭昌・すすむ・みね・靖子・千秀・外吉・史好・昭子・美代子・頂留子・吸江・一二三・英千子・文秋・度・

第3回国民文化祭ひょうご88文芸大会川柳部門募集要項

(1)作　品　未発表作品　宿題10句・各題1句

(2)題と第一次選者

『港』　安藤富久男
『爽やか』　礒野いさむ
『白』　大野　風柳
『民』　斎藤　大雄
『島』　田口　麦彦
『城』　田中　好啓
『本』　時実　新子
『踊る』　西尾　栞
『彫る』　広瀬　反省
『ペン』　渡辺　蓮夫

(3)応募料　一、〇〇〇円（郵便小為替を作品に同封）但し海外投句は無料

(4)応募方法　400字詰原稿用紙
1枚に題と作品　1枚に郵便番号住所氏名・年齢・性別・職業・電話番号と大会当日の出欠を明記

(5)応募先　〒650神戸市中央区下山手通4—16—3　㈶兵庫県文化協会内
第3回国民文化祭文芸大会川柳部門事務所

(6)締　切　昭和63年7月31日（日）当日消印有効　但し海外投句は7月31日必着

寿美・雀踊子・寿子・岳人・俊平・薫風・射月芳

席題「煙草」　寺尾俊平選

句読点ない日々煙草やめてから　楓楽
吸いながらがくの字になってごてている　重人
いっぺんで禁煙信じて貰えない　満津子
煙草の輪言えない夢が浮いている　美智子
成人の日から禁煙する息子　昭子
タバコよタバコよ私は見捨てない　敏
煙草銭ほどのパートへ雨の中　寿美
男の意志タバコ如きに試される　美緒
嫌煙権に弱い煙草を喫っている　好啓
禁煙パイプを銜えている喜劇　重人
青空のホームで禁煙タイムとは　度
灰皿へ女医が疲れをすてに来る　雀踊子
演技する煙草をバカにするでない　好啓
決断のときへ煙草を深く喫う　芳子
くわえ煙草で意見するのはやめなはれ　千秀
煙草をやめた日にポックリといくだろう　度
ゴールデンバットの好きなかぐや姫　岳人
喫わぬ人には傍若無人なる煙草　文秋
煙草銭ぐらいで思想売らぬこと　美緒
船室で四五人囲む煙草盆　紫香
風五月たばこはゴロ寝ばかりする　元紀
禁煙をほめられるほど莫迦でない　鬼遊
煙草は灰に鎌足の墓あばかれて　作二郎
喫ってもよいかと聞かれ嫌だと言えますか　年代
禁煙をなんべん誓う葱坊主　年代
天皇賞に敗けた煙草はよれよれに　作二郎
たばこ喫うわが家不思議にみな達者　外吉
禁煙をしてますイライラしています　正坊
長寿村にタバコの好きな人が居た　外吉
煙草の火借りて無口が喋り出し　美代子
煙草屋の娘ずい分齢をとり　典子
吸殻はB型という捜査陣　栞
煙草の輪ひたすら君の掌に崩れ　寿子
禁煙車ならまだありますと指定席　杜的
思い出し笑いしている煙草の輪　泰子
ためいきでつくる歪んだ煙草の輪　幸
禁煙の手持ちぶさたが鶴を折る　美代子
寝煙草を吸う哀しみをもっている　幸
煙草屋の娘が嫁った龍宮城　岳人
禁煙車変な匂いがし始める　アキラ
戦争を忘れ手巻き煙草も忘れ　俊平

席題「役者」　田中好啓選

赤坂の夜を演ずる役者たち　典子
披露宴新婦の方が役者です　史好
薫風に今日はゴルフの能役者　みつ子
真似ようとして真似られぬ役者馬鹿　柳宏子
役者バカ死ぬ間際まで見得を切り　英壬子
竹光をあなどったりはせぬ役者　幸
夫も役者上手にしらを切り通す　寿美
淋しいな役者が一人足りまへん　東雲
女は役者真珠の涙ためている　藤子
観客の欠伸見つけた馬の脚　千秀
旅役者重吉の炎が燃えている　はつ絵

---

(7)

賞　文部大臣奨励賞ほか

選考方法　第一次選者により各題秀句10句佳句50句を選出、第二次選は第一次選者選出の秀句各10句計100句から賞を決める

第二次選者　去来川巨城　奥田白虎　橘高薫風　小松原爽介　寺尾俊平　森中恵美子

※入選句および応募作品より一人一句を選び発表紙に掲載　全応募者に配布

発表大会

日時　**昭和63年10月23日**(日)　10時開場

会場　神戸国際会議場（メインホール）　神戸市中央区港島中町6—9—1

大会内容　入賞作品の講評と授賞式ほか

記念講演　園田学園女子大学助教授　坪内　稔典氏

当日句会・宿題と選者

『灯』　卜部晴美
『皿』　久保田寿界
『草』　遠山可住
『街』　平山繁夫
『笛』　藤本静港子
『文』　山本哲郎

各題2句・締切12時

主催　文化庁・兵庫県・兵庫県教育委員会　兵庫県文化協会・国民文化祭兵庫県

悪役で舞台貰く父で好き　小路
みなさんと一緒に笑いたいピエロ　鬼遊
負けている方が役者が上だろう　楓楽
残菊は惜しい役者の影を抱く　元紀
少し風邪気味老け役になりきって　アキラ
良い役がついても歌手であると言う　吐来
千両役者に他人には知れぬ襞がある　寿美子
アドリブの上手い役者に灰汁を見る　岳人
役者から貰う涙はよく乾く　〆女
三流館飯田蝶子が生きていた　外吉
斬られ役の奥さんはみなたくましい　杜的
しゃぎりの音子供歌舞伎の幕が開く　射月芳
行く先は雲と流れる旅役者　芳子
脱ぐことで活路ひらいてゆく役者　幸
大根役者だから信じていいだろう　射月芳
人の目をいつも気にしている役者　満津子
鏡台に向うと役の顔になる　作二郎
猿翁の所作春雷の名残りして　悦郎
燃えつきた役者に冷えた椅子があり　アキラ
子役の時の顔に時々なる女優　作二郎
役者馬鹿ひとりの雨を聞いている　俊平
勘三郎に似た声がする村芝居　小路
妻の目が女形の所作に負けている　作二郎
むらさきの見得花道に柝が響く　岳人
花道に役者が登る山があり　重人
花道のここは役者になるところ　好啓

兼題「紐」　西出楓楽選

結びたい相手の紐が見つからず　昭子
須彌山につながる紐をさがしてる　武庫坊
幸せをたぐり寄せてる細い紐　恭昌
紐つきの融資喉から手が出そう　英子
紐の端持ってる妻を信じてる　緑良
五時からの女に紐の影がある　栞
守備範囲まで紐の長さをゆるめとく　年代
締めてゆるめて財布の紐は天の邪鬼　柳伸
腰紐が支える女の見栄と業　典子
結び目がところどころに嫁姑　典子
要るときはそこらに紐が見当らず　白渓子
操りの仕掛けの紐に血が通う　章久
財布の紐妻が握るとはなさない　雀踊子
紐つきの余波でころがり込んだ椅子　憲太郎
赤い紐祖母は女を忘れない　しげお
午後五時になると気になる妻の紐　史好
二人三脚紐がゆるんで来た誤算　千秀
出直しへ確かと結える靴の紐　みね
遠くても紐はしっかり結び合う　昭子
手品師の紐が裏切ったらこわい　作二郎
紐をかけよう今の小さなしあわせに　千代
猿廻し紐の加減にある情　寿美子
あご紐を締めて激しい風に佇つ　満津子
朱の紐が軽い殺意を抱いている　寿子
母の背があたたかかった負い紐　正坊
安全な位置で操る長い紐　太茂津
棒グラフ睨んで締める靴の紐　白峰
新しい女に紐をつけられる　緑良
気のゆるみ締めろと靴の紐が切れ　柳宏子

実行委員会・神戸市・神戸市教育委員会・日本川柳協会・兵庫県川柳協会・神戸川柳協会

弓削川柳社創立40周年記念
瀬戸大橋架橋・新岡山空港開港祝賀
岡山県芸術祭参加

第40回西日本川柳大会

とき　昭和63年9月3日(土)、4日(日)
ところ　岡山県久米郡久米南町下弓削
　久米南町中央公民館ほか

◇9月3日　久米南町内観光と大園遊会
◇9月4日　川柳大会

川柳の募集はI部とII部に分け、I部は事前出句、事前選（無記名清記選）とし、平抜句は印刷し大会当日配布。佳吟五句、天地人三才は選者が披講。席題なし。特別題当日一題が披講。席題なし。特別題当日一題

〈第I部〉

兼題
「無」　去来川巨城選
「世界」　大野風柳選
「迎える」　大森風来子選
「カタログ」　小林由多香選
「港」　斎藤大雄選
「飛ぶ」　佐藤正敏選

◆応募
各題2句をそれぞれ1枚の紙（計6枚）

廻らない独楽でも妻は紐をひく　白峰
あやとりの紐が時々敵になる　元紀
ゴム紐がたるんだような春の午後　すすむ
長すぎる紐が縺れてばかりいる　満津子
紐固くしめて本心もう見せぬ　吸江
ゴム紐の先で自由を謳歌する　美緒
男結びの紐を信じてよろしいか　年代
紐ぎゅっと結びけじめをつける愛　靖子
らしくするために私を縛る紐　幸
神からの紐を手繰って生きのびる　好啓
あやとりの紐をなくしてから独り　楓楽

兼題「畑」　榎本吐来選

畑打つ誇りを父の背にもらう　緑良
あの頃は純真だった麦畑　敏
億のつく畑のじゃがいも同じ味　三男
正直が掘れば宝の出る畑　射月芳
手離した畑に揺れる父祖の墓　憲太郎
測量技師来ると畑に噂飛ぶ　外吉
開発の波へ畑にある主張　寿子
れんげ畑の無邪気な夢をこわすまい　幸
畑を打つ与作が好きな群すずめ　千秀
初恋の記憶が戻る麦畑　射月芳
億ションの噂聞いてるネギ坊主　美緒
れんげ畑母のメルヘン舞い遊ぶ　英子
里帰りれんげ畑は母の膝　典子
自由化耳に畑摘花の真最中　英子
春雨に焼畑の土黒ぐろと　すすむ
父の汗吸うて畑の土は肥え　満津子
畑を打つ鍬の先から春が来る　悦郎
茶畑に赤い襷が見あたらぬ　寿美子
出稼ぎの畑に菜の花咲いて待ち　吸江
後継は居ないと田畑知っている　楓楽
まぼろしの遠き恋ありねぎ畑　英壬子
茜雲仰いで畑に弾む鍬　〆女
追憶の中に生きてる蓮華畑　みね
一畝のマルサが恐い葱畑　章久
初恋が揺れているのは麦畑　芳子
畑土を知らずに育つトマトの木　美緒
葱ばたけ昼の欠伸が止まらない　作二郎
畑から帰ると娘からエアメール　月子
葱坊主踊らせ畑にある余生　規不風
畑をうつ小鳥が呟くのを聞いて　俊平
出来過ぎたキャベツ畑でごろ寝する　小路
ご先祖の畑は汗を裏切らぬ　外吉
畑売ったお侘び言うてるお灯明　美代子
畑から帰りクルマを光らせる　重人
おもわくの畑で育つネギ坊主　頂留子
だんだん畑はざんげの数で昏れ残る　作二郎
愛の種蒔けば応える畑の詩　満津子
からゆきさんの船を見送る段畑　作二郎
自由化の波打際で喘ぐ畑　吸江
野心とは遠いところで畑を打つ　みつ子
畑抱いて欲がふくらむ街に住む　吐来

兼題「添う」　辻白渓子選

愛の手が影と寄り添う車椅子　芳子
添うてみて当てのはずれることばかり　みね

に書き、氏名(雅号)明記。投句料一、〇〇〇円同封、6月末日までに左記へ
〒709－36　岡山県久米郡久米南町下弓削　弓削川柳社　西日本川柳大会係

〈第II部〉

兼　題　石原　伯峯選
「乗　る」　海地　大破選
「渡　る」　小松原爽介選
「惑　う」　田口　麦彦選
「宴　」　西尾　栞選
「メダル」　森中恵美子選
「幕　」　安藤富久男選
(当日一題)

特別題
各題2句、当日10時締切(投句拝辞)

参加費　二千円(発表誌・記念品・昼食呈)

記念講演　「言葉と人間関係」(仮題)　酒井　広氏
元NHKアナウンサー

アトラクション　「備中神楽」上演

表　彰　I、II部とも総合10位まで。別にII部合わせ総合3位まで。第II部のみ3才賞あり。特別題は全入選句に呈賞

◎宿　泊　浄土宗特別寺院「誕生寺」を宿舎として斡旋します。宿泊費は一泊一食(朝食のみ)五千円。希望者は8月15日までに弓削川柳社へ

主催　久米南町
久米南町教育委員会
弓削川柳社

風だけが寄り添う北のひとり旅　緑良
添うてから夫の不足ばかり言い　しげお
小さい五指添い寝の母を離さない　柳宏子
骨っぽい男が添うてくれている　太茂津
添うてみて重い日もある夫婦箸　楓楽
添いなれているけどいびき大きすぎ　重人
添い遂げるつもりでしたが気が変わる　み ね
寄り添うて援けあってる身障者　恭昌
菜の花に寄りそうように蝶とまる　すすむ
年寄りへやさしい猫が添い寝する　鬼遊
監督の期待に添うて逆転打　颯云児
花束に添える言葉を選っている　正坊
添うてから欠点ばかり見えはじめ　紫香
添うてからやっぱり思ってた通り　小路
線路添いに悲しい花が置いてある　外吉
一行の添え書き本音覗かせる　千秀
仲人さんの嘘が添うてからばれる　早苗
ぴったりと寄り添うている夫婦箸　白峰
四季の花一片添えて京料理　杜的
来世も添いたいなどと無理を言う　吐来
巣立つ子へ温い言葉は添えずおく　楓楽
今日は非番か妻に連れ添う鬼刑事　度
添うてみてよかった相性気にしてず　月子
あの世まで添う約束をして困り　耕花
添うまでは気付かなかった女ぐせ　白峰
ついて来いその一言にかけて添う　〆女
来世も添う約束はまだできぬ　泰子
墓場まで添い遂げる気の夫婦箸　吐来
肩抱いて運河に添うてゆく夜霧　栞

添書みて威儀を正して来た署長　憲太郎
その時だけ寄り添うている世間体　外吉
添い寝した甘えん坊も二児のパパ　颯云児
川添いの真昼はくらいネオン街　俊平
添う前を宿帳チャンと知っている　しげお
花遍路情けに添うて島巡る　作二郎
寄り添うて猫も一緒に昼寝する　紫香
藤の木が寄り添いテッペン枯れた杉　萬的
添い遂げる決心をした子の寝顔　外吉
寄り添うているのは表札だけである　吐来
もう少し寄り添うようにカメラ言う　白渓子

兼題「重い」　野村　太茂津　選

今はもう小さな仮面さえ重い　千代
一碗の重さよ浮世の恩と義理　寿美
閉じてから命の重さ知るカルテ　緑良
ひと言が過ぎて空気を重くする　昭子
北海の波を見ている重い口　正坊
引き返す決心重い登山靴　藤子
軽口を叩いて重い日が続き　月子
責任を詰めこんである荷が重い　文秋
噂ひとつ乳房へ重くのしかかる　寿子
美濃半紙こんなに重い辞表書く　三男
ライバルからの受話器だんだん重くなる　英子
希望します陛下のお声重々し　栞
一夜漬け石の重さに母が生き　〆女
一枚の紙の掟が重くなる　泰吉
無位無冠重い鎖が外れてる　章久
重そうだから親切はやめにする　史好

葉書き一葉ふせた想いが掌に重い　寿子
捨て台詞重い空気を置いて行き　美代子
札束の重さを紙屋しっている　鬼遊
ランドセルの重さに馴れて風五月　美代子
定年へ虹が重たくなってくる　緑良
荷車のうたがだんだん重くなる　幸
まだ死ねぬ死ねぬ頭陀袋が重い　好啓
一言の善意を重く持ち帰り　吐来
重すぎる空気がジョーク待っている　正坊
手に入れた椅子に重たい枷がある　美代子
正論が重い口から顔を出す　しげお
肩の荷がすこし重たい靴すべり　重人
千羽鶴羽が重くて翔びたてぬ　幸
らせん階段雨の聖書が重くなる　作二郎
深呼吸重い話をこれっきり　英子
隙のない人の隣で気が重い　颯云児
重い過去背負う仏師ののみの冴え　みつ子
三日三晩寝言にまでも重い席　み ね
老いてなお父には父にある重味　吸江
一言の重さゆっくり言葉選る　満津子
その時は矢っ張り重い方にする　芳子
今日の罪今日の心が重くなる　悦郎
島の絵は橋の重さに耐えている　荒介
長らえて重い戦記を生きている　幸
娯しみが溜って重い旅鞄　太茂津

（清記・楓楽）

柳壇

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
担当・玉置重人

川柳化粧櫓　植村客遊子報

雲つかむような話へ乗せられる　岳詩
問題は予算無いのが玉にきず　秋月
逃げ道をちゃんと課長考える　越山
いい笑顔並び夕食年の順　葉香
団子招ばれて歯を入れたのを思い出し　紅月
手相見の微笑が過去の胸を刺す　白李
気にいった柄を派手なと言うてみる　大鷹
凧の糸揚がれあがれとしゃくる妻　礎石
へそくりはタンスの底とは限らない　悲子
争うて出ればやさしい六日月　遊光
控え目な言葉やっぱり苦労人　遊峰
美しいベールに包む嘘ひとつ　サワ子
申告の経費へ税が怖くなり　みつこ
言わぬだけ握っていますよ泣きどころ　輝月
無器用は父親ゆずりと言うておく　とし
薄日さし氷雨そぼ降る喜寿の旅　永楽
底冷えの寺で写経の隙間風　みね子
七福神一人足りない孫の頭　五幸
足袋はいて何んにも無かった顔をする　客遊子

三幸川柳教室　桜井千秀報

山荒れてあんこ椿も灰神楽　孝代
一面に咲いて孤独な白椿　上西幸子
椿咲く里自由化の波に揺れ　邦郎
悲しみの家に椿が赤すぎる　みね
せせらぎの渦にとまどう落ち椿　和子
ひっそりと果てた椿に身を思う　玉枝
ソロバンを弾く恋などせぬ椿　堀畑靖子
風に乗る椿の私語が聞きとれぬ　正
裁き待つ心静かに寒椿　高夫
椿油と亡母を重ねるつげの櫛　延
冬の絵を抜け出せないでいる椿　茜
春彼岸目覚めたように寒波来る　貞子
パチンコが休みで彼岸詣でする　まさお
彼岸来て子が軍神の墓洗う　金一
天王寺の鐘鳴り渡り彼岸来る　正好
曼珠沙華この世の未練たちきれず　三千子
彼岸会や仏は若い夢のまま　千秀
仏より孫の来るのを待つ彼岸　中北幸子
混濁の世でも彼岸に住む願い　清
彼岸花赤字線路の脇で咲く　重次
彼岸会へふる里はまだ雪が降る　智水庵
片思い届けとコイン投げてみる　孝子
速達も届く本日締切日　千枝子
退院のよろこび届け天までも　東浦靖子
宅配便慌てて判の裏を押し　宏
わが家から出たような品が又届き　寿美子
駆落ちへ父に内緒の荷が届き　俊広
手裏剣の届かぬ位置で吠えている　保
寝つかれぬ枕へ届く相聞歌　晏
届かない日から伏目なシクラメン　桂香
食べられぬベッドへメロン又届く　鉄治
母の味届くひとりの夜の膳　布未子
爪先で立ったら届きそうな幸　和子
干からびた女に届く招待状　育子
寄せ書きの温み病んでる子へ届く　カツミ
珍道中まず改札が抜けられず　敬子
珍しく真冬の庭につつじ咲く　松崎幸子
国立大合格みなをたまげさせ　かなめ
窓際で珍重されてる生き字引　朱夏

川柳藤井寺　赤木和子報

この名刺印篭程の力なし　志洋
土筆坊顔見合わせて春ですね　ときお
嘘一つ朝の鏡に裁かれる　治子
二十一世紀月へも橋がかかるだろう　スミ
自問自答貧しい言葉ふり返る　つやこ
今少し雪が欲しいぞスキー靴　三郎
腹割れば案外淋しい人ばかり　吸江
補助椅子の一つを狙う鬼ごっこ　美代子
肩書きが裏につづくという名刺　美房
貰っては困る名刺が捨てられず　喜道
補欠にもメダルかがやく表彰式　作秀
口止めと聞けば全身耳にする　昭子
農村に一番欲しいものは嫁　本蔭棒
ポケットに春の噂も入れてある　与呂志
おばさんも四つ葉が欲しい春の野へ　伴子
形見わけ欲しい大島他にとられ　風来坊
手を切った綱も弱気の戻り橋　祐二
エリートのキップが欲しい塾通い　婦美枝
出稼ぎの父が迎える新学期　末一
甲子園補欠で踏んだ土の色　清子
一二度はドラマあるような花名刺　美佐
ハマコウに内緒話はしないよう　みのる

わかめ汁今更白髪かくせない　敦子
コンパクト負けず嫌いの鼻たたく　正枝
里帰りむかしに戻す橋がある　政代
さかのぼる鮭のふるさと匂う道　ふゆ
島国を道路で結ぶ日が近い　てつお
補欠でもまだまだ男にある戦　きよし
空の青胸のつかえを溶いて欲し　和美
命欲し老い深き日の恋なかば　雅美
お互いの合鍵欲しい距離にいる　彩
彼岸会に仏のお顔ほころんで　初枝
筋道を通し役員辞任する　松亭
名刺見ても一度頭下げ直す　幾
気もそぞろ揺れる吊橋谷渡る　かよ
近づきのあかしに貰う名刺です　秋園
此の橋で日本国中陸続き　清心
大空に誰がかけたか虹の橋　好太郎
いいムード財布の中味気にかかる　秀伸
笑ったら負けだと思う人の前　和子

川柳ねやがわ　高田博泉報

卒業に解き放された青い性　亜成
喪中でも税の督促状は来る　とみ
洗面器水たっぷりと今日がある　曲ん手
三月の柩がこぼす花の彩　章
旨いともまずいとも言わずよく食べる　千鶴子
税金へ不平も言えて国平和　勝美
所得ない身へ申告の封書くる　シマ子
ゲームからはずれて母の台所　佐和子
珍しい声を届ける電話ベル　一途
コロンブスの卵をお土産にもらう　鉱平
なにもかも中途半端のまま八十路　亜鈍
のみながら友の内緒を聞いている　すすむ
新婚はあれもこれもがめずらしい　勇太
めずらしく妻から誘う倦怠期　時弘
ゲーム機に同じ孤独の顔がある　さかえ
正直に一番電車が通り過ぎ　吉之助
珍しく朴念仁が妻を連れ　速水
聞き上手話し上手へ雨もやみ　雅文
花畑翔ぼう卒業証書手に　淳朗
白い塔の上にはいつも雲がある　まさお
卒業へ新たな試練覚悟する　博泉
感嘆符連発妻の電話口　度
合言葉なんかはいらぬ老夫婦　礫
珍客へ控えた酒量又上り　藍子
間接税くどくど言うて呑んでいる　あいき
税金の行方忍者もさぐれまい　頂留子
人生に卒業のない靴磨く　あやめ
めずらしく早う帰れば妻は留守　光子
卒業の度に話題になる国旗　かすみ
それなりに税金納めて老い二人　なつめ
成績をゲームのようにトップの子　君子
めずらしい顔見付けた三面鏡　てまり
嫁さんがとてもやさしくしてくれる　冬葉
卒業をしたら衿足匂い立つ　英壬子
女子パート内職にまで税狙い　紀代
たまに逢う孫はめずらしそうに見て　亜也子
核もって人は愚かなゲームする　良三
まあおめずらしいマダムの営業用の声　敬山
おすそ分けの珍味へのびる酒の箸　小路
不仕合せな女に星がきれい過ぎ　雀踊子
火傷して大人のゲーム幕を引く　おさむ
税税と赤坂病にとり憑かれ　覚然坊
貨車一つ置き去りになる冬の駅　紫香
蛙の子蛙のままに卒業す　薫風

川柳ささやま　脇田米朝報

どん底を支える母の二重顎　文平
荷の重い役こなしてる笑顔よし　ひか平
天秤へどの子も同じ重さです　冨美
裏口に残した亡母の重い石　エキオ
打ち明けて忍ある姑の声を待つ　テル
威勢よい声でセリあう浜の朝　百合子
声のなき遺影の声にはげまされ　千代子
ふと聞いた声に仏間の灯があかい　ヒサ子
失敗はあっても虹は消さず生き　越山
あせる程第一ゲートがくぐれない　米朝
一発勝負失敗してもいい若さ　可住
失敗もスタートラインにして奮起　まさの
命取る鬼が身近に住んでいる　やよい
重点か身近で視野が呆けてくる　素水
良縁が身近にあった夫婦雛　和子
身近故あらぬ誤解の絵をかかれ　靖子

久世川柳クラブ　二宗吟平報

レジャーなら寒いと言わぬスキー靴　つた子
白足袋の似合う女の百合の花　秀香
値打ち出ぬ金貨に夫婦溝ができ　楽山
義理チョコと知っても一寸妬いてみる　伊久栄
ブロイラー一生土を知らず生き　静長
野に咲いて悔いない花の実がはじけ　さわる
お日様が笑うと洗濯しとうなる　保恒
義理の火を消してつめたい風に遭う　明子
万歩計今日も生きてる老いの意地　山人
膳繰りで小さき夢の宝くじ　ふさえ
神経痛いたわり合える共白髪　甫正
融通の利かぬ男が隅に居る　光水

愚痴聞いてあげて和んだ日向ぼこ　吟平
いがみ合う酔客やっと送り出し　虞人
言い合うて平行線の妻も意地　美恵子
一切を嫁に任せて家平和　種子
いっこうに気にせぬ人のまるい顔　千代女
いつか来た道思い出し振り返る　旭泉
いずれ又お願いしますという名刺　邦人
三人の孫が主役の我が家です　英子
ベテランの脇役主役を引き立てる　つゆ草
主役から手を引き余生趣味に生き　禅心
合格の主役をだしにして賀さん　勝子
母さんが主役で家中回る独楽　江山
人間にランクを付ける稼ぎ高　半仙
共稼ぎ夫のボタンに気がつかず　静香
観音をまたいで稼ぐ石屋さん　志重
進んでも困る時計の遅れがち　賛平
出棺に遺児は悲しさまだ知らず　〆女

静岡市川柳塔同好会　永倉僕川報

湯上がりの夫に酌する薄化粧　弧秀
古傷が疼く予報の下り坂　金吾
罪のない寝顔の汚れそっと拭き　紀代志
戦争の傷跡孤児に罪はない　定次
左遷地は雪化粧して待ってます　芳夫
感心をする程でなし入選句　孝平
風船へ空気いっぱい詰めている　庚子郎
万歳をしてだるまにも目が入り　喜平
喋るだけ喋ってストレス置いて来る　やす
湯上がりの肌着に写る乳二つ　たま
肌着まで気遣う祖母の気のくばり　たき
開通へ万歳と言う目出度い日　千代
風邪気味も野良着にかえる子沢山　志げ
メートルに弱い明治の目分量　つね
こじらせた風邪へ余病がまかり出る　きん
肩の荷がおりて心が風邪を引く　きぬ
花粉かな陰口かしら風邪かしら　まつゑ
道しるべ歩けぬ辻の地蔵様　みつ
食卓のメロン下落の値に触れず　静代
飽食の口へメロンを遠ざける　三津子
いい機嫌娘の婿は呑み相手　久子
万歳をさせて脱がせる孫肌着　僕川

川柳はまでら　井上喜酔報

カルガリのスタート今日こそ日の丸が　凡兵
スタートが大事と仲人そっと言い　一郎
春一番スタートしても寒波吹き　泰規
スタート台乗るのが嫌な間接税　昭太
禁煙のスタート口だけ笑う妻　千流
手を上げて別れを惜しんでいるホーム　たかし
そっと手が触れるデートの初体験　悦子
誘惑へそっと手が伸び廻り道　おさむ
手作りの味に愛情こめてある　真知子
友情の心へ触れた手は温い　喜酔

にた川柳会　西村早苗報

彼岸花夢の続きで会いに来る　由郎
親の脛噛って理屈負けて居ず　節子
春雨をたっぷり吸った梅ひらく　宗光
しじみに別れる市民の会増える　三和
親をみるやがて私もみてもらう　哲三
二つ窓昔の蔵が泣いている　雪代
信心に出かけた先で風邪もらい　巡歩
寒つづき蛙当分土の中　花子
息を抜く場所を男は一つ持ち　夢酔
一寸手が触れたぐらいで夫が妬く　紫泉
表札にまだいる亡母の三回忌　景子
不意打ちを五人ばやしの一人から　〆女
足跡に二男三女を産んだ自負　多賀子
断片の記憶を抱いて孤児帰る　晴月
溜息は運勢欄を見て終り　きみえ
盃に酔いが出るわたしのくせがでる　雪子
孫のこと夫婦姑でもめている　寿美子
赤い毬跳ねてはずんで帰れない　鉄花人
さくら咲く土手に人待つ献血車　登美也
せっかちに動く井めしの箸　千草
空想がつづいて仲々ねむれない　雀踊子
寝返りをうった枕がぬれている　雄々
バーゲンへ扁平足の靴さがす　弘朗
ぼろくそに言っても通うものがある

佳句地10選（前月号から）

松本はるみ選

ていねいに砂丘に埋めた冬の恋　雅美
人間の仮面は棺の中で脱ぐ　耕花
雨だれに海の広さはわからない　青湖
妻子あり無念のこぶし持ち帰り　芳仙
灰色もとぼけて居れば白になる　福一
片側の目に言いぶんのあるひらめ　春子
深いふかい念の中で薪を割る　狂虎
床下の鬼が謀反をそそのかす　紫泉
シナリオを書き上げるまでは生きる　世似
ねむり薬が効かないうちに木をゆする　千代

体調も自己診断で茶をにごす　愚童
二三日頭が痛い大ショック　舞吉
気分やで何故か鼻唄よく出る日　秀子
目に入れて試すおんなを待ちたがる　紫吻
目かくしをしたのはきっと君の手だ　早苗

川柳東大阪　森下　愛論報

何の暗示か針一本が落ちている　雀踊子
針一本含むお祝いごっこだな　美幸
足踏みをしても秒針動いてる　恒明
真心を編み込んでゆく毛糸針　庸佑
喝采の中にオマケもきっとある　湖風
売り急ぐオマケにろくな物は無し　白屯
喜寿米寿おまけのように生きている　孤舟
多過ぎたオマケに不安持ちはじめ　喜二郎
寒さきびし次には春というリズム　俊一
寒行に燃えて祈りの掌も凍る　喜風
受け皿がない定年の背が寒い　信治
ドヤ街にもう運命は口にせず　柳宏子
給料前寒い話になってくる　度
人並の努力は運に見放され　美子
占ってほしい地球の運命線　頂留子
そのうちに下る運命の人気株　普吾
運命のいたずらと知るくされ縁　慶三
運命を変えるつもりで離婚する　文秋
仏彫る器用にほれた一本気　滋治

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

点滴に話しかけたい春の雨　虹汀
髪の艶戻って明日は退院す　四郎
住所録女名前で書いてある　旭恒
終点の駅です出口へ殺到し　高明
下手糞も上手も適宜居て楽し　朴竜

過疎に生き土筆へ聞かす童唄　久仁於
いい湯だな極楽猿は古稀の貌　幸夫
砂まんじゅう孫の手形をとっておく　タミ
献血の出来ぬ歳でも血は綺麗　正敏

岸和田川柳会　植山　武助報

卒業の別れ師弟にある涙　こう
いくつまで乗れるか免許書きかえる　冨志子
先生を仲間に入れてチーム出来　さよ子
ゆりかもめ賀茂の流れに見る不倫　寿美子
総理には向かぬ顔だと占師　加代子
定年後流れが急に淀み出す　通彦
熱い湯が好きな子もいる子沢山　楽天
夜のパートひと言添えた膳がある　ダン吉
血のきずな歳月の壁破る孤児　ゆづる
ジーパンが振袖となる巣立の日　浪速子
糸電話もつれ始めた雨もよい　ひで
北風に追われて帰ると鍋が待つ　みのる
赤札の仏壇なんだかすまない気　春栄
温もりが流れる母の子守唄　狸村
中流でよしと桜の群にいる　希久志
叱られた記憶が土蔵の中にある　射月芳
妻のサイン見落していた日の不覚　一弥
弟に加勢を頼む終盤戦　勝晴
シルバーシート素直に受ける外はなし　武助
憐れみは受けない女が席を立つ　初太郎
生き残り昭和も老けてきたもんだ　佳生
絶妙な保津の流れの棹さばき　白光子
急流で今日ももがいている河童　甘平
明治まだ時の流れに打ちとけず　操子

川柳塔からつ佐志教室　浜本　義美報

初恋の目覚め尻尾もついている　一徳

洗濯機中で仲よく嫁姑　茂坊
おみくじをくわえた小鳥よく動く　万亀子
春愁や想わぬ女に想われて　紀一
春がきて一つの棒が外される　治幸
小鳥らも鶯鳶でくる春の庭　喜久夫
蜜柑の木枯らした畑に蕨摘む　順子
笛吹いて鳶は空から花見する　常善
快い疲れ散策庭いじり　ちよ
齢重ね女は強くなりました　冬子
食べて寝るだけの長寿を羨まれ　源吾
一升瓶の口から呷る今日の鬱　義美

打吹川柳会　江原とみお報

まっとうな金だ遠慮せず飲めや　早苗
アメリカと約束したか間接税　宗光
大物は居ない我が家の掘炬燵　規仔
さよならも言わず白鳥北へ翔ぶ　雄々
肥を汲みながら習った農の道　紫映
妥協してもう荷車の綱を引き　たつみ

近畿文字放送作品募集

題「鏡」　森中恵美子選

3句　締切　6月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540　大阪市東区谷町2丁目36
大手前ウサミビル3階
近畿文字放送　川柳係

南窓開けると騒ぐ千羽鶴　雀踊子
黙ってても心が光るから目立つ　典子
父の声小さくなった税申告　巡歩
永字八法しゃらくさいこと孫が言う　杜的
丹精に作った米が邪魔にされ　梅朗
梅の花雪をかぶって春を告げ　吉朗
盛り皿の太い足から蟹が消え　善政
無神論だが大安の日をめくり　柳風
妻のぐち聞いて痛みを薄くする　孝美
星占い飽きぬ女の不仕合せ　紫泉
空まわりした冗談が宙に浮く　倫子
それなりの型にはまった怠けぐせ　ただし
昼間寝て夜半に騒ぐ癖もあり　節枝
カーテンを取替え春の風を呼ぶ　白峰
今だから話すと古希が過ぎてから　佳女
近くでは聞こえぬ振りの地獄耳　幸子
病名を自分で決めて病んでいる　仙岳
近すぎる風がもめごともってくる　節子
待てて待てというから春を待っている　蛍
ものごとを棚ボタ式に思いすぎ　弘朗
うららうららお弔いの花が降る　とみお

大原川柳社　小林　妻子報

雄弁家口下手焚火の輪が和む　みづえ
気にしない性に生れて春うらら　宮子
もどり寒彼岸の入りの雪化粧　辰子
罪一つ着て白日へ歩の乱れ　玉恵
大工事成って男は手を結ぶ　智泉
手内職終えて今宵は春を酌む　朝代
遺言の顛末座布団冷えてくる　理恵
とても優しい音で沁み入る春の雨　元江
おじいさん一番うれしい鯉のぼり　妻子
引き立てる役でいいのよかすみ草　辰江
自己主張通す若さに負けておく　悦子
いい話決めたと電話の声はずむ　たけよ
長島に橋が架って島の春　正己
カンの虫おさえる大きな菓子袋　美代子
わんてんぼおくれて母の処生術　敏子
桜前線何処で足踏みまだ来ない　こふゆ
そこここに芽吹くものあり春の庭　睦子
タイムカード働き蜂の顔になる　みさえ
煩悩を高野の霧に包まれる　素恵子
溜息も恵方に向ける太い寿司　ひでの
忠実に運命を守り花と散る　正子
あの日からタクトがとてもよく動く　あすなろ
検温ヘナース笑顔を忘れない　直二
のんびりと出来る頃には背が曲り　耕花

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

子が孫が祈りをこめた千羽鶴　世似
スランプの真ん中で見た虹の橋　恵美子
発想を変えてスランプ切り抜ける　聖子
母の忌に花束求めるぼたん雪　ヒデ子
花束へあなたも恋をしませんか　鈴江
引退の花束大きすぎないか　智恵子
日本の小銭が地軸揺がせる　清泉
スランプをさっと飛び越す青リンゴ　民子
小銭たちにぎやかすぎて重たくて　かつ子
南海の死者へ花束捧げても　歳栄
スランプの握り拳が空を切る　白汀
持ち駒は小銭ばかりの日がつづき　はるみ

八尾市民川柳会　飯田　悦郎報

遺書だけはノートにしている洒落た奴　年人
哲学の小路を抜けてきたノート　欣之
明治まだチラシノートに趣味の席　喜風
父のノートに春の積木が画いてある　元紀
大学のノートに挟み忘れた隠しメモ　勝美
妻や子に見せぬノートで持ち歩く　みつる
先生が僕のノートを返さない　度
神苑の鶏は気高く尾を垂らし　しんじ
倒産の日もコンペアに生む卵　章
めん鶏が号令かける二日酔い　雅士
ファッションショー鶏のときかが欲しくなる　夕花
ひよこ釣りにされると親鶏想てない　頂留子
子離れのグルメ気分の妻の舌　優
口直しグルメのあとの鮭茶漬け　比沙胡
露天風呂とグルメ訪ねる旅に出る　三男
シャンソンをきいて巴里にいるグルメ　憲太郎
グルメツアー帰れば包丁錆びている　砂輝守
グルメ好きエンゲル系数昇らせる　綾珠
最高のグルメふたりの隠れ宿　律子
巻き添えになる人形の哀しい瞳　泰
みちのくのこけしが母恋うおぼろ月　しづ子
母と子のルーツに触れる指人形　柳伸
しかられた通りに人形しかる孫　晋吾
人形の目は盗めない黙秘権　曲ん手
思い出をまだすてきれぬ姫だるま　とみを
人形の流し目に合う春の宵　枯梢
人形の哀しい過去をもて余す　美幸
無駄話上手に斬ってゆく男　和子
血縁を斬って少年村を出る　シマ子
水溜り目掛けて転ぶ斬られ役　悦郎
斬り死には覚悟正論崩さない　甘平
老残や空を斬るのは父の太刀　湖風

京都塔の会　松川　杜的報

山茶花の八重白じろと昼の月　英子
空想のひととき好きな彩に酔う　白李
一番はすぐに決ったコンテスト　正坊
自分史にいくつかあった落し穴　ただし
我を通す夫無視する事に決め　笑女
郵便箱が鳴るのも風のいたずらか　幸
だし抜けにこ芋の調理たずねられ　はつ絵
後からカモメが追って来るデッキ　花代子
マント着た女がつかう二枚舌　武庫坊
鈴虫に一刻の涼きく夜長　京童
凄腕が一番さきに斬られ役　和友
水中花色鮮かに君を恋う　杜的
すれすれにつばめがくぐるいとやなぎ　陽露子
風に逆らわぬ柳の処世訓　飛鳥
古井戸に柳おばけのアルバイト　三求
水溜り柳のしずくほどの嵩　白渓子
外湯へ行く傘に柳の枝がふれ　水客
ツバメ来て柳と春を戯れる　(松)芳子
演歌にも故郷の柳うつくしい　圭坊
春の風もう猫柳しゃべり出す　〆女
古鏡奥に内緒がありそうな　栄
内緒にも内緒の仕草春の雪　年代
病名をとっくに知っていた患者　達子
お互いの内緒を許している夫婦　求芽
今聞いた内緒がじっとしていない　紫香
戻り寒はしゃぎすぎたと知る土筆　(河)芳子
はしゃぐのは止そう傷つく人がいる　諷云児
訃報手に風のはしゃぎが気にかかる　美智子
はしゃぐ心を静めて逢える場所へくる　礫
教室を出るとはしゃぐ一年生　麗水
陽炎のいのちの中の数え唄　紅陽

井上柳五郎報

地上げ屋がまた計算を替えて来た　博友
計算に弱い男がよく稼ぐ　美智子
計算が外れて老夫婦(ふたり)のわび住い　玉水
計算上手で二着の位置にいる　草風
広辞苑頭を叱る赤の線　吟平
広辞苑めくる楽しさ趣味の道　照路
おらが里視野広々と山の嶺　紫峰
管理者の視野あまりにもせますぎる　中建
盆栽が動き始めた春の視野　哲郎
鈍行でゆるり焦点合わす視野　柳五郎
エリートの視野があまりに狭すぎる　健一
視野広い女史で大根切っている　義親
病む視野に只天井があるばかり　秋月
宰相を辞めてまだまだテロの的　文平
瀬戸の春金と暇とが追いつかず　桃風
サントリー熊襲で消える泡がある　金吾
仏罰は誰に当るかガンダーラ　鮫虎狼
ガラス越しパントマイムの新幹線　佐加恵
玉虫の奥は見させぬガラス張り　たけ志
嫁姑心が和むガラス張り　番茶
燃えて冷えガラス細工の夫婦像　青銅
ガラス拭く妻の横顔光ってる　拓治

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

ロビーから思いがけない花が咲く　富美子
異国の香ホテルのロビーにただよわせ　恵子
抱く雛に名残りがつきぬ空のロビー　朗子
証拠品ロビーに残すシンデレラ　正子
ロビーまで送られている袋帯　花子
愛らしい花にロビーがはなやいで　日枝子
ロビーには一枚の戸もたてさせず　晶子
空港ロビーもしもの鼓動ひそと抱く　玲子
如月のロビーへ春の色溢れ　富枝
切符二枚ロビーでさりげなく捜す　瑞枝
雨のロビー散るやさしさの立ち話　てい子
灯を消すとロビーは海になってくる　千代
ロビーにはふた足早い初夏の風　より子

川柳塔鹿野みか月川柳会　土橋螢報

くもり空自問自答の夢が覚め　智恵子
お早ようと母の笑顔で朝がくる　八重子
メダカ戻れと町内会の川掃除　喜与志
川底の石にも人情悲話がある　幸枝
川ひとつ隔てたとこで物忘れ　洋
濁ったら腐ると川は知っている　けんじ
昔話はいつも川からはじまった　小鹿
すぐそこの川を知らない水たまり　かつ乃
どの風も母はしっかり抱きとめる　雅女
風にのり友の倖せ聞こえたよ　保子
街角で温いこころの風と逢う　としを
北風の中に女をひとり置く　きみ子
陽炎は春風からのメッセージ　くに子
ふりむけば風に心をさらわれる　三千代
セーターの胸だきしめる北の風　奈津子
父の風ぼくを見すえてばかりいる　荒介
蜘蛛になればふんわり風に乗って旅　菩句
春を待つ風が切手の裏にある　千代
一陣の風に素肌は見せられぬ　独歩
手の鳴る方の的には弾丸を詰めてない　静生
標的にならぬところで眠ります　汲香
ゴム銃の的は初恋かも知れぬ　瑞枝
悲しいときは流れる雲に乗ってみる　美っ千
鉛雲いつも私について来る　和子

シクラメン笑顔ころころ春の詩　芙美
笑顔千両職場の花はすぐ売れる　みさ子
少年に笑顔で席をゆずられる　はるお
渋皮がむけて笑顔の恋ひとつ　隆風
雨の日は笑顔の数が少し減る　完司
抜けそうな空が抜けそうな大あくび　花子
忍の字を咬まずに呑んで胃が痛む　房子
忍耐を噛んで奥歯は強くなる　日枝子
真結びと言う宿命に耐え忍ぶ　盛桜
蒼すぎる空は哀しい色やねん　久子
星空の広さを思いひとつ耐え　武子
惜敗へ少年過去は振り向かぬ　富恵
子の描く空はいつでも空色に　正子
身を隠す風は光ってくれている　諷人
空っぽになったらいのちがけになる　蛍

川柳塔まつえ　恒松　叮紅報

堅物で今も忘れぬ帰巣性　鳳人
何かあるぞと堅物に化けてみる　貢範
堅物だったと鴉鳴いている　妻子
堅物が叩いて渡る石の橋　昭二
堅物が意地を通して痩せている　弘円
堅物と堅物ぴたりウマが合い　玄艸
堅物は神の掌の中舞いつづけ　蒼流
堅物の妻にふところあやつられ　市雄
堅物に似合わぬ粋な芸を持ち　静翁
堅物も或る時流れ弾を受け　静恵
先生の堅物生徒なじめない　小生
監督の表情ゆるむホームラン　由郎
矢面に立つ表情を変えぬ人　たつみ
先生の表情やわらぐ回復期　秀子
表情が溶けて本音が見えて来る　満江
野仏も表情ゆるむ春の風　雄々
口よりも先に表情読みとられ　俊治郎
表情を引き締め今日から社会人　みえ
赤ちゃんの百面相を見て飽かず　瑞枝
核心に触れて表情サッと変え　笑円
表情がぱっと変った図星かな　ノブ
表情が固くついつい言いそびれ　君江
甘えてはならぬ大きな父の影　芳枝
ひとつだけ離れた影がもどせない　きみえ
彩のない影絵わたしのドラマめく　多賀子
逆境について来たのは影一つ　三男
ブランコの影も私もはずんでる　操子
私の影と自問自答を繰り返す　代仕男
影武者が欲しいと思う鬱のとき　友子
おぼろ夜を寄りそって行くうしろ影　清志
公園が吸い込むデートの黒い影　翠星
長い影踏みつつ帰る縄電車　愚童
雑踏をさけて二人の影が合い　軒太楼
やけくそで破る馬券は万の金　舞吉
やけくそで開き直ってからの運　まさし
やけくそな心を慰やす母の愛　風子
やけくそで書いた一文字気に入られ　寿美子
やけくそで飲んで倒れて救急車　静江
宿題に先生ヒントちらつかせ　巡歩
仏典のヒントにならぬ天の邪鬼　長三
生活のヒントを買いに旅に出る　幸子
親の出すヒントはいつも馬鹿がつく　与根一
カンニングしたヒントで賞を受け　鶴丸
増税のヒント弱者へ向けている　叮紅

聴障川柳　稲田　豊作報

喜寿祝う軒に老梅凜と咲く　豊作
春匂う梅の香りに窓を明け　承平
紅梅にたしかな春を見つけだし　和江
ねんごろに拭くは真夏を待つ梅酒　進一
梅の春そろそろ女の羽づくろい　珍顔
梅干しのお茶飲んで行く厄払い　一晄
鉢巻きの梅干し甕は時代物　みつる
梅園を引っ張り廻る犬も春　八恵子
遅冬に梅花競って春を呼ぶ　文古
平凡に生きたく梅を漬けている　三香
難聴者梅の鶯聞けもせず　健太郎
梅活けて老い一人住む過疎の家　柳香
ひとり居の友玄関に梅活けて　たみ
春寒の庭に紅梅色香添え　真女
梅咲けば菅公様に一枝を　行江
梅を見る人の思いは様々で　鉄火

西宮北口川柳会　松本　一郎報

疑いを持たず心のキー渡す　春子
だんだんとふくらんでいく小さい嘘　園歩
一年生百円拾って交番へ　英子
下積みで正直者の群れにいる　芳子(松)
両親を招く新居の木の香り　女
自販機の声間のびする昼の街　よし津
けもの道女はあとを振り向かず　佳秋
つまずいた道がだんだん遠くなる　笑女
正直で頭に何か乗せている　達子
信号へいらいらしてる日の株価　青珠
ハンサムを選び転んでいく手毬　光代
無一文の中でふくらむ夢を持ち　きよ子
ストローの中でふくらみつのる思慕　嘉矩
あぜ道で思い出をつむレンゲ摘む　美智子
虚と実を混ぜて綿菓子ふくらます　幸

知ったかぶりの女の金歯よく目立ち　萬的
やさしさがふくらむ恋をしています　静子
青い眼の美人を包む駱駝往く　圭坊
余命表もう迷わない僕の道　散歩
ペアルック道がだんだん広くなる　武庫坊
たんぽぽの道でわたしをとりもどす　はつ絵
ふくらんだ財布を持ったことがない　諷云児
ふくらんだままで風船いたい空　求芽
正直に納めた税にみれんあり　トミエ
正直に話したくない過去ばかり　江美
道が広くて方向音痴になっている　いわゑ
正直に子は絵日記へ母の顔　杜的
招かないのが来て幹事慌てさせ　白渓子
ワイキキで老妻へこっそりアローハーしげお
友だちがいっぱいできたクローバー　正坊
正直に酔ってひょっとこの面被る　ただし
ふくらみをもたせ仏の顔を彫る　恵美子
妄想がふくらんでゆく負けいくさ　(河)芳子
親も子もアイスクリーム花疲れ　てる
ふくらんだ財布は妻が放さない　柳影
招かれて素人芸をほめちぎる　千世子
ハイヒールの音先にやる夜の道　一郎
招かざる客が酒宴の華となり　白宗
父の忌に今日の日銭を花にする　正一
流氷の春に動いて銀曼陀羅　作二郎
正直に言ったばかりに友は去り　香子
控え目に生き母さんの丸い膝　定人
正直な顔で交番行くと留守　東角
道行きの女をつれて鐘が鳴る　伊升
正直な海で牙むくときがある　天樹
てくてくと来ててくてくと帰る父　水声

よい酒が届いて招く友がいる　好啓
結局はオヤジの道を歩いてる　勝紀
道草のつくしも入れた市場篭　花代子
ふくらませてみるからわれることになる　凡九郎
別れ道白い炎を抱いたまま　みつ子
にくらしいことばかりいうさくらんぼ　御前
朝スズメ春を呼び合う鬼瓦　文夫
辞書にない言葉で親をやり込める　芳仙
後もどりできぬ男の道がある　三笑子
舗装道路姥捨山を近くする　千秀
子を持ったししゃも腹から焼けてくる　まさお
する事がまだある老いの縄を綯う　曲ん手
堕ちてゆく道しるべとは思わざり　年代
人波の渦が巻き込む春まつり　ノブ
春うららなんだか恋がしたくなる　みね
矢印を疑ってみる岐れ道　枯梢
別れても思いの募る或別れ　博子
エプロンで歩ける細い道が好き　漠沓
セクシーな貌待合室の月刊誌　米朝
本題は茶漬が終ってからにする　房子
子供との無言の対話弁当箱　六郎太
道草をした子は乗せぬ花電車　善太郎
格好な値段をあさる旅土産　万亀子
親友は一銭五厘の時のまま　茂坊
雪洞の灯に誘われて一分咲き　森生
肩張って漫画の読める合格日　市雄
のらくろを知らぬ世代も漫画好き　保
ガラス窓雨には雨の道がある　荒介
待合室同病話をはずませる　勝美
小袋にふくらむ幸せ多すぎる　紫春
石を積むみんなで泣いた道だから　千代

はげましてくれる人あり花吹雪　太茂津
正直に分けると兄が気にいらず　紫香

堺川柳会

あの時のへまも話の種になり　妻子
弁当に恥じない稼ぎして帰る　豊子
お弁当もう済んだかな足りたかな　薫風
校長はなかなかへまをしてくれぬ　かりん
何かへまして来たらしい肩の線　東雲
雀二羽春だ春だと部屋覗く　あか里
弁当に妻のたくらみ入れてある　半銭
へまばかりしてたあの娘が母になる　楓
弁当の隅しか知らぬ塩こんぶ　千万子
心とは別なわたしがへまをする　月子
いい母になりたくへまもしています　天笑
どの部屋も物がたくさんあり過ぎる　岳人
半世紀前のへまから一つ屋根　頂留子
部屋の音しずかすぎても気にかかり　柳宏子
嫁が来て姑の部屋まで若返り　重人
平日も蟹が動いているグルメ　庸佑
平日の盛り場ゆっくり起きてくる　凡九郎
へまをした今日も愉快な日になった　正坊
ワープロを置いてあるのが父の部屋　鬼遊
禁煙はいつでも出来る喫っている　耕花
天皇の部屋にも枕二つある　曲ん手
駅弁の旨い駅まですかす腹　理恵
弁当の要らぬ日曜寝坊する　寿恵子
アイドルで埋められている孫の部屋　博子
独り居に時計の音が響く部屋　道女
受験地獄部屋から出してもらえない　てるよ
花の下弁当箱が席を取り　芳水
手弁当さげた年金報われる

河内月子報

可愛子ちゃんだから赦してくれたへま　克子
弁当を包んだ新聞読む孤独　与呂志
密談の部屋のガラスが拭いてある　夢成
目の前でへまばかりする好きな人　泰子
惚れた弱味へまをされても気にしない　眉水
弁当を社長も食べる町工場　左久良
ワープロで平日の絵を画いてみる　金三郎
平日はさぼれないまま皆勤賞　初枝
一匹の蠅が出られぬ恋の部屋　真柳
へまやって又挙げている高砂や　秋風
自信ある男が座る部屋の隅　笑痴
どじな嫁姑に似てまた楽し　純枝
返事迫られたばこに火をつける　凡子
部屋住みの息子グルメで小うるさい　彗梢

川柳わかやま　西山幸報

疲れたらおいで古巣はそのままに　克子
思い出の橋かけている亡母の帯　千寿子
ふる里がロケの舞台となる桜　登志代
回想の映画に夢をあたためる　栄美子
春の橋おんなは熱い瞳で渡る　狂虎
束ね髪浮いた噂を寄せつけぬ　輝子
戦争映画に傷跡疼く生き残り　太茂津
本当は古巣お前を待っている　豊太
橋いくつ渡れば森をぬけられる　芳朗
巣造りも出来ず浄土へ来てしまう　好啓
橋越えて隣村から雨が来る　紫香
新しい橋に乾いた人が行く　稚代
その橋の爪に踏絵が伏せてある　武雄
巣作りの下手な女が翔びたがる　恭子
喰いつめて夢は古巣の青い空　天彦
出発の日の掌に浮く野望　緑良
浮いた話無いとは淋し過ぎないか　三男
春の宴浮かれる悲しい猿回し　雀踊子
ちと浮かれ過ぎたと気付く朝の水　萬的
零歳児のプール手に汗握ってる　柳宏子
続編へきれいな橋を架け替える　信秋
橋脚の耳には波の音ばかり　白光子
浮上して空気が美味い海女の春　英子
盃に花を浮かべて春を飲む　忠
白黒の映画わたしの青い春　信子
ふんぎりがついて女は橋渡る　石子
結論が男の海に浮いている　寿子
巣立った子時々へまをやって来る　紀美女
巣立つ日へ厳しき鞭も振り下ろす　桂香
戻れない橋なら渡ろ突っ走る　光代
浮き雲よ明日のお前はどこに居る　照子
春風が虚飾の裾を巻き上げる　忠雄
童心の夢ふくらます映画村　瑞穂
つり橋が揺れて大きな愛ひろう　結実
庶民の避暑居眠りに来たシネマ　静代
巣の奥に生き抜く蜜を蓄える　幸

むらくも観桜川柳大会　藤井明朗報

人情を知って夜な夜な来る狸　紫香
人情のぬくさにむせる握りめし　雀踊子
人間を叱る先生好きになる　美智子
ハンカチで欠伸を包む通夜の席　〆女
総理の生家観光客に所望され　昭子
なかなかに抜けない総理の出雲弁　久仁
人情の渇きを知った都会の灯　舞吉
ふるさとの期待を総理背なに受け　叮紅
総理ならくしゃみも取材の内に入り　与根一
通う度心通じて嬉しい日　静江
卒業の時は総理も以下同文　鶴丸
先生が頼り打ち明けした悩み　早苗
人情のうすれ淋しさ身にしみる　梅園
自転車でそろそろ通う二度勤め　緑水
金いくら積んでも事故死もどらない　雄々
柳友に総理の友を持つ誇り　弘朗
ふるさとの総理でひいき目に見よう　青湖
心通うことがなかった家裁出る　和子
先生が遊び仲間の昼休み　代仕男
先生のお宅も埃積む客間　良子
花柄のハンカチあの娘へ旅みやげ　房子
先生のニックネームにある人気　多賀子
人情を一つ拾った旅の宿　満江
孫の旅ハンカチ振って涙して　ナツエ
美しい嘘がハンカチからこぼれ　正朗
一合で我が家の総理ころり寝る　芳子
子宝の湯へ通うてる夫婦仲　文子
一服のお茶で心が通う朝　延子
人情を知った職場の温かし　武衛
悲しみをハンカチ握る手が耐える　秀子
言葉などいらぬ目と目が通う仲　一葉
目を合わすだけで母子は気が通う　福子
人形の目を描き入れて血が通う　みどり
先生が刺した刺された事件記者　鶏生
国賓へ総理日本の顔で立ち　義良
いつまでも母はハンカチ振っていた　ヤス子
先生に会えぬサクラの花が泣く　きみえ
先生のひよこも育つ花の春　はる代
贅沢になれてはみ出る自由主義　節江
ハンカチを小さくたたんで愛はさめ　ふさえ
車椅子押して老母に見せる花　峰雪

陽と陰を自由に画布へぬってみる　ゆき子
花ひらく人の情けを掌に受けて　嘉寿子
九官鳥お前も自由が欲しかろう　三喜子
手を上げて渡る園児に愛の手を　幸子
人情のうすい都会は味気ない　克子
判決の中に人情生かされる　由郎
路地裏で人の情けに会って来た　昭二
子の通う道石ころをのけておく　ゆう子
先生の手の温もりが忘られず　カツ子
先生の諭し素直に立ち直り　吉野
親の次先生の恩の深さかな　竹乃
先生の情けを知った平手打ち　芳郎
何もかも忘れ花見の人となる　英男
陣取りのように花見の莫蓙を敷き　花子
黄色い旗交通安全園児行く　寿
人情がここにも落ちていた救い　竹雪
酒好きが車は置いてよばれる気　千草
一日を忘れ花見の中にいる　幾子
爆弾を抱え自由主義唱え　巡歩
自由平等嫁がシナリオ書きかえる　明朗

城北川柳会　神夏磯典子報

春うらら新鮮な娘が蝶になる　ふみ
廃線の鉄路にゆれる春の花　きくゑ
露草の感触嬉し試歩の足　右近
夙川の昔なつかし友来る　輝子
押売りのお世辞に負けて鏡見る　ミサエ
エビネラン好きで庭の一部分け　綾珠
蓋をせぬ隣の欠伸移される　文子
感じのいい雲に予約をしておこう　満津子
雑草に生れ名もなく消え去りて　悟郎
色のない風が開いた雲の壁　ただし

新鮮な会話きれいな歯がのぞく　達子
好きだから別れてあげる蛇の目傘　公一
雲走り谷間にかけた高い橋　寿美礼
日向ぼこちょっぴり雲が邪魔をする　温子
ワンテンポ後れて着いた採用書　佐津乃
高嶺の花それでも女衣裳展　登志代
生きている喜びに逢う桜花　市郎
雲ゆきのあやしい姑にはさからわず　敏子
樹にのぼる少年雲へも乗る野心　白峰
手話交す明るい顔へ風光る　静子
雲海をひたすら抜けてパリにつく　倫子
老い独居趣味が心の糧となる　トキワ
ペアウォッチ愛の証を刻む音　純子
うすくうすく切られて恥かしいメロン　テルミ
四月馬鹿つきたい嘘もあった筈　正之
病みつかれ春待たずして友は逝き　八重子
目薬をさしてドラマの続き見る　ふさ子
ボールペン愚痴ぐるぐる書いている　静歩
家計簿に科目がふえて猫の餌　新一郎
先先でトーンをあげて雲を呼び　秀夫
好打順一期劣勢挽回し　午郎
口喧嘩旗色わるく雲がくれ　忠夫
好きな人にいつも指切りしてしまう　笑風
昨日逢った人の訃報よ花の雨　典子

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

柳影が浮かぶ小川をまた埋める　晴治
柳土手メダカ追う子に水ぬるむ　〆女
みの虫が美人の鼻の前に落ち　しげお
旅プラン地図をたどった虫眼鏡　とく子
蔵建ててあととり探す黄金虫　武庫坊
広い胸いつもトンボが来て止まる　つえ子

花のある切手で女から届く　紫香
エアメール切手は聖母マリアさま　慶子
この切手あの人用にとっておく　英子
何とのう記念切手にあるぬくみ　杜的
美人画の切手はすぐに売り切れる　登志実
単身赴任切手の数も増すばかり　登代子
返信を頼んで入れてない切手　白渓子
目分量教える母は慣れている　曲ん手
でんでん虫を見ても母には教えられ　作二郎
美人には教える方も甘くなる　明光
お師匠さんはとってもいけず舞扇　きく子
馬鹿になることも教えて送り出す　諷云児
何かを教える大仏さんの大きな手　萬的
よい日和鏡をふいて心足る　福一
待ちわびて飲めや歌えの花の宴　典子
辛口のエッセイを読む朝の風　正坊
空港に魚河岸がある海の国　圭坊
娘の料理漫画に載っていたと言う　洋子
ちりちりと不平の鈴が鳴っている　よし子
草いきれ植物図鑑の息吹きかも　蕗児
またセンリュ孫がそう言ってるらしい　凡九郎
大橋のたもとに桜植えておく　博史
雑音の聞こえぬあたりに親子住む　隆
人混みを傘差し上げて通り抜け　富子
電車道越えても届く孫の声　花村

南大阪川柳会　中川滋雀報

晩酌の肴にされていた受身　雀踊子
冷や飯を食っても受身にはならぬ　信治
堪忍袋をすこし弛めている受身　智子
逆転の時機を狙っている受身　文秋
勝算はきっちり立っている受身　庸佑

片棒を担ぐ受身の妻がいる　曲ん手
すぐ立てる椅子に受身で掛けている　トミ子
ソロバンははなさず受身になっている　千　梢
いつも受身で女房のしたたかさ　新　造
受太刀になってしまった空威張り　晴　風
一と口は乗って見たい春の嘘　覚然坊
騙されておこう四月の口車　慶　三
虎の子へあの手この手の口車　久　子
口車たねもしかけも見えてます　藤　子
口車女が爪を研いでいる　寿　美
口車老いの財布が狙われる　雅　風
駱駝の鈴が遠い砂からやってくる　作二郎
風紋に砂のいのちが刻まれる　公　一
砂を噛む思いで小さな嘘をつき　滋　雀
大波小波しょせん独りの砂の城　柳　伸
砂をかむ思いがつづく倦怠期　度
子ら騒ぐ波が打ち消す砂の文字　善　信
砂を噛む想いが残る二枚舌　章　久
浜の砂一粒ずつにある個性　喜　風
風紋の砂に残した波模様　しんじ
大陸から春を運んでくる黄砂　勝　美
雨や風神秘に変える砂の紋　シマ子
摘み草のひとときと万葉人になる　楓　楽
野草摘む民話の一つ思いつつ　恒　明
雑草を摘むと隣が気にかかる　憲太郎
摘み草の母子にやさしいあげひばり　頂留子
メルヘンの世界で摘んだれんげ草　優
ベランダの鉢からねぎを摘んで来る　ハル子
悪の芽を摘む気でいたら手を刺され　三恵子
凪の日は岩海苔を摘む浜の人　綾　珠
真っ黒に塗るから疑惑が湧いてくる　白　兎
おんな独り夢が欲しくてルージュ塗る　国　公
塗り椀が剝げて夫婦のまるい背な　重　人
涙は禁物ピエロの厚化粧　冬　葉

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

妥協したときから視野が狭くなる　園　歩
あげた拳齢に免じて妥協する　保　蔵
ネオン街親父他人の顔で居る　正　一
野仏へ春が総出で来て飾る　(河)芳　子
本当の友は言葉を飾らない　諷云児
娘が懐妊飾り窓には武者人形　正　坊
花だより待たずに逝った師を思う　美智子
霊園の一墓カラカラ風車　春　子
先生が好きですお別れ劇のなか　和　友
叱ってる言葉は訛りでも分る　白渓子
先生と書かれた封書がこそばゆし　杜　的
結納を飾って父の一人酒　(松)芳　子
渡月橋人も疎らに春を恋う　英　子
妥協した握り拳が泣いている　〆　女
三流の新聞ばかり売れている　みち子
故郷は錦飾れぬまま遠く　一　郎
先生の投げるチョークがよく当る　紫　香
先生の背な春風になっている　作二郎
先生の下宿を訪えば餅を焼き　水　声
よそ行きの言葉に疲れ足袋を脱ぐ　定　人
咲くさくら話上手も連れてくる　曲ん手
入学式飾りの目立つお母さん　ときお
置床に季節を飾り待ってます　伊三郎
鈍行で金婚式にたどりつき　修　水
先生の機嫌チョークが又折れる　静　夢
ひな飾りことしも母がいてくれる　かね子
人真似がうまくてボスになった猿　佳　秋
ライバルを埋めた穴から白けむり　美代子
表彰の宴で内助が飾られる　歌　子
下向きで咲くから藤は美しい　久美子
夫婦百景風呂の湯があふれ出す　年　代

尼崎おはま川柳会　春城武庫坊報

若い嫁ことばのはしばしトゲがある　保　蔵
零歳の言葉母にはよく解る　弘　治
ホームスティ手振り身振りで言葉出来　美代子
大胆に望みをもって山登り　義　嗣
思いきり大胆春の色を着る　いわお
大胆な盗塁勝ちの流れ変え　貞　吉
大胆に妻が魚の首おとす　定　人
いま塗ったペンキに手型ついている　紫　香
幼な児の夢を育てる花ぬり絵　十四郎
鍵っ子の塗り絵の色は暗くなる　江　美
看板を塗り替え明日の客を待つ　夢之助
嫁が来て自分の彩に塗り替える　すみ
霧晴れて四方の景色塗りかえる　たか
落日が海原を塗る一人旅　歌　子
新婚の弁当皆に覗かれる　敏　之
お化粧をするとすっかり女形　向　西
喪があけて白木蓮の咲き匂う　武庫坊

翠洋会　中西兼治郎報

くちびるのうすい女のまくうわさ　兼治郎
春の午後木陰の本は顔にのせ　さと美
窓開けて蠅一匹の大捕物　萬　里
余生とは思いたくない花ばさみ　美津枝
授かった命を余生とは不遜　恭　昌
此処だけの話ですがと聞くうわさ　すすむ
パレットに余生のかぎり色をぬる　文　子
銀婚の二人の部屋にある静寂　照　子

年金が余生励ますつっかい棒　為子
カラオケの部屋で聞いてる舟の鯛　東雲
人間国宝に余生などなし長い道　楓楽
気に入った間取りとなれば高くなり　良江
親心子心擦れ違うた相撲部屋　綾子
わが城というには小さい部屋ながら　光子
一対のこけしが守る亡姑の部屋　みつ子
チャンづけで大部屋時代の友が呼ぶ　登志実
寝て一畳なんのせまかろ四畳半　いつを
八ツ橋をさげて噂がやって来る　鬼遊

倉吉川柳会　渡辺菩句報

万年床で巣立ちをします門つばめ　康志
しめっぽい母を励まし子は巣立つ　ひろ子
夜桜に行けば綿菓子買ってくる　幸苑
白壁が落ちて民話が掘り出され　あや子
倉吉は土蔵白壁流しびな　碧水
白壁に昔庄屋と書いてある　かつみ
巣立つ子に子離れしない親一人　秋草
巣立っても低空飛行ばかりする　さつき
白壁の天守で歴史呼び戻す　柳風
巣立つ子へ母の一色足してやる　松女
真っ白い壁に汚れた目を洗う　洋
白壁に消えてしまった義姉の影　荒介
白壁に鼻すじ通る姫が住む　瑞枝
人の眼が壁の白さに騙される　秋人
巣立つ子に母の泪は風となる　やえ
巣立つ子になすすべもなき酒を飲む　完司
十日には瀬戸大橋も巣立ちます　次男
左官屋が三年塗った白壁だ　石花菜
掌の中で巣立つ構えの愛娘　ゆり子
ダースの子みんな巣立って老い二人　御前
巣立つ子に過保護の鎖解いてやる　独歩
退院の一歩これを巣立ちということに　菩句

駒つなぎ川柳会　小路報里

私を嫌いな人ならタント居る　凡九郎
あんたなんか嫌いと拗ねる青い恋　射月芳
限界の冷えが家裁の門叩く　悟郎
野仏の鼻が欠けてる冷えている　曲ん手
手のひらを返して女冷えて行く　頂留子
冷えるなと客が愛想の屋台店　しんじ
子を五人味方に妻の太っ腹　比沙胡
落ち着いておれぬ火の粉が飛んでくる　新造
落ち着いた椅子で守りの顔になる　国公
落ちつけば喪主に悲しみ増すばかり　文秋
爪弾きが闇に溶けこむ夜の雨　祥恵
あと五分あると空白埋めている　雅度
片隅で遺児を育てた敗戦記　勝風
片隅の声は知ってるうらの裏　章美
重箱の片隅にある母の夢　東久
ロボットは冷たいけれど味方です　笛雲
天気予報雪というて冷えてくる　柳生
歯痛には勝てずしけてる太っ腹　柳宏子
俺の子にしとけ育てる太っ腹　憲太郎
末っ娘がかたづくまでは落ち着けず　翠公
片隅で鼠逃げ口考える　覚然坊
片すみの時計正しく時を指し　幸治
二人しかおらぬ事務所で仲たがい　潔
一年の計すっかりと冷えている　恒明
ひっこみがつかなくなった太っ腹　雀踊子
落ち着き払っているのは無位無冠　冬葉
落ち着いた場所は三角吹きだまり　壮之助
片隅の古い家紋がよく喋る　美津枝
西陣の片すみにいて文化財　千代三
雪便りしきり落ち着いてはおれぬ　史好
男嫌いの姉とひなあられを食べる　作二郎
邪鬼の目の訴えにあう背が冷える　信治
太っ腹やっぱりわたしも怖かった　庸佑
落ち着いています根回し済んでます　重人
大阪を愛し片すみで生きている　眉水
嫌われていると気づいてないらしい　律子
ガード下の眠りに過去が冷えている　章
泣かれると困ってしまう太っ腹　藤子
落ち着いて通せと針の穴が言う　浩一郎
片隅に黒いリボンのある画廊　萬的
大嫌いやき餅ばっかり焼かすひと　柳伸
片隅に春が芽ぶいている新居　小路

川柳大阪　山下みつる報

宙に浮く自分を意識してはるか　凡九郎
花束に表現力のない男　天樹
汗流す時が男の顔である　眉水
招かれた客も手伝う酒の燗　覚然坊
忙しい心が振り子だけ信じ　与呂志
すこしだけアホーになって忙しい　笑風
裏口は家風にあわぬ蟻の列　喜酔
社を守るための多忙を嬉しがり　希久志
男ぶる奴ほど芯の弱いやつ　正之
裏口は浮世の苦労よくわかる　亮太
松山の松古里の名を上げる　哲流
仲が良い松葉のような夫婦仲　遊心
冬になり松の緑の重み知り　鈍泉
隠れ湯へギャルと珍味の忍び旅　三千雄
裏口を横目で睨む親心　一歩
決断を下す男にある涙　天平

セールスマン歯の浮く話持ち歩く　柳弘
エサの無いうきとは知らぬ釣天狗　鉄心
浮かれすぎ春花桜駅のビラ　あすか
脈ありと見ておもむろに糸をたれ　軒太楼
雪みあげ信州そばと風邪もらう　司
チョコの来ぬバレンタインの春日和　しげお
丁寧なお辞儀に会うて里の道　雅巣
朝やけの今日のドラマは嵐かも　洛酔
決断へもう一押しのネジを巻く　本蔭棒
ふと匂う女の香りに犯される　敏
旗色の悪い男でよく喋る　重人
春風や忙しくなる花の精　金太
積み過ぎた砂利の汚職で再選挙　比呂志

高槻川柳サークル卯の花　河瀬芳子報

よく書けた大きい○でほめてやり　武茂
風船より大きい頬でふいている　紫香
大きくていつもおくれて歩く妻　圭坊
横綱の後に小さく母がいる　陽露子
島は夕映え大きい橋と手をつなぐ　和友
合図したのに彼がこっちにやってくる　暢子
咳ばらい二つ聞こえて席を立つ　スミ子
その都度に合図をくれる父がいる　あきら
目くばせをしたのに妻はよく喋り　とおる
二発目の花火鳴ったら出ておいで　眉水
子の揚げる狼煙をそれと気付かない　(河)芳子
めくばせをまたお喋りに見つけられ　外吉
春の使者土堤からゆっくりやってくる　房子
庶務に数珠借りて代理の使者が来る　白渓子
春うらら使者もたこ焼欲しくなる　杜的
春の使者卒業証書持ってくる　百合子
大根の花をそろそろ使者に立て　年代
器でもないのに使者を買うて出る　諷云児
釣り銭も鉢に入れてる陶器市　(松)芳子
絵こころがラン一色の皿小鉢　多賀子
冬の陽を大事の鉢が追い回す　求芽
柿右衛門の小さい鉢にある重み　静江
平鉢で宿の真鯛の目が動く　春風
摺り鉢のまま注ぎわけるとろろ汁　佐代子
魯山人の鉢でラーメン食っている　真笑
球根の鉢のむこうに春動く　紅陽
少年の瞳にいつまで透ける金魚鉢　みえ子
植木鉢の形で土が捨ててある　礫
胸算用狂った電報サクラチル　越子
啓蟄もびっくりしてる寒い朝　彰一
きっかけを作れば無口よく喋り　花代子
唄で聞く連絡船の消える春　英子
海女もぐる鳥羽の磯辺の火がぬくい　栄子
よもぎつむ春の孤独にひたりつつ　〆女
アホなことばっかり言うている焚火　しげお
三寒四温簞笥の肌着が迷っても　京童
西へ東へ旅のニュースも春になる　萬的
喪服着た日にも馬券を買う男　佳秋
申告の日まで税務署やさしすぎ　さと美
口紅が赤信号に見える春　秀男
アメリカの影に怯える千枚田　晴生
軽い椅子いのちも軽くなってくる　如洲
もう少しいただきますと独り酒　正恣
海峡をもう渡らない連絡船　鬼遊

川柳高知　川竹　松風報

コーヒーを少し残して待ちぼうけ　春枝
予定ではもう着く筈の鍋の湯気　康子
婆さんが背中かいてる鯨尺　春童
辛抱に限度があった離婚劇　一求
辛抱も限度正座がしびれだす　玲
勝つまではなどと辛抱した昔　佳風
辛抱の生涯母のまるい背な　竹萌
慰謝料があれば辛抱などはせぬ　和広
辛抱のおかげ子宝孫宝　千鳥
力説へ握るマイクも汗をかき　和興
力こぶ我も我もと競い合い　恒子
腕相撲孫の力に老いを知り　功
力にはならぬ亭主でよい親父　幸泉
聴力も視力も落ちた酒の量　朱坊
減反が暮しに重くのしかかり　つるき
減反で農を継ぐ子が向を変え　高重
減反を渋る農家もパンを食べ　かず子
実力は金と信じていた誤算　松風
実力はないが人気のある力士　菊野

川柳はびきの　塩満　敏報

時移りお宮の松に冴えた月　隆
人間の非情をさとす冷凍魚　重人
マネキンが一番に着る春モード　美代子
温い眼を背中に受けて松葉杖　吐来
寒椿一本だけが咲き遅れ　みつる
引き出しに離婚用紙がひそんでる　比沙胡
背信をつめて引出し鍵をかけ　与呂志
こいさんとプロムナードは中之島　一屯
合格の喜び丸字で書いてくる　白水
なたね梅雨花びら散らすにくい雨　キミ子
イニシャル僕の心を支配する　たけし
プロ野球テレビが老いの指定席　蛙声
万歩計退屈してる春の雨　利武
あの時に買えば良かったNTT　悦子

悪党も身に覚えある哺乳びん　伴子
子の宝首のゆがんだお人形　葉子
ネクタイが赤に変った新入社　末一
老夫婦夫婦善哉法善寺　隅谷義一
北風に段取り狂うて待つ辛さ　忠宏
山脈の暮色くっきり棟上る　淑子
北風に足を取られた母の杖　清子
彼岸入り小雨優しく墓に降る　トミ子
面映ゆいお世辞また聞く通り雨　満洲子
浮き沈み耐えて築いた今の幸　志洋
浮草の女情に根を下ろす　泰子
指のピストル今日も誰かを撃っている　美津子
足のまめ踏みふみ巡拝西国路　繁男
学校は遊んで塾で勉強し　かつみ
引き出しがすねて私を困らせる　敦子
蕾つけてやっと大事にされる鉢　絢子
サクサクラチルサクラあり揺れる絵馬　昇
窓あけて春の空気へ背延びする　シメ子
はるばるとグラスまで来て寿司を食い　勝男
水瓶が溢れぬうちに逃げ帰る　弘子
北国の無口もゆるみかけて春　昭子
引き出しのまる秘マルサに見抜かれる　優
浮雲に迷う心をのぞかれる　ケイ子
深爪の傷みへ情染みとおる　寿美
人形は一皮むいて山の神　貞子
中空に浮いて奴は肩ゆすり　石橋義一
イニシャルの時計が狂い出す破綻　胡村
自由化の波へジパング浮き沈み　淳一
男たち蜜の匂いに立ちどまり　敏

川柳たけはら　森井　菁居報

きゅうしょくはとてもおいしいな　幼典之
ほいくしょはたのしいともだちいっぱいよ　幼歩美
はるはうれしい一ねんせいになる　幼千枝
おかあさんの目に火がついたこわいよう　小二昌之
おひなさま小さいころにもどりたい　小二史子
サッカーのレギュラー早くなりたいな　小三裕次郎
しんぶんに私の名があるスキーらん　小四視幸
犬の毛がはえかわってる春だから　小四慶子
ひなまつり私そっくりおひなさま　小四聡子
春が来たツクシが一本はえてきた　小四晶美
五年生になる勉強をがんばるぞ　小四晴美
信玄の句をみて思う春心　小五由博
卒業式校歌をおもいきり歌う　中一純平
本当はどっちがよいのか解らない　中二亜貴子
雑草のペースで生きた祖母の知恵　節夫
風呂の下ほんがりほんがり木の根っ子　政己
春あらし殺意ひそかに燃えている　こうじ
素晴らしい出会いを信じベルを押す　菁居
紙兜うちに男の子はいない　蘭幸
年金にならぬ戦さのうずく傷　静水
剃るほどの用件もなし無精髭　静火
ふんわりとどこまでの旅綿ぼうし　シゲヨ
咳ひとつして睨まれたコンサート　一路
一つしかないからなかなか放てぬ矢　不朽
深海魚陽のぬくもりを夢にみる　笑子
菜の花畑よ私は蝶々になって行く　博子
飴玉をしゃぶれば遠き日の甘さ　康子
人を赦しそれから優しい筆づかい　令子
存在感パートの靴の減り具合　淑子
熱の子に心残して朝を出る　房子
雲流る四十五年の歳月よ　太虚
春蘭の香り恋しい人に似る　比呂子
名ばかりの姉弟の春祈る　貞子
頑固さをほぐすお酒が買ってある　ヤスエ
負けてはおれぬ友の祝賀の宴にいる　栄恵
男気を出して失う椅子ひとつ　千恵
笹舟を二つ流して振り向かず　光子
一瞬の彼岸桜に春を見る　愛子
ハンサムも今では孫の馬になる　ふさ枝
昂ぶりをシャワーに流している独り　静風
半眼に魅せられて描く仏頭や　清水
十二支も相性も知らず夫婦仲　俊夫
マニキュアの手が出しにくい握り寿司　麻代
生かされる喜びに会う慈悲の中　八重美
見上げれば亡夫がにらむ有夫恋　雪子
道祖神止まった鳥は動けない　君枝
庭の木々思い出もって生きている　千年枝
娘にかえり飾ってみたいおひな様　喜美子
春一番吹いて耳鼻科に歩を運ぶ　勲
明治大正昭和男が弱くなり　喜久恵
気を使う嫁のうす味好きになり　浪子
逝くまでに片付けておくことばかり　静佳
この辺を倖せとして葱きざむ　トシ江
老いの線写る鏡にさからわず

サークル檸檬　片岡智恵子報

花愛でて思いのたけは言い難く　雅子
茶の席の椿一輪かしこまり　三四子
乗り下りのすきをねらって動くスリ　千代女
幕上げる迄の約束忘れてる　今日子
お見舞いのこころこぼれる雪柳　智恵子
春風に乗せて届けよ我が想い　美緒
あせらない乗り遅れても次が来る　泰子
幕間に電話させこせした男　薫風

6月各地句会案内

	日／時及び題	会場と投句先
尼崎 いくしま	3日(金) 午後1時半より 幻・痛む・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
川柳 わかやま	5日(日) 午後1時より 雨・煙突・拗ねる	和歌山県民文化会館 4F 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
川柳塔 まつえ	5日(日) 午前10時開場 **柳楽鶴丸句画集「自然点火」** **発刊記念川柳大会**	松江市殿町むらくも会館 県民会館前バス停下車徒歩2分一畑百貨店北 会費 3,000円 詳細は81頁参照
八尾市民 川柳会	10日(金) 夕6時より 占い・境遇・教える・どちら	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2—141 飯田悦郎
堺川柳会	12日(日) 午後1時より 枕・満期・曲る・町	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2—9—2 河内天笑
西宮北口	13日(月) 午後1時より はったり・力・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5—25—17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手4枚
南海電鉄 川柳部	16日(木) 夕6時より 自信・ヒント・レントゲン	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株) (川柳部) 不動産管理部管理課 廣井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手1枚
富柳会	16日(木) 午後1時より 正座・成功・青年	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
川柳 ねやがわ	19日(日) 正午より 駅・叱る・誤解・自由吟	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9—9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
南大阪 川柳会	19日(日) 夕6時より 閉口・面倒・英断・冷淡	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1—5—2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
もくせい 川柳会	20日(月) 午後1時より 卵・森・すする・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5—801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	23日(木) 午後1時より 電気・揃う・影・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市宮田町3—8—8 川島諷云児 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚) 各題2句
川柳 東大阪	25日(土) 夕6時より ポスター・和服・偉い・雨	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5—6—23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川柳会	27日(月) 夕6時より 真相・予報・厳しい・名前	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円 (郵券可)、各題3句以内

原稿送り先 (〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

本社6月句会

日時　六月七日（火）午後六時
会場　メンズファッションセンター7階
東区内本町一―一　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角

兼題　おはなし　橘高薫風
「モデル」　藤田泰子選
「狂う」　江口度選
「相談」　河井庸佑選
「魂」　高杉鬼遊選

席題　二題　当日発表　各題三句以内厳守
会費　五百円

★投句は柳箋（4cm×19cm）に一葉一句。
各葉毎に裏面に必ず**氏名明記**。
投句料　**300円**（60円切手5枚）同封のこと。

川柳塔社

7月の兼題　「もつれ」「頑固」「瞬間」「貫く」

7月の本社句会は7日（木）

暑中広告受付

★一口　千円（タテ7cm・ヨコ23cm）
（本誌「柳界展望」の一段＝二、五〇〇円）
（一頁＝一万二千五百円）
★原稿締切・**6月25日必着**
★原稿及び送金先
〒581　八尾市中田二―三〇二
高杉鬼遊方
川柳塔社会計室

●募　集●

八月号発表（6月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
茴香の花（3句・女性）八木千代選

課題吟（5句）
「玩具」　小島蘭幸選
「泳ぐ」　春城武庫坊選
「貝」　錦織文子選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

九月号発表（7月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
茴香の花（3句・女性）八木千代選

課題吟（5句）
「力」　渡辺菩句選
「記憶」　曽我部裕選
「隙」　仲どんたく選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友を限らず。

6月の常任理事会は1日（水）

定価　五百円（送料50円）
半年分　三千二百円（送料共）
一年分　六千三百円（送料共）
昭和六十三年五月二十五日印刷
昭和六十三年六月一日発行
編集兼発行人　西尾巖
印刷所　藤原童心社
〒545　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（六六六）六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

＝編集後記＝

☆今年は花の季になってから寒暖定まらず、風雨にも曝されて「さくらさくらさくらとちるさくら　芳仙」この微妙な句のリズム感と裏腹にわが里の桜はあっという間に散ってしまった。

☆その代りというわけでもないが、有馬と高野山の美しい山の桜を堪能することが出来たのは幸せだった。

☆有馬は、栞主尊と読売フェミリークラブのグループに招かれた。

☆夜、田辺聖子さんに頂いた私家版、おせいの「中年いろはかるた」を拡げて興じた。＜い＞息ぬきの酒が生き甲斐　と尋常な句や、＜は＞腹は借り物、タネも借り物　＜ろ＞ろなかの土地は持って来られず　など現代を辛辣に風刺したもの＜ほ＞ボケとよばれてまだ三月　＜る＞ルンペンする器量もなし　＜な＞内縁に離婚なし　と七面山氏の挑戦されている五・五調もあり、高橋孟氏の洒脱な画とともに、ひと時仲間の声も若返る有様だった。

☆高野山へは五月の連休に参詣した。妻の妹の一周忌が近づいたので、東京の娘の帰阪を機に、長女も相寄り、一家での参詣を思い立ったのである。

☆清賢院でお世話になった御前様は、一昨日が生まれて百日目だったと仰言る曾孫に相好をくずされ、すこぶるお元気に見えた。

☆早朝の本堂での勤行には昨年の立派な田楽塔の過去帳を祭壇に据えて下さり、合掌礼拝することが出来た。

☆高野山には桒井吉野より山桜などの可憐な花が多い。金剛峰寺門前の二本の八重桜も、通り抜けの八重に較べるといかにも優しく淡い。

☆高野四郎を孫娘を抱いてしみじみと聞いた。人もやさしく清々しいに如かずと教えられたようであった。

「奈良二郎つかい果した人も聽き　路郎」の句を思い出した。

☆御前様は「咲き初めし千の一つの牡丹かな　自象」の揮毫を下さった。今頃は美しい牡丹が咲き揃っていることであろう。（薫）

▼〝ふところのメニュー〟はうどんだけとする〝乾隆風〟さんの句である。何だが私のこころを覗かれたような思いである。貧に育てば貧が身につく、メニューと相対する時は、習性のように値段を先に見てしまう。

▼当店の献立はこれこれでありますと言う口上がメニューである。つまり料理品目表、献立表のことである。値段表も時にはかねるが、それではない。小料理屋などで出されるヘギに筆書きされた、本日の献立表がその目的である。

▼何かうまい物を食べに来たのに、欲しい物を素直に注文できない。値段が気になる。それは自前の時だけでない。人様にご馳走になる時も同じである。小料理屋よりらーめん屋の方が、性に合うらしい。私はメニューを値段表と思いこんでいる。

▼家には立派なメニューがある。三つ折の表に居酒屋SUIKODENと印刷してある。ひらくと牛肉タタキ、刺身盛合せなど食欲をそそる料理のカラー写真が溢れるばかりである。「すぐ出来ます！」「焼きたての味」「新鮮です！」など、鉄板料理、一品料理、鍋ものに、それぞれ値段が書いてある。一合の晩酌に私はメニューを開く。この時は不思議に値段を見ない。「シーフードチリソースえび団子」を注文する。「売切れです」と、待っていたように妻が言う。（き）

☆夕刻からの句会まで体があいたので造幣局の通り抜けを見に行った。終戦翌年から今日まで、ずっと大阪に住んでいながら一度も行ったことがなかった。桜がそれほど好きでなかったせいもある。

☆その日はウィークデー、しかも最終日とあって人出は少く、ぶらぶらマイペースで観賞することができたのはありがたかった。しかし桜というのは、やはり散ってこそ風情ありで、その点、八重はいつまでも枝にしがみついているようで、何だか未練たらしい。

☆南門から入り北門へ出、さて最寄りの駅まで、掲示を見ると京橋800m、桜宮800mとある。同じ距離ならば、と桜宮駅の方へ歩くことにした。この辺りは、かの有名なラブホテル街である。いや今はファッションホテルともいう由。御殿かお城みたいなのが立ち並んでいる。しばらく行くと、ちょっと場違いな感じの瀟洒な建物が目についた。看板に〝風がはこんだ物語〟とある。またしばらく行くと〝陽気なこびと〟というのがある。どちらもホテル。昨今はネーミングも奇抜でおかしなのがふえたが、これなんかはメルヘンチックで、なかなかよろしい。お手々つないで口笛吹いて、そんな気分にさせてくれる。

☆その夜、句会は全没。きっとセンク色の空気を吸いすぎたせいだ。（史）

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和六十三年五月二十五日 印刷
昭和六十三年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七三三号

川柳塔

六月号

定価 五百円（送料 五十円）

料理がいきる
辛口の本格派

伝統の味を贈りものに……

菊正宗

日本酒で乾杯！

神戸・灘
菊正宗酒造株式会社

5つの個性・5つの色味!!

アイスキャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時

なんば戎橋店本店
なんば高島屋百貨店
梅田高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
そごう百貨店
京阪モール店
サンストアロッコ道店
サンストアエ定橋店
ドヘノ近鉄百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店
なんば新川店
近鉄まち店
ドーチカ店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
阪急店

551 HORAI

大阪・なんば
蓬莱
TEL 641－0551

雑誌 05703－6